長野市の埋蔵文化財第95集

綿内遺跡群 高野遺跡

——長野市綿内中央土地区画整理事業地——

1999・3

長野市教育委員会

序

長野市域には1,300余の遺跡が周知されています。なかでも千曲川の両岸には自然堤防が発達し、帯状に遺構密集度の高い弥生時代以降の遺跡が複合して形成されるといった特色があります。綿内地域においても自然堤防が複雑に形成され、近年榎田遺跡のような大規模遺跡が次々と調査されるようになりました。

一方、この地域は高速交通網の整備に伴って各種の大型開発事業が進展しており、市街化の傾向にあります。これらと共に住宅の需要に応じて下水道などの整備改善、快適な住空間を求めて12㌶におよぶ土地区画整理事業が施行されることになりました。

この事業地は良好な自然堤防上にあたり、遺跡の範囲・性格を把握するため試掘調査をいたしましたところ、弥生時代から平安時代にかけての大遺跡であることが判明いたしました。そこで埋蔵文化財の保護協議にもとづき、開発事業に先立って平成８・９年度に発掘調査を実施し、記録保存をはかることになりました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財 第95集」として報告いたします。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として関係各方面に広くご活用いただければ、この上ない喜びであります。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり、多大なご支援をいただいた関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

長野市教育委員会教育長　久保　健

例　言

1　本書は、長野市綿内中央土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書である。

2　調査は、長野市綿内中央土地区画整理組合理事長原田忠二と長野市長塚田 佐との委託契約に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。

3　調査地は、長野市若穂綿内字高野6,336番地他に所在する。

4　調査は、地下埋設施設等で遺跡破壊の恐れのある道路部分を対象にしたが、宅地造成計画を検討したところ削平部分が生じることが判明し、3,600㎡を追加保護対象とした。総保護対象面積は12,700㎡である。

5　本書は、発掘調査によって検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。

6　現況地形図等は土地区画整理組合より提供を受けた。微地形推定図は地点標高値を参考にして作製した。

7　遺構測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準として、コーデックシステムを採用するため㈱写真測図研究所へ委託した。

8　遺構図は、1：80の縮尺を基本とし、井戸址・土壙墓・火葬址の一部を1：40、溝址を1：160で提示した。断面の数値は、標高380ｍ＋数値ｍをあらわす。

9　掲載図中、ＳＢ（住居址）・ＳＫまたはＫ（土壙）・ＳＥまたはＥ（井戸址・大形土壙）・ＳＤまたはＤ（溝址）の略号をもちいた。住居址図中、鎖線内は堅緻な床面、アミ部は焼土・炭化物をあらわす。

10　遺物図は、玉類を実寸、土・石・金属製品を1：2、土器類を1：4の縮尺で掲示した。弥生式土器実測図中のアミ部は赤彩を示し、土器断面の塗りつぶしは須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器である。

11　遺跡の略号は「ＴＫＮＯ」とした。

12　本書の執筆は、千野浩（Ⅳ－１－４）、飯島哲也（Ⅲ－１）、山田美弥子（Ⅰ－３・４）で、他は矢口忠良が担当した。

13　調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

目　次

序
例　言
目　次

Ⅰ　調査の経過……1
　1　調査に至る経過……1
　2　発掘調査の事務経過……2
　3　調査日誌（抄）……3
　4　調査の体制……4
Ⅱ　調査地周辺の環境……6
　1　地理的環境……6
　2　考古学的環境……10
　3　古代の歴史的環境……12
Ⅲ　調査概要……13
　1　試掘調査……13
　(1)調査の目的……13　(2)調査方法……13　(3)調査結果……13
　2　調査の方法……13
　3　調査地の概要……15
　4　遺構の分布……17
Ⅳ　遺構と遺物……18
　1　弥生時代の遺構と遺物……18
　(1)遺構の分布……18　(2)住居址……20　(3)土壙……21
　(4)遺物……37
　2　古墳時代の遺構と遺物……71
　(1)遺構の分布……71　(2)住居址（前期）……72　(3)住居址（後期）……73
　(4)遺物（前期）……80　(5)遺物（後期）……80
　3　奈良時代の遺構と遺物……86
　(1)遺構の分布……86　(2)住居址……86　(3)掘立柱建物址……86
　(4)遺物……86
　4　平安時代の遺構と遺物……88
　(1)遺構の分布……88　(2)住居址……88　(3)柱穴（土壙）群……90
　(4)小鍛冶址……90　(5)井戸址……90　(6)土壙墓……90
　(7)火葬址……90　(8)溝址……90　(9)遺物……164

挿 図 目 次

図１　調査地(● 印) および川中島扇状地図 …… 6
図２　調査地(● 印) おとび周辺地形図 …… 7
図３　長野市防災基本図地形分類図 …… 8
図４　調査地周辺の字境図 …… 9
図５　主要遺跡位置図 …… 10
図６　綿内遺跡群と近隣の遺跡分類図 …… 11
図７　試掘調査地および土層柱状図 …… 14
図８　微地形推定図 …… 15
図９　調査区遺構分布図 …… 16
図１０　A区・E区・W区弥生時代刷毛住居址分布図 …… 18
図１１　弥生時代後期遺構分類図 …… 19
図１２　A区・X区・Y区弥生時代後期住居址分布図 …… 20
図１３　A区弥生時代後期住居址実測図(1) …… 23
図１４　A区弥生時代後期住居址実測図(2) …… 24
図１５　A区弥生時代後期住居址、土壙実測図(3) …… 25
図１６　B区・C区弥生時代後期住居址、溝址実測図 …… 26
図１７　E区弥生時代後期住居址実測図 …… 27
図１８　W区弥生時代後期住居址、土壙実測図 …… 28
図１９　X区弥生時代後期住居址実測図(1) …… 29
図２０　X区弥生時代後期住居址実測図(2) …… 30
図２１　X区弥生時代後期住居址実測図(3) …… 31
図２２　Y区弥生時代後期住居址実測図(1) …… 32
図２３　Y区弥生時代後期住居址実測図(2) …… 33
図２４　Y区弥生時代後期住居址実測図(3) …… 34
図２５　Y区弥生時代後期住居址実測図(4) …… 35
図２６　Y区弥生時代後期住居址実測図(5) …… 36
図２７　A20 号(1)、A29 号(2)、A31 号(3)、A35 号(4 ~ 9)、A48 号(11 ~ 13)
住居址出土土器実測図 …… 40
図２８　A45 号(14 ~ 27) 住居址出土土器実測図 …… 41
図２９　B11 号(28・29)、C(30 ~ 40) 住居址出土土器実測図 …… 42
図３０　C 7 号(41)、C8 号(42)、E8 号(43)、W12 号(44 ~ 49)、W13 号(50 ~ 52)、W14 号(53 ~ 56)
住居址出土土器実測図 …… 43
図３１　X18 号(57 ~ 63)、X25 号(64・65)、X28 号(66 ~ 68)、X29 号(69 ~ 71)、X52 号(72・73)
住居址出土土器実測図 …… 44
図３２　X41 号(74 ~ 82)、X45 号(83 ~ 88)、X50 号(89) 住居址出土土器実測図 …… 45
図３３　X 5 4 号(90 ~ 92) 住居址出土土器実測図 …… 46
図３４　X48 号(93 ~ 97)、X51 号(98 ~ 104)、Y11 号(105 ~ 111) 住居址出土土器実測図 …… 47

図３５　Ｙ11 号(112 ~ 118)、Ｙ16 号(119)、Ｙ24 号(120 ~ 122)、Ｙ29 号(123 ~ 125)、
Ｙ31 号(126 ~ 129)、Ｙ31 号･32 号(130 ~ 132)、Ｙ36 号(133) 住居址出土土器実測図 …… 48
図３６　Ｙ30 号(134 ~ 143) 住居址出土土器実測図 …… 49
図３７　Ｙ32 号(144 ~ 151)、Ｙ34 号(152 ~ 155) 住居址出土土器実測図 …… 50
図３８　Ｙ51 号(156 ~ 161)、Ｙ52 号(162163)、Ｙ74 号(164165)、Ｙ75 号(166)、
Ｙ76 号(167 ~ 169)、Ｙ７７号(170 ~ 173) 住居址出土土器実測図 …… 51
図３９　Ｙ71 号(174 ~ 183) 住居址出土土器実測図 …… 52
図４０　Ｙ78(184)、Ｙ81 号(185 ~ 189)、Ｙ82 号(190 ~ 193)、Ｙ83 号(194 ~ 196)
住居址出土土器実測図 …… 53
図４１　Ａ50 号(197 ~ 201)、Ａ89(202203)、Ｗ４号(204 ~ 207) 土壙出土土器実測図 …… 54
図４２　Ｂ６号溝址(208 ~ 210)、Ｃ11 号溝址(211 ~ 215)、Ｃ区遺物集中区(216 ~ 218)
出土土器実測図 …… 55
図４３　Ｃ区遺物集中区(219)、Ａ区(220 ~ 230)、Ｂ区(231)、Ｃ区(232･233) 出土土器実測図 …… 56
図４４　Ｇ区(234･235)、ＨＫ(236)、Ｗ区(237･238)、Ｘ区(239 ~ 248) 出土土器実測図 …… 57
図４５　Ｘ区(249 ~ 258)、Ｙ区(259 ~ 267) 出土土器実測図 …… 58
図４６　Ｙ区(268 ~ 277)、Ｚ区(278) 出土土器および土製品類(279 ~ 282) 実測図 …… 59
図４７　古墳時代遺構分布図(アミ部前期、黒塗後期) …… 71
図４８　Ｈ区Ⅰ区遺構分布図 …… 72
図４９　Ｈ区古墳時代前期住居址実測図 …… 74
図５０　Ⅰ区古墳時代前期住居址実測図(１) …… 75
図５１　Ⅰ区古墳時代前期住居址実測図(２) …… 76
図５２　Ⅰ区古墳時代前期４号住居址実測図(３) …… 77
図５３　古墳時代後期住居址実測図(１) …… 78
図５４　古墳時代前期住居址実測図(２) …… 79
図５５　Ⅰ区古墳時代前期住居址出土土器実測図(１) …… 81
図５６　Ⅰ区古墳時代前期住居址出土土器実測図(２) …… 82
図５７　(上段) Ｈ区古墳時代前期住居址出土土器実測図
(下段) 古墳時代後期住居跡、土壙出土土器実測図 …… 83
図５８　奈良時代住居址分布図 …… 87
図５９　平安時代住居址分布図 …… 89
図６０　Ａ区住居址土壙ピット群分布図(粗アミ部弥生時代) …… 91
図６１　Ａ区住居址実測図(１) …… 93
図６２　Ａ区住居址実測図(２) …… 94
図６３　Ａ区住居址実測図(３) …… 95
図６４　Ａ区住居址実測図(４) …… 96
図６５　Ａ区住居址実測図(５) …… 97
図６６　Ａ区 37 号(右)･38 号(左) 住居址･３号土壙実測図 …… 98
図６７　Ｂ区(左)･Ｃ区(中) Ｄ区(右) 住居址分布図 …… 99

図６８　B区住居址実測図(１) …… 101
図６９　B区住居址実測図(２) …… 102
図７０　C区住居址実測図(３) …… 103
図７１　D区住居址実測図(１) …… 104
図７２　D区住居址実測図(２) …… 105
図７３　F区(左)・G区(右) 住居址分布図 …… 106
図７４　F区住居址実測図(１) …… 108
図７５　F区住居址実測図(２) …… 109
図７６　F区住居址実測図(３) …… 110
図７７　G区住居址実測図(１) …… 111
図７８　G区住居址実測図(２) …… 112
図７９　W区・Z区(上)・E区(下) 住居址分布図(アミ部弥生時代) …… 113
図８０　E区住居址実測図(１) …… 115
図８１　E区住居址実測図(２) …… 116
図８２　W区住居址実測図(１) …… 117
図８３　W区住居址実測図(２) …… 118
図８４　Z区住居址実測図 …… 119
図８５　A(横字)・X(逆字)・Y(正字) 区住居址建物址分布図 …… 123, 124
図８６　X区住居址実測図(１) …… 125
図８７　X区住居址実測図(２) …… 126
図８８　X区住居址実測図(３) …… 127
図８９　X区住居址実測図(４) …… 128
図９０　X区住居址実測図(５) …… 129
図９１　X区住居址実測図(６) …… 130
図９２　X区住居址実測図(７) …… 131
図９３　Y区住居址実測図(１) …… 132
図９４　Y区住居址実測図(２) …… 133
図９５　Y区住居址実測図(３) …… 134
図９６　Y区住居址実測図(４) …… 135
図９７　Y区住居址実測図(５) …… 136
図９８　Y区住居址実測図(６) …… 137
図９９　Y区住居址実測図(７) …… 138
図 100　Y区住居址実測図(８) …… 139
図 101　Y区住居址実測図(９) …… 140
図 102　A区・D区・F区建物址実測図 …… 141
図 103　X区建物址実測図 …… 142
図 104　A区土壙(ピット) 群実測図 …… 143
図 105　E区井戸址(土壙) 実測図 …… 144

図 106　X区井戸址実測図 …… 145
図 107　土壙墓・火葬址実測図 …… 146
図 108　A区土壙実測図(1) …… 148
図 109　A区土壙実測図(2) …… 149
図 110　B区土壙実測図 …… 150
図 111　C区土壙実測図 …… 151
図 112　D区土壙実測図 …… 152
図 113　E区土壙実測図 …… 153
図 114　F区土壙実測図 …… 154
図 115　G区土壙実測図 …… 155
図 116　W区・Z区土壙実測図 …… 156
図 117　X区・Y区土壙、溝址分布図 …… 157
図 118　X区・Y区土壙実測図 …… 158
図 119　A区・B区溝址、土壙実測図 …… 159
図 120　C区・D区溝址、土壙実測図 …… 160
図 121　E区・F区溝址実測図 …… 161
図 122　H区・Ⅰ区溝址実測図 …… 162
図 123　G区・W区・Z区・X区溝址実測図 …… 163
図 124　A区住居址出土土器実測図 …… 165
図 125　A区住居址出土土器実測図 …… 166
図 126　A区住居址出土土器実測図 …… 167
図 127　B区住居址出土土器実測図 …… 168
図 128　B区住居址、土壙、溝址出土土器実測図 …… 169
図 129　C区・D区住居址、土壙、溝址出土土器実測図 …… 170
図 130　D区住居址出土土器実測図 …… 171
図 131　E区住居址、土壙、溝址出土土器実測図 …… 172
図 132　F区住居址出土土器実測図 …… 173
図 133　F区住居址、土壙、溝址出土土器実測図 …… 174
図 134　G区住居址出土土器実測図 …… 175
図 135　G区・W区住居址、土壙、溝址出土土器実測図 …… 176
図 136　X区住居址出土土器実測図 …… 177
図 137　X区住居址出土土器実測図 …… 178
図 138　X区 19 号住居址出土土器実測図 …… 179
図 139　X区住居址出土土器実測図 …… 180
図 140　X区住居址出土土器実測図 …… 181
図 141　X区住居址出土土器実測図 …… 182
図 142　X区・Z区住居址、土壙、溝址出土土器実測図 …… 183
図 143　Y区住居址出土土器実測図 …… 184

図 144　Y区住居址出土土器実測図 …… 185
図 145　Y区住居址出土土器実測図 …… 186
図 146　Y区住居址出土土器実測図 …… 187
図 147　Y区住居址出土土器実測図 …… 188
図 148　Y区住居址出土土器実測図 …… 189
図 149　Y区土壙、溝址出土土器実測図 …… 190
図 150　調査地出土灰釉陶器実測図(6 ~ 8・20) は再掲図) …… 190
図 151　土製品・角製品石製品実測図 …… 191
図 152　金属製品実測図 …… 192
図 153　鉄製品・石製品実測図 …… 193

I　調査の経過

1　調査に至る経過

締内中央土地区画整理事業地における埋蔵文化財の所在は、近年まで開発行為がこの地域までおよばなかったことにより不明に近かった。ただ、事業地南端の旧千曲川河川路をはさんで対岸の微高地には菱田遺跡があり、古町地籍から平安時代土器が採集されており、埋蔵文化財の包蔵地の可能性を秘めていた。

平成６年５月に長野市都市開発部区画整理課長名にて埋蔵文化財発掘調査経費について照会があったものの、土地区画整理事業は具体化していなかった。この照会に対し調査費の積算基準資料を送付するとともに、事業の実施に際し試掘調査のうえ保護措置を協議したい旨回答する。平成７年３月に至り試掘調査の協議があり、土地区画整理組合設立後早急に実施することを確認する。その時期は12月以降になる見込みとのことであった。

これ以降の経過については次節のとおりである。

調査地及び周辺の航空写真（平成２年６月撮影、㈱ジャステック）

2　発掘調査の事務経過

［平成８年度］

５月９日付　「開発行為に伴う埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」

５月16日　試掘調査実施。

５月21日付　「埋蔵文化財確認調査の結果について（報告）」別記。

８月19日付　文化財保護法57条の２第１項の規定に基づく届出受理。施工事業面積12,43㎡。23日付県教育委員会教育長宛進達。

９月２日付　文化財保護法98条の２第１項の規定に基づく通知提出。

９月３日付　県教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」

９月５日付　「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」

９月30日付　「埋蔵文化財発掘調査協定書」締結。保護対象面積9,100㎡、平成８・９年度発掘調査、10年度整理・報告書刊行。総調査事業費54,300千円。

９月30日付　「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」締結。長野市若穂綿内字高野6,336番地他、調査面積2,700㎡、調査費14,200千円。

10月６日付　「重機等賃貸借契約書」「プレハブ等賃貸借契約書」締結。

10月７日～12月26日、２月28日～３月28日　発掘調査実施（稼働64日）。

10月11日付　「遺構測量業務委託契約書」締結。

３月31日付　「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」締結。「発掘調査委託業務実績報告書・精算書」提出。

［平成９年度］

４月１日付　文化財保護法57条の２第１項の規定に基づく届出受理。３日付進達。

４月３日付　文化財保護法98条の２第１項の規定に基づく通知提出。

４月４日付　「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」締結。調査面積3,000㎡、調査費24,386千円。「重機等賃貸借契約書」「プレハブ等賃貸借契約書」締結。

４月21日付　「遺構測量業務委託契約書」締結。

４月22日付　県教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」

６月30日付　「埋蔵文化財発掘調査（増面積）について（依頼）」増調査面積3,600㎡。

10月28日付　「遺構測量（増面積）業務委託契約書」締結。

12月22日付　長野中央警察署長宛「埋蔵物発見届」、県教育長宛「埋蔵物保管証」提出。県教育長・組合理事長宛「発掘調査終了届（通知）」提出。

12月26日付　「埋蔵物の文化財認定について（通知）」

２月６日付　「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」締結。「発掘調査委託業務実績報告書・精算書」提出。調査面積6,600㎡、精算額24,575,661円。

［平成10年度］

４月６日付　「埋蔵文化財発掘調査（整理）委託契約書」締結。

３月26日付　「発掘調査委託業務実績報告書・精算書」提出。精算額6,921,000円。

３月31日付　『綿内遺跡群　高野遺跡－長野市綿内中央土地区画整理事業地－』刊行。

3　調査日誌（抄）

［平成８年度］

10月２日　調査地境界杭等現地確認。

10月９日　Ｂ・Ｃ区表土除去。11日調査用機器材搬入。

10月14日　Ｄ区表土除去。Ｂ・Ｄ区遺構検出後２班編成で調査開始。

10月16日　Ｆ区表土除去・遺構検出。

10月17日　Ａ区（Ｂ区以南）表土除去・遺構検出～20日。

10月22日　Ｃ区調査終了。25日Ｂ区調査開始～11月13日終了。30日Ｄ区調査終了。

11月７日　Ａ区調査開始。Ａ区のうちＢ・Ｄ間表土除去・遺構検出。

11月19日　Ｂ区二次面除去・遺構検出後調査再開～21日終了。

11月20日　Ａ区西側に工事用道路建設のため南よりＸ・Ｙ・Ｚ区を設定。調査開始～12月16日終了。Ａ区調査継続。

12月27日～２月27日　調査中断。

２月28日　Ａ・Ｅ区表土除去、遺構検出後調査再開。

３月12日　Ｆ区表土再除去。13日Ｆ区遺構検出後調査開始。

３月14日　Ａ区のうちＤ区以南調査終了。24日Ｅ区調査終了。

３月26日　Ｄ区ＳＢ８・９調査開始。28日Ｄ・Ｗ接点地遺構検出。

［平成９年度］

４月９日　Ｄ東・Ｇ区表土除去後遺構検出・調査開始。Ｆ区調査継続。

４月10日　Ｄ区調査終了。14日Ｆ区調査終了。

４月17日　Ａ区のうちＤ・Ｅ区間調査開始～30日終了。Ｇ区調査終了。

４月21日　Ｗ区北調査開始～25日終了。

４月23日　Ｈ・Ｉ区およびＺ区（参道西）表土除去。Ｈ区遺構検出。Ｚ区遺構なし。

４月25日　Ｉ区遺構検出後調査開始～６月３日終了。

５月６日　Ｈ区調査開始～６月11日終了。遺物洗浄開始。

６月９日　Ｙ区（道路部）表土除去。11日遺構検出。12日調査開始～７月31日終了。

６月24日　Ｆ区西（神社裏）表土除去・遺構検出後調査開始～25日終了。

７月18日　Ｘ区（道路部）表土除去後遺構検出。28日調査開始～９月30日終了。

７月24日　信州大学付属中学校生徒３名体験学習。

８月29日　Ｗ区（神社横）表土除去後遺構検出。30日調査開始～９月17日終了。

９月２日　Ｚ区（参道東）表土除去・遺構検出後調査開始～25日終了。

９月18日　Ｙ区（宅地）表土除去・遺構検出～24日。調査開始～11月10日終了。

10月20日　Ｅ区のうちＡ・Ｆ区間表土除去・遺構検出後調査開始～22日終了。

10月29日　Ｘ区（宅地）表土除去・遺構検出～11月11日。30日調査開始～11月28日終了。

11月20日　Ｙ区（宅地）二次面表土除去・遺構検出。28日調査開始～12月12日終了。

12月９日　Ｘ区（宅地）二次面表土除去・遺構検出後調査開始～18日終了

12月18日　調査機器材撤収し、現場における作業を終了。
12月19日　遺構測量をもって現場における作業を完了。

4　調査の体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査および史跡等の保護保存にかかわる調査は長野市教育委員会社会教育課が担当し、開発行為に対応する緊急発掘調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。

高野遺跡における組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	滝沢忠男（～平成10年12月）久保　健（12月～）
総括管理者	埋蔵文化財センター所長	丸田修三（平成８・９年度）小林重夫（10年度）
庶務係	主幹兼所長補佐兼庶務係長	小林重夫（平成９年度）
	所長補佐兼庶務係長	小林重夫（平成８年度）宮沢秀幸（10年度）
	職員	青木厚子
調査係	所長補佐兼調査係長	矢口忠良（主任調査員、遺物実測・報告書編集）
〃	兼務（社会教育課学芸主査）	青木和明
〃	主査	千野　浩（弥生式土器実測・浄書・版組・執筆、遺物写真）
〃	主事	飯島哲也（事前協議・試掘調査）
〃	〃	風間栄一
〃	〃	小林和子（主任調査員、平成８年度）
〃	専門主事	清水　武（平成８・９年度、調査員、遺物整理）
〃	〃	荒木　宏（10年度、調査員、遺物整理）
〃	専門員	中殿章子
〃	〃	山田美弥子（調査員、遺構写真、遺構整図・基礎データー作成）
〃	〃	西沢真弓
〃	〃	小野由美子
〃	〃	堀内健次
〃	〃	藤田隆之
〃	〃	小林まゆ佳
〃	〃	勝田智紀（調査員、平成８年度）
〃	〃	清水竜太（10年度）
〃	〃	宮川明美
	整理調査員	矢口栄子（遺物実測）、青木善子（遺構・遺物浄書）、武藤信子（遺構浄書）、池田寛子（遺構浄書）、西尾千枝（遺構整図）

遺構測量業務委託　㈱写真測図研究所

［平成８年度発掘調査従事者］

芦田久子・雨宮弘子・雨宮ふじ・池田賢二・池田　満・一色茂喜・稲田きく子・上野いくよ・大峡良子・金井寿美子・金井　覚・北原茂子・北原芳子・北村範子・小林利夫・小林信子・小林ゆり・駒村きよ子・駒村ひろ子・

小山くによ・滝沢せつ・滝沢美和子・田村茂子・橋爪孝次・林　栄男・丸山一代・峰村文則・宮沢とし子・望月ミツ

［平成９年度発掘調査従事者］

芦田久子・雨宮弘子・雨宮ふじ・池田賢二・池田　満・一色茂喜・稲田きく子・大峡良子・大峡　満・金井　覚・北原茂子・小林利夫・小林信子・小林幸雄・小林ゆり・駒村きよ子・駒ひろ子・小山くによ・滝沢せつ・滝沢美和子・田村茂子・橋爪孝次・林　栄男・丸山一代・峰村文則・宮沢とし子・望月ミツ・山中雄介

［平成９年度整理作業従事者］

芦田久子・金井寿美子・滝沢せつ・田村茂子

［平成10年度整理作業従事者］

岡沢治子・倉島敬子・小泉ひろ美・関崎文子・田中はま江・田中むつ子・塚田容子・徳成奈於子・富田景子・西尾千枝・松沢ナオエ・村松正子

長野市綿内中央土地区画整理組合理事長 原田忠二・同副理事長 駒村友治・同望月清明・事務局長 滝沢利太郎、都市開発部区画整理課長補佐 鵜野芳男・同主査 大峡幸良・同主事 小林弘和、飯島建設㈱ 坂井尚行・原田俊次、㈱北條組 滝沢延行、北野建設㈱ 柳沢政文の各氏には調査進行にあたりご協力をいただいた。記して感謝いたします。

II　調査地周辺の環境

1　地理的環境

千曲川右岸は火山性の山地がそびえたち、その支脈の尾根は千曲川方面に突出し、大小の弯入部を形成する。山間部では藤沢川や蛭川・神田川による松代扇状地が、若穂保科から川田地域にかけて保科川と赤野田川によって保科扇状地が、鮎川や百々川による須坂扇状地が発達しているという特色がある。扇状地先端の平坦地では旧千曲川の流路となり自然堤防と後背湿地になるが、上流の篠ノ井地域のような広域に展開しない。松代から須坂市にかけての千曲川左岸では顕著な自然堤防や後背湿地は見られなく、遺跡が確認されないことから時期的に新しい地形形成であろう。

犀川は西部山地を横断して東流し、V字谷から開放され長野盆地に至り広大な扇状地をつくりだす。これが川中島扇状地で、南は篠ノ井塩崎の唐猫神社、北は屋島橋付近まで影響を及ぼしており、犀川右岸約50㎢・左岸約20㎢の面積になる。扇頂部の犀口地籍から東の千曲川と犀川が合流する落合橋まで直線にして9.9kmで、その比高差は40mを測り、急勾配で堆積土量の多さが指摘できる。この犀川による堆積力の優位性は千曲川を右岸の上信越山塊の山脚部まで押さえ込み、山脚尾根先端は浸食を受けている。扇状地形成が一段落すると犀川の堆積土量が序々に減少するようになる。これにつれ千曲川も山脚部から離れ扇状地端部を浸食し、自然堤防と後背湿地・氾濫平野を形成するようになる。

図1　調査地（◎印）および川中島扇状地図（1：100,000）

図2　調査地（◎印）および周辺地形図（1：10,000）

ここで注意しなければならないことは、川中島扇状地形成時期の問題が近年浮上してきたことである。㈱長野県埋蔵文化財センターが実施した上信越自動車道建設に伴う松代町松原遺跡の発掘調査で、地表下約4mのところから縄文時代中期の遺跡が発見されたことによる。今までの調査所見から盆地沖積面への縄文時代人の進出は晩期からであり、それも小規模で短期的なものと考えられてきた。しかし、遺跡の存在は少なくとも5,000年前頃には犀川の堆積土による千曲川への影響はほとんどなかった可能性を裏付ける事象となった。その後松原遺跡に人々の痕跡が認められるようになるのは弥生時代中期まで待たねばならない。この推論が正しければ川中島扇状地の形成は縄文時代中期以降のことである。若穂地域の自然堤防や後背湿地もこの頃つくられたものと推定され意外に若い地形である。

犀川と千曲川の合流点は綿内万年島西方にある。ここに架かる橋が落合橋と呼ばれている。輪中集落として著名な牛島もここにある。対岸の大豆島から屋島にかけて自然堤防や氾濫平野が見られるが遺跡の確認はない。綿内の自然堤防上に遺跡が形成されたころ、犀川は北の裾花川扇状地端部をえぐるように流下していた可能性が高い。それ故に左岸の自然堤防の形成は不安定でより新しいものといえ、これに対し綿内の自然堤防や後背湿地は安定期にあったものと思われる。

n1　自然堤防　　b　後背湿地　　o　旧河道　　f　氾濫平野　　F　扇状地

図3　長野市防災基本図地形分類図（1：25,000）

綿内地域の地形利用は、自然堤防上には「町・島」の字名を付ける集落及び畑・果樹園が、旧河道や後背湿地・氾濫平野は「沢・田・池」の字名をもつものが多く、水田・蓮田と地目を使いわけている。残念なのは圃場整備が進み後背湿地内に残された中洲状の自然堤防地形が失われてしまったことである。地図上で見る後背湿地内に展開する榎田遺跡はもともとは微高地上の遺跡であったかもしれない。綿内地域には水田可耕地を潤す河川は見あたらず、旧河道に沿って幾つかの堰が開削されている。長池地緒の周辺では矢原地区で保科川から導水し、川田字堤南の湧水を利用している。菱田から森地区にかけては八田川が流下し、榎田から須坂市井上にかけての後背湿地や氾濫湿地の灌漑には清水地区の東勝寺池の樋五郎川（東勝寺堰）から引水されている。裏を返して古代における生産基盤を推定するに、当地域の水利は東勝寺池の湧水と共に旧河川水路が大きく機能していたものと見られる。

調査地の「高野」も字のごとく高い野原を意味しているものと考えられ、自然堤防上でも最も高い地形をあらわす字名であろう。

図4　調査地周辺の字境図（長野市地名研究所作成「長野字境図」より）

2　考古学的環境

若穂地籍は保科扇状地・川田の後背湿地に代表される複合地形と綿内の自然堤防・後背湿地からなる地形に大別され、それぞれ特色ある遺跡がある。

若穂地籍で最初に人跡が認められるのは、保科高岡で有茎尖頭器の採集を初源とし、縄文時代創早期のことである。その後再び人跡が認められるようになるのは前期後半の綿内大柳遺跡・仁王堂遺跡である。これ以降平安時代まで連綿と土に刻まれた歴史を残す。

保科扇状地においては、扇頂部で縄文時代中期の小遺跡が散見される。ノボロ遺跡・笹平遺跡・高岡遺跡・蓮花遺跡等である。後・晩期になると扇央部にも遺跡が展開するようになり、上和田地域に宮崎遺跡が形成される。この遺跡は長野市を代表する縄文時代集落跡であり、同時代の墓域でもある。昭和60・62年度に細等灌漑用パイプ埋設に伴う発掘調査が行われ、後期から晩期初頭の住居址・石棺墓・土壙墓・埋甕墓が検出されている。遺物にも見るべきものがあり、600個におよぶ石鏃や若干の石斧等の生産用具、石棒・石剣等の祭祀具、土製耳飾り等の着装品が出土している。特にサメ椎骨製耳飾りや鹿角製銛は海洋地域との交流のあったことを示す一級の資料

1　高野遺跡　2　南条遺跡　3　桜田遺跡　4　春山B遺跡　5　宮崎遺跡　6　川田条里遺跡
7　大室18号古墳　8　大星山古墳群　9　和田東山古墳群　10　長原古墳群　11　大柳古墳群

図5　主要遺跡位置図（1：50,000）

である。わずか幅１ｍ・総延長823ｍの調査での成果であり、まだまだ多くの貴重な資料が眠っている。宮崎遺跡は狭義の意味で縄文時代遺跡として認識されているが、扇状地全体から見れば扇状地端部まで展開する弥生時代から平安時代にかけてのけいし場遺跡・塚本遺跡等と重複する複合遺跡でもある。弥生時代以降の遺跡数は増加を見せ、扇状地端部のほか後背湿地を取り囲む山麓に多く見られるようになり、自然堤防の町川田地域にも集落が形成される。後背湿地は川田条里遺跡と呼称され、弥生時代中期から一部に断続のあるものの近世までの埋没水田址が上信越自動車道の発掘調査で確認されている。この生産基盤を背景に多くの古墳が築造されるようになる。沖積面を眼下にする大星山山頂には前方後円墳形態の大室18号古墳が構築され、内部主体は不明であるが立地・形態からこの地域最古の古墳と推定する。やや遅れて大星山から扇状地面に突出する尾根上に和田東山古墳群と大星山古墳群がつくられる。和田東山古墳群は３基の前方後円墳と２基の円墳からなり、継続する首長墓と考えられ、初代墓は４世紀中ごろの築造と推定されている。２代にあたる３号古墳は明治大学により発掘調査が実施され、竪穴式石室を検出し、内行花文鏡をはじめ多くの鉄製品・玉類等が副葬されていた。４世紀後半の築造年代が与えられている。この古墳群に前後して大星山古墳群が築かれる。３基の円墳と１基の方墳からなり、副葬品に武具類が目立つことから被葬者は前記の首長層に服属する武人的性格を有する豪族墓と考えられている。同一の尾根上に複数の前方後円墳の構築、近接して同時期の服属関係が想定される古墳群の存在は他の地域では見られない。古墳時代の権力的階層を解明する上で重要な地域である。古墳時代後期になると古墳の築造は尾根から降りて扇状地や山麓に展開するようになる。前者では扇頂付近に白塚古墳群（11基）・扇央に高下古墳群（４基）・八幡古墳群（５基）・長原古墳群（22基）の古墳群があり、後者では須釜古墳群（４基）・十二山古墳群（５基）・袖林山古墳群（３基）に代表される。この他大室18号古墳が築かれる低位尾根上には15基の円墳が存在するが、内部主体及び築造年代は不明である。長原古墳群は団地造成により一部を残して

図６　綿内遺跡群と近隣の遺跡分布図（１：20,000）

消滅し、他の古墳群も前記した基数より減少している。またこれらの古墳群形成にかかわった集落跡の存在は明らかになっていない。

綿内地域の遺跡は少なくとも11遺跡が周知されているにすぎない。縄文時代の大柳遺跡・仁王堂遺跡が崖錐に立地するほかは山麓を含め平地に散在し、弥生時代以降の遺跡である。春山の自然堤防上には上信越自動車道で調査された春山B遺跡がある。弥生時代住居址40軒及び方形周溝墓18基が確認され、集落廃絶後墓域として機能していたようである。古町・芦町・麦在家・高野・町田・八王寺・森・榎田・島・笹木・大橋・南条・牛池の一帯は弥生時代以降の遺跡が展開されているものと予想され、綿内遺跡群と呼称している。周知されている地点遺跡に古町・南条・島・榎田の各遺跡がある。上流域の田中に春山B遺跡に接して長池遺跡が、旧河道による中洲状の微高地には岩崎遺跡・菱田遺跡がある。このうち発掘調査の経歴のあるものは、高野遺跡・春山B遺跡を除き、岩崎遺跡綿内保育園地点・古町遺跡流人塚そして上信越自動車道建設に伴う榎田遺跡がある。綿内保育園地点では平安時代の住居址1軒と中世土壙墓2基を確認している。流人塚は中世墳墓と見られている。榎田遺跡は弥生時代中期から近世に至るまでの複合遺跡である。43,500㎡程が調査され、住居址総数1,115軒余が検出され、特に古墳時代では後期を主体に893軒にのぼる。長野盆地の中で突出する遺構数の大遺跡である。現在整理中であるので詳細は不明であるが、第3号河川跡から各種鍬類・鋤・えぶり・田下駄・木鎌・竪杵等の農具、かせい・たたり等の紡織具、扉・梯子・梁・杭等の建築材、木製鞍や鐙、各種くり物・曲物類、弓や鞘、腰掛け、鳥形木製品等の各種多様の木製品の出土が注目される。これに対し奈良・平安時代住居址が40軒にすぎなく、遺跡群内の北に位置する南条遺跡では平安時代遺構に限られる点に注意する必要がある。榎田遺跡に対応する古墳はこの空間域に大柳古墳群（4基）・大豆皮古墳群（3基）（同一の古墳群の可能性あり）があるにすぎず余りにも少なすぎる。尾根一つを越えた須坂市の鮎川流域の古墳群に求めることも可能であるが、むしろ先代からの故地である保科扇状地の古墳群に対応させるのが妥当性があるように思える。

3　古代の歴史的環境

若穂地籍においても文字等に残された歴史事象が多く見られる。承平年間（935年頃）に編纂された『倭名類聚抄』「高山寺本」には高井郡の郷名が穂科（ほしな）・小内（おうな）・稲向（いなむき）・日野（ひの）の4郷記載され、「流布本」では神戸（かんべ）が加わる。この内、穂科郷は若穂保科を中心に、稲向は須坂市南部地域一帯に求められている。小内郷は中野市とその周辺との説と若穂綿内地区説があり、日野郷は須坂市日滝と、中野市新野を本郷とする2説がある。神戸郷は飯山市瑞穂地区に中心を求める説が多いが合意をみていない。『延喜式神名帳』に記載される式内社に綿内森の小内神社を比定する考えもあり、「御牧」の項に高井郡関係では笠原・高位・大室の牧名が見える。笠原牧の比定については伊那市と中野市の両説あり、高位牧は高山村の扇状地に、大室牧は松代町大室の千曲川両岸地域に推定されている。『三代実録』によると9世紀後半には物部氏の支族が高井郡に居住しており、平安時代中期頃には高井郡の有力豪族井上氏が須坂市井上を拠点に勢力を伸張していたものと考えられている。平安時代末期の『吾妻鏡』には保科御厨が記載され、穂科郷に後続するものであろう。この他、川田の清水寺には国指定重要文化財の鉄鍬形や藤原期の仏像群、綿内の蓮台寺には阿弥陀如来像が伝承されている。このような歴史事象と綿内遺跡群とのかかわりがどのようなものであったか興味深い。

Ⅲ　調査概要

1　試掘調査

(1)調査の目的

開発事業予定地は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」の範囲内にあり、埋蔵文化財の包蔵状況によっては破壊の及ぶ可能性も考えられる。したがって、施工に先立ち事業予定地内を試掘し、埋蔵文化財の包蔵状況を調査する。

(2)調査方法

事業予定地内の埋蔵文化財包蔵の可能性が考えられる任意の地点に試掘坑（トレンチ、Ｌ２ｍ×Ｗ１ｍ）を５か所設定、重機により掘削し、坑内断面の土層観察により、遺物包含層の有無及び深さを確認する。

(3)調査結果

５か所のトレンチは事業予定地中の遺構の存在が確実な岩崎遺跡範囲内部分と旧千曲川河道と思われる低地部分を除く微高地上に設定した。以下、土層断面図を基に記述する。

No.１トレンチ　事業予定地の北に位置し、地目は果樹園である。ここからは明確な遺物包含層は確認されず、出土した遺物も摩耗した土器片が１片のみであった。ただし遺構のベースとなるであろう淡黄灰色粘質土層（第６層）があることから周辺に遺構の存在する可能性は否定できない。小単位遺構群の縁辺部かもしれない。

No.２トレンチ　事業予定地の東に位置しており、安定した土層堆積状況を示している。第４層の灰褐色砂質土層が遺物包含層であり、弥生時代と思われる土器片を数点採集した。また第３層の茶褐色粘質土層は奈良・平安時代の遺物包含層となる可能性もある。

No.３トレンチ　事業予定地の中心に位置し、旧千曲川河道と思われる低地部に近接している。第３層が奈良・平安時代の遺物包含層、第４層が同時代の遺構面、第５層が弥生時代後期の遺物包含層である。炭化物も多く含んでおり居住域（集落）遺構の存在が予想される。

No.４トレンチ　高野神社東側に位置している。ここでも土層が安定した堆積状況を示しており、No.３トレンチと同様、第３層が奈良・平安時代の遺物包含層と思われる。第４層を掘り込む遺構が確認され、完形に近い該期の土師器坏が出土した。また遺構は確認できなかったが弥生時代の土器片も採集されることから、２時期の遺構面が存在する可能性が高い。

No.５トレンチ　長野電鉄綿内駅の東側で、低地部分に近接している。No.１トレンチと似たような堆積状況で、第５層に遺構ベースとなるべき淡黄灰色粘質土層も存在するが、遺物包含層が確認されず、埋蔵文化財包蔵の可能性は低く、このトレンチより北側に遺構が展開するものと思われる。

以上の結果により、事業予定地内の微高地（自然堤防）ほぼ全面に埋蔵文化財の包蔵が予想される。地表下約70cmにて奈良・平安時代の遺構面、約１ｍで弥生時代後期の遺構が展開するものと思料される。

2　調査の方法

調査対象地は遺跡の破壊が懸念される道路敷に限定し、区画整理事業の進捗及び設計変更等に応じ保護協議す

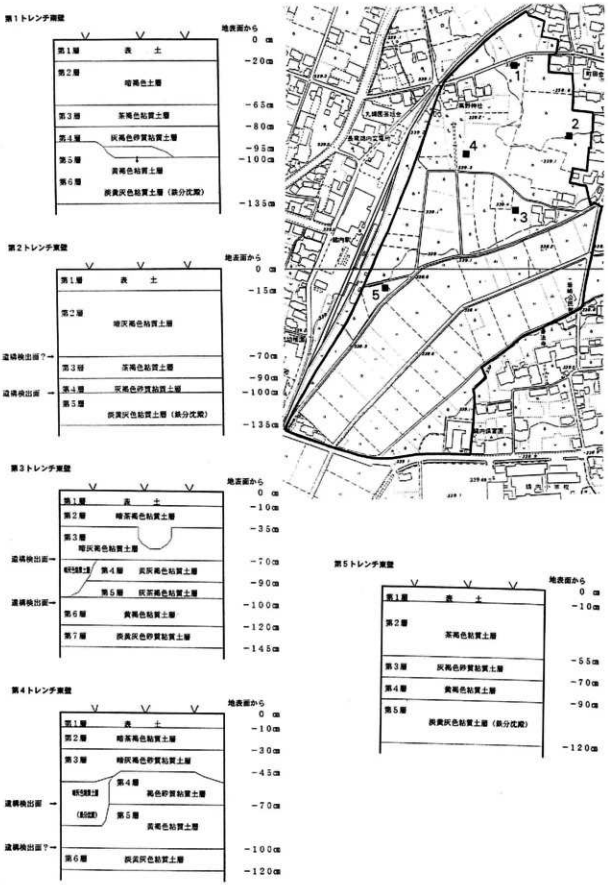


図7　試掘調査地および土層柱状図

ることで発掘調査にとりかかった。遺跡推定範囲は２事業区にわたって工事が行われる関係上、路線ごとに接続して調査ができなく、一部に遺構形態にそごをきたした点がある。また平成９年度に宅地造成高の変更があり、削平が30cm以上におよぶ造成面では急遽発掘調査を実施することになった。それ故に路線地区名及び遺構番号に不揃いが見られるが、遺物等の混乱を避けるため調査時の符号・番号をそのまま用いている。

3　調査地の概要

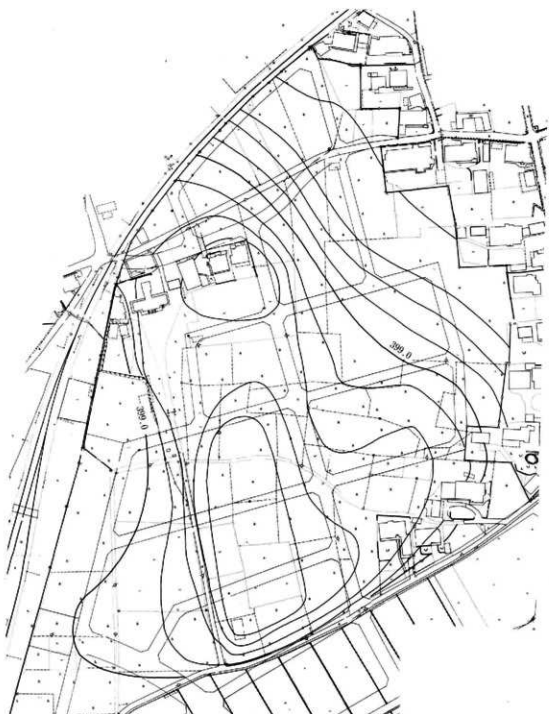


図８　微地形推定図（１：2,000、10cmコンター）

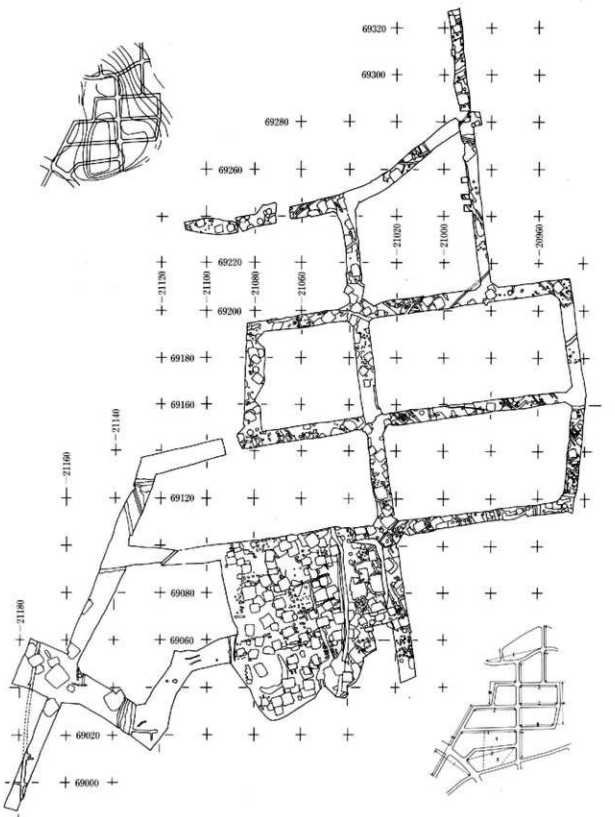


図9　調査区遺構分布図（1：1,600）

調査地は標高339.42mを最高に、338.64mの範囲にあり、旧千曲川河道との比高差が1m近くある。地点標高から10cmコンターの微地形推定図を作成してみると、綿内自然堤防上で最も高位に位置し、X区からZ区にかけて20cm程の高まりがあり、W区北側にも10cmの微高地がある。339.2mのコンター線は南北に長楕円形を呈し、南方で東に張り出す。高野神社参道から西は他に見られない傾斜を示す特色がある。更に注目されるのは微高地の弥生時代遺構面（黄褐色粘質土）の下層は砂利層になる点である。北側へは徐々に傾斜するのに対し、参道を境に急傾斜をもって潜り込み、土層も粘質を高める。東側へも砂利層は展開するものと予想されるが、Y区東端を境に調査では部分的に確認されたにすぎない。この砂利層はこの地形にだけ認められ、東に約1km離れた南条遺跡では井戸址の最下層でも見られない。また砂利層は扉川による押出しが考えられる点も注意する必要がある。

4　遺構の分布

住居址等の居住施設は微地形推定図に見られる微高地上に展開するようである。すなわちB区にあっては調査地全域に認められるものの、C・D・E区においては散在的になり、東にいくにつれ遺構数を減じる。また、G区においては北側半分には各1棟の住居址と掘立柱建物址が存在するにすぎない。F区においても北側に遺構が密集するのに対し南側半分程は1棟の住居址があるのみである。微地形推定図の高地面に居住域を求め、緩斜面を避けていることがうかがえる。

また、調査地西側においてもH・I区の一部を除き高野神社参道を境に居住域を全く形成しない。参道を境に土質にも大きな相違が認められることから、往時においては地形の変換点であった可能性が高いし、遺構の分布という点では本遺跡の特色ともなっている。

A・X区の南端に遺構の存在が認められないことから、この調査範囲に遺跡の南限が求められ、地形の変換点に農道が造られている。

Ⅳ　遺構と遺物

1　弥生時代の遺構と遺物

(1)遺構の分布（図10～12）

A区住居址９軒・土壙１基、B区住居址１軒、C区住居址２軒・土壙（溝址）２基、E区住居址７軒、W区住居址４軒・土壙１基、X区住居址９軒・土壙２基、Y区住居址19軒・土壙１基の総計住居址51軒、土壙７基を検出した。弥生時代遺構分布図を見ると調査地の中央部に位置し、南北二つの区域に大別することができる。更に微地形推定図を重ね合わせると、両者とも微高地上に展開密集することがうかがえる。また、A区北端付近とW区およびY区においては重複関係にある遺構が目立つ。弥生時代後期の集落形成に重要な占地意識が働いているように思える。ちなみにA区北端の44・45号住居址、E９号住居址は洪水によるものか東側半分程が消失している。

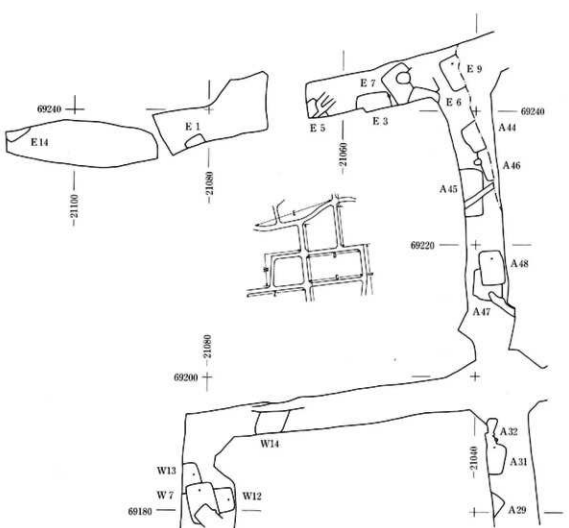


図10　A区・E区・W区弥生時代後期住居址分布図

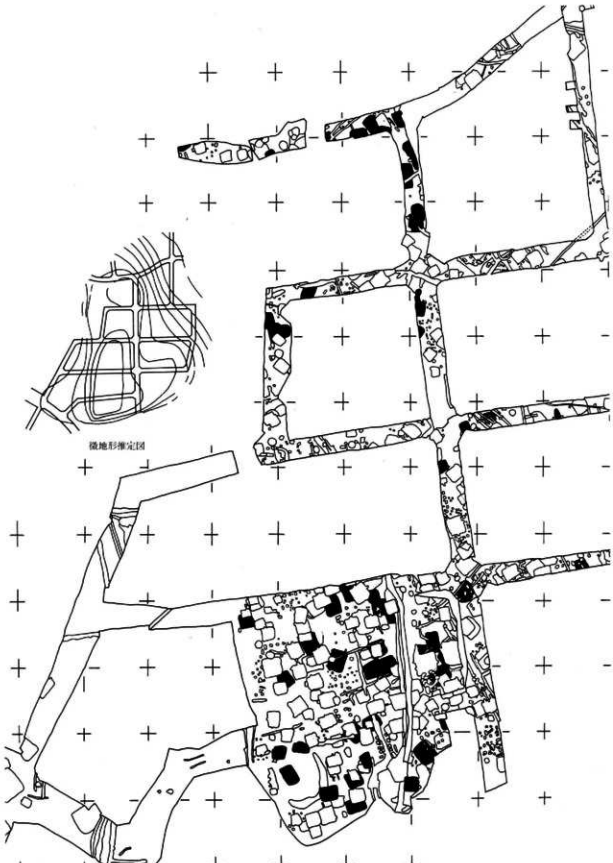


図11　弥生時代後期遺構分布図

(2)住居址（図13～26）

遺構は黄褐色粘質土層を掘り込み、覆土が同系色でやや黒味を帯びているにすぎず遺構形態確認に困難を極めたが、炭化物の混入を目安に形態追及を行った。C区東側に土器集中地点があり、ほぼ完形の土器の出土を見たが遺構を確認することができなかった。

住居址の形態は隅丸長方形を呈するものが多い中で、A31・46号、C７号、X51号、Y11・36・77号の各住居址は比較的小形の隅丸方形になる。規模はY29号住居址の主軸7.2m・短軸5.1mを最大に、Y11号住居址の長軸3.8m・短軸3.7mを最小とする。主軸（長軸）は3.7～7.2mの幅の中で散在するが、4.5～5.3mの範囲に密集度が高い。短軸は2.5～5.3mの範囲にあり、4.0～5.1mに密集する。

小屋組の主柱は住居址形態配列の長方形や方形の４本柱を基本とするが、正形でなく変形のものが多い。しかし、A45号住居址のように土器の出土量が多いものの主柱穴・炉や床面等の居住施設が共に確認されない住居址形態の遺構がある。A20号、C７号、E１・３・５号、W14号、X52・54号、Y30・35・82・83号住居址がこれにあたる。居住施設以外の利用を考慮する必要がある。A48号とY29号住居址の炉と対辺の壁際中央に入口施設を構成する２個の柱穴が認められる。

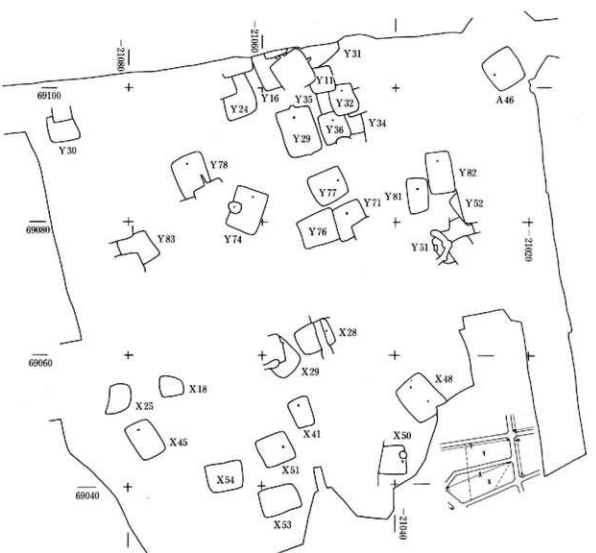


図12　A区・X区・Y区弥生時代後期住居址分布図

W区に互いに重複しあう3軒の住居址がある。中でも最も新しい7号住居址は主軸方向をN10°Wを指し、主軸6.0m・短軸4.0mの規模で、隅丸長方形を呈する。これに対し12号・13号住居址は同時期に機能していたものと推定され、規模・形態は7号住居址と近似するものの主軸方向がN75°E前後と大きく異なる。この相違点から形態が明確または主柱穴および炉の位置が判明している他の住居址の主軸方向を見てみるとN10°WからN40°W間に15軒があり、N57°EからN81°E間に9軒存在し2群に大別することができる。ただし、これ以外の住居址の推定方向軸を測ると南北軸からN15°E間にもう一群が存在するようである。軒数は西群が多く、次いで東群、中間群の順になる。W区の例をひけば東群の主軸から西群への移行が考えられる。主軸線でもう一つ注意しなければならないのがX48号住居址の存在である。住居址内に小形の住居址を内包している可能性が高く、主軸方向が約90°異なるものの、(イ)号とした大形の新しい住居址は東群の一つでN53°E方向を指す。ちなみに小形のものはS45°E方向にある。いずれにせよ左回転の変換である。

炉は地床炉で直径30cm前後の円形を呈し、浅い鍋底状の底面になる。周辺には炭化物が散在する例が多い。炉形態には素掘りのものと炉縁の手前に細長い河原石を据置くいわゆる枕石炉の二形態がある。枕石炉はE9号、X28・41・45・48・51号、Y29・36・71号の各住居址に見られる。この形態の炉は古墳時代前期のH3号住居址にも見られ、継承性に注目する必要がある。炉の位置は北壁寄りの主柱穴間に設置されるものが多いが、A46号住居址は唯一西壁側に設けられ、東壁寄りでは先に記載したW12・13号、X48(ロ)号住居址の他にX28・50・51号、Y77号の各住居址(主軸東群)がある。また柱穴間の位置にも相違が認められ、壁際に焼土(炉)が認められるC6号住居址(北壁)・X50号住居址(東壁)があり、W13号、X45・74・77号の各住居址は柱穴間からはずれ上部にあり、X29・78号住居址では下方に設けられる。W区の3軒の炉底から土器片が出土しているが、明らかに土器敷と考えられるのは7号住居址のみである。

床面は主柱穴を中心によく締まって堅緻のものが多い。床面下は砂利層になるため貼り床の可能性もある。

(3)土壙(図16)

C区の2基の土壙は溝状を呈するが、長楕円形をなすものと思われる。X区の住居形態の土壙は不整形である上、底面が共に丸味を帯びる。土器の出土量が多く、これらの遺構は貯蔵穴の用を供したものと考えられる。

弥生時代後期遺構観察表(1)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
A区							
20号住居址	14	隅丸長方形?	×2.8	N34°E			27
29号住居址	14	隅丸長方形?		N54°W			27
31号住居址	14	隅丸長方形?	4.4×	N5°E	4本柱?・炉		27
32号住居址(土壙)	14	不整形					
35号住居址	15	隅丸長方形?		N55°W	4本柱?		27
44号住居址	14	隅丸長方形?		N56°W	4本柱?・床堅緻		
45号住居址	14	長方形?		N10°W		床土器散在	28
46号住居址	15	不整方形	5.3×5.8	N57°E	4本柱・柱間炉・焼失住居		
47号住居址	13	隅丸長方形	(4.4)×4.3	N5°E	4本柱・床堅緻		27
48号住居址	13	隅丸長方形	5.1×3.5	N12°W	4本柱・床堅緻・柱間炉・入口施設		27
89号土壙	15	楕円形?	×0.6		2段掘・平底		
B区							
11号住居址	16	長方形?	×3.5	N26°W	柱間炉?・床堅緻		29

弥生時代後期遺構観察表(2)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
C区							
6号住居址	16	隅丸長方形？			北壁際炉		29
7号住居址	16	方形	(2.8)×(3.2)	N21°W			30
8号住居址(土壙)	16	隅丸長方形？	×2.3	N11°E	平底		30
11号溝址(土壙)	16	不整楕円形？	×1.8	南北	底凹凸		
E区							
1号住居址	17	長方形？	×2.5	N14°W			
3号住居址	17	隅丸長方形？	×5.1	N 8°E			
5号住居址	17	隅丸長方形？		N24°W			
6号住居址	17	隅丸長方形？	×(4.5)	N11°E	4本柱？		
7号住居址	17	隅丸長方形？	×4.4	N36°W	4本柱？・炉平安土師破壊・床堅緻		
9号住居址	17	隅丸長方形	4.9×	N24°W	4本柱・柱間枕石炉・床堅緻		
14号住居址	17	隅丸長方形？	×(4.0)	N30°W			
W区							
7号住居址	18	隅丸長方形	6.0×4.0	N10°W	4本柱・柱間炉		
12号住居址	18	隅丸長方形？	×3.9	N76°E	4本柱？・柱間炉	鉢	Ⅲ-12
13号住居址	18	隅丸長方形？	×(4.0)	N74°E	4本柱？・柱間上炉		30
14号住居址	18	隅丸長方形？	×3.9	N25°E			30
4号土壙	18	不整楕円形	1.1×0.6	南北	丸底		
X区							
28号住居址	19	隅丸長方形	5.3×4.4	N65°E	4本柱・柱間枕石炉		31
29号住居址	19	隅丸長方形	(5.0)×4.6	N45°W	4本柱？		31
41号住居址	19	隅丸長方形(不整)	4.4×3.3	N24°W	4本柱・柱間枕石炉		32
45号住居址	19	隅丸長方形	5.7×4.1	N30°W	4本柱・柱間上枕石炉		32
48号住居址(イ)	20	隅丸長方形	6.7×5.3	S53°E	4本柱・柱間上枕石炉・床堅緻		34
48号住居址(ロ)	20		溝間2.7	S45°E	丸底・柱間炉		
50号住居址	20	隅丸長方形？	×4.4	N86°E	4本柱・東壁際炉		32
51号住居址	21	隅丸方形	4.6×4.7	N63°E	4本柱・柱間枕石炉		34
52号住居址	50	長方形	5.7×4.0	N73°E			31
54号住居址	21	長方形(不整)	5.4×4.2	N83°E			33
18号住居址(土壙)	21	長方形(不整)	4.6×3.2	N81°W	径2.6m・深0.2m土壙・平底		31
25号住居址(土壙)	21	楕円形(不整)	4.6×3.4	N 8°E	丸底		31
Y区							
11号住居址	22	隅丸方形(不整)	3.8×3.7	N17°W	4本柱・焼失住居		Ⅲ-35
16号住居址	22	隅丸方形？	5.0×	N70°E	東壁錮炉・床堅緻		35
24号住居址	22	隅丸方形？	(7.3)×4.8	N15°W	4本柱？・東壁大溝		35
29号住居址	25	隅丸方形	7.2×5.1	N13°W	北壁錮炉・柱間下枕石炉・入口施設		35
30号住居址(土壙)	22	方形(不整)	3.8×4.2	N15°W	長軸2.25m丸底土壙		36
31号住居址	23	隅丸長方形？		N59°E	床堅緻		35

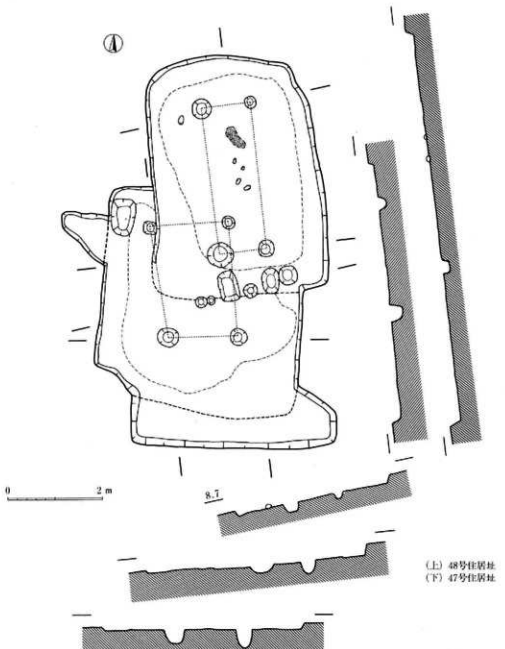
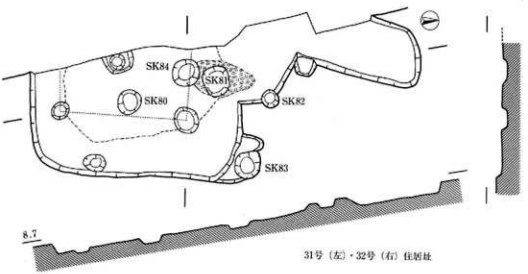


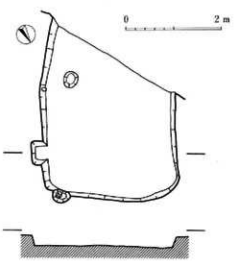
図13　A区弥生時代後期住居址実測図(1)

弥生時代後期遺構観察表(3)

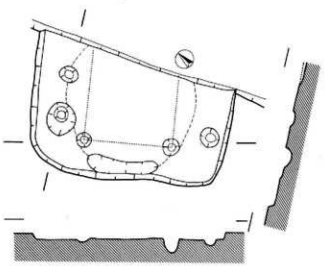
遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
Y区							
32号住居址	23	隅丸長方形(不整)	4.6×3.4	N17°W	4本柱？・柱間壁		37
34号住居址	23				南壁・床のみ残存		37
35号住居址	23	方形？		N12°E			
36号住居址	23	隅丸方形	4.5×4.1	N23°W	北壁側枕石有		35
51号住居址	24	隅丸長方形	6.4×5.0	N55°E	4本柱・北側下焼土		38



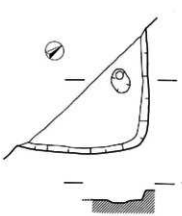
31号（左）・32号（右）住居址



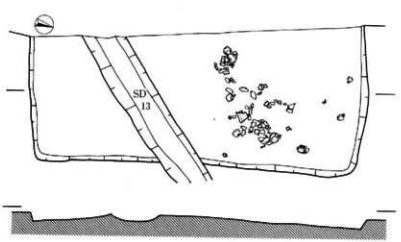
20号住居址



44号住居址



29号住居址



45号住居址

図14　A区弥生時代後期住居址実測図(2)

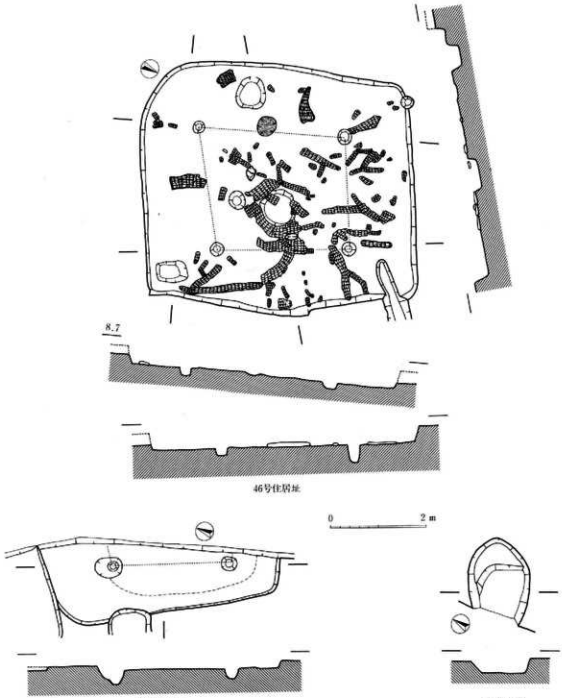
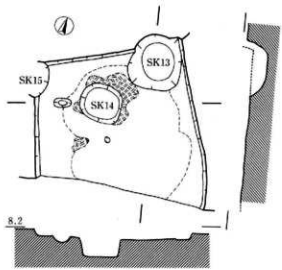
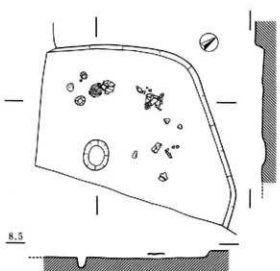


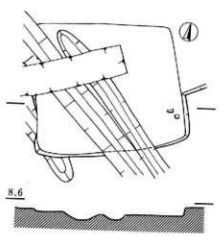
図15　A区弥生時代後期住居址、土壙実測図(3)



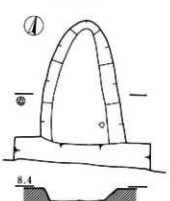
B11号住居址



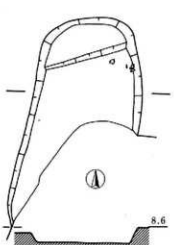
C 6 号住居址



C 7 号住居址



C11号溝址



C 6 号住居址（土壙）

図16　B区・C区弥生時代後期住居址、溝址実測図

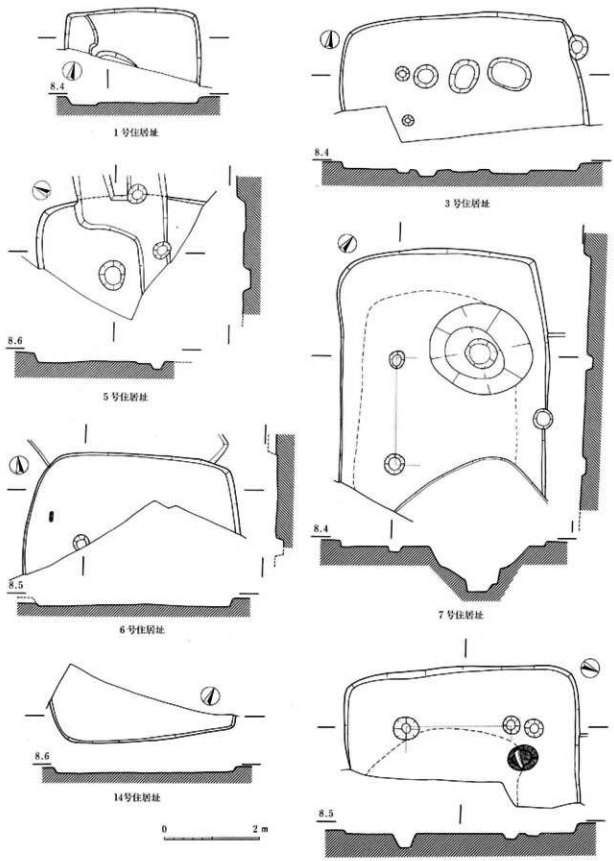


図17　E区弥生時代後期住居址実測図

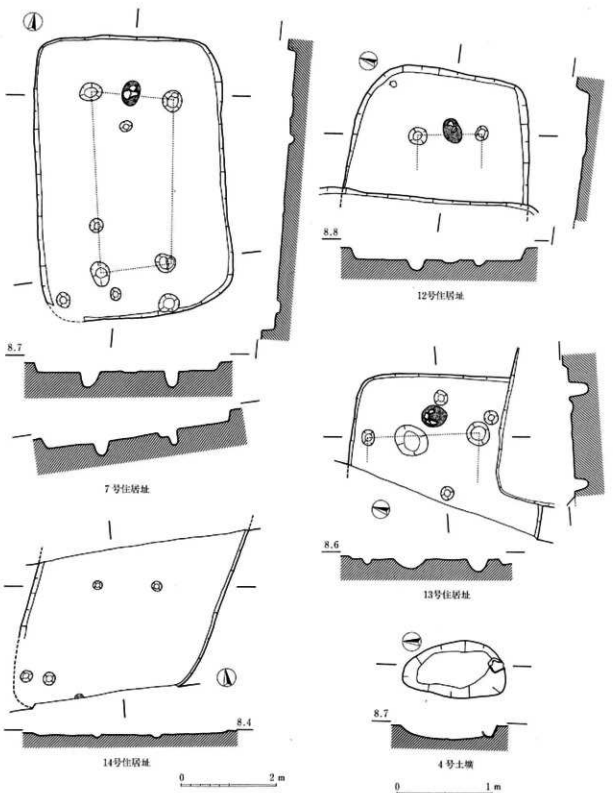


図18　W区弥生時代後期住居址、土壙実測図

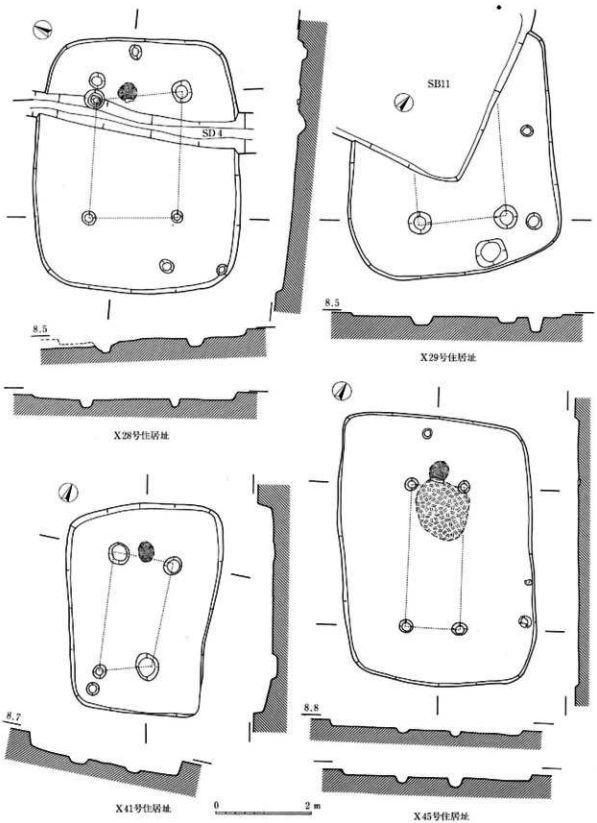
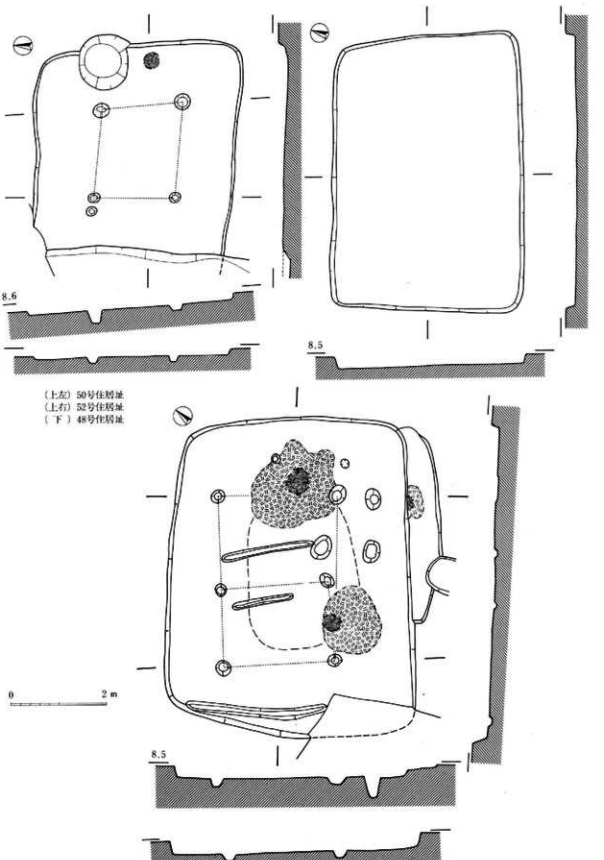


図19　X区弥生時代後期住居址実測図(1)



（上左）50号住居址
（上右）52号住居址
（下）48号住居址

図20　X区弥生時代後期住居址実測図(2)

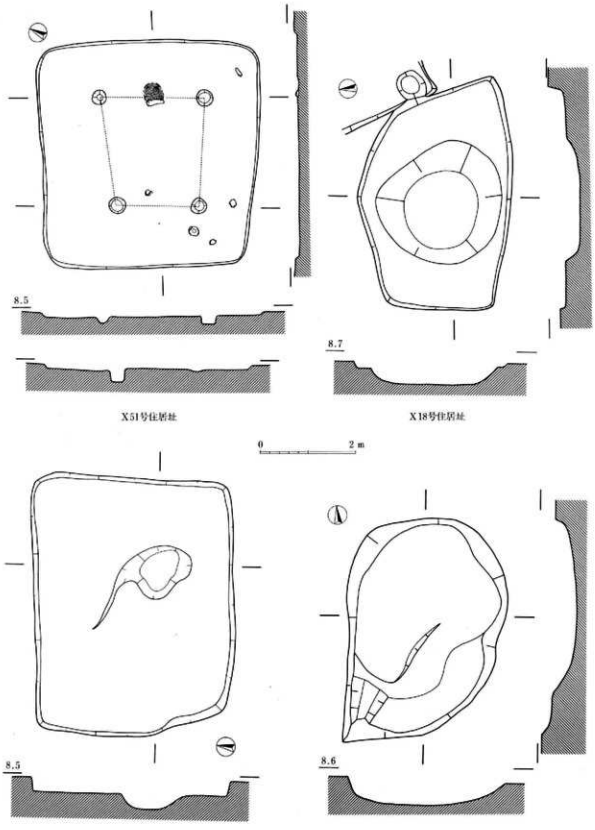


図21　X区弥生時代後期住居址実測図(3)

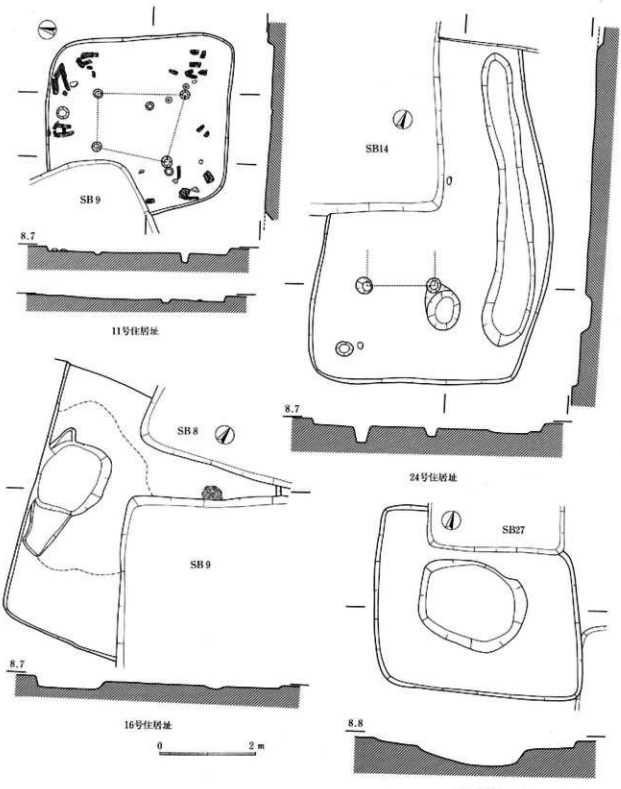


図22　Y区弥生時代後期住居址実測図(1)

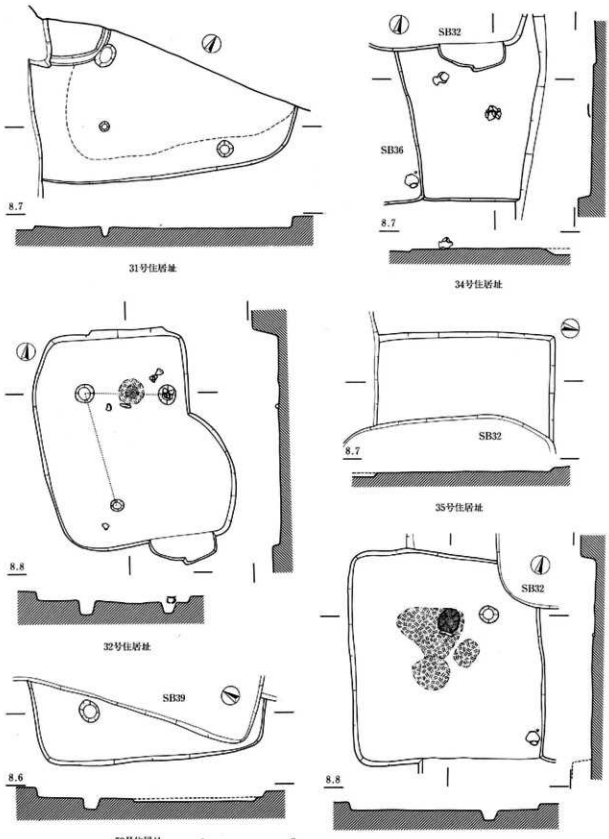


図23　Y区弥生時代後期住居址実測図(2)

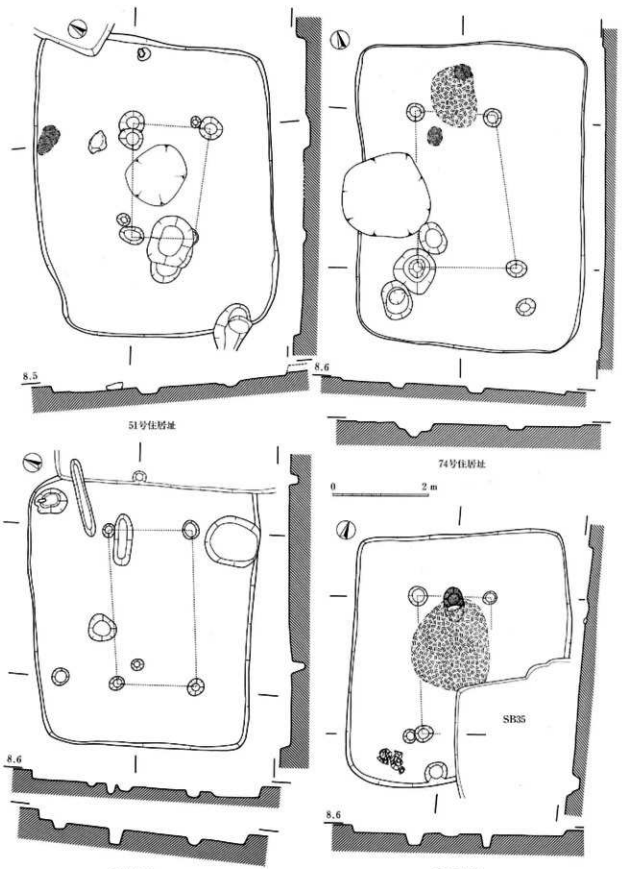
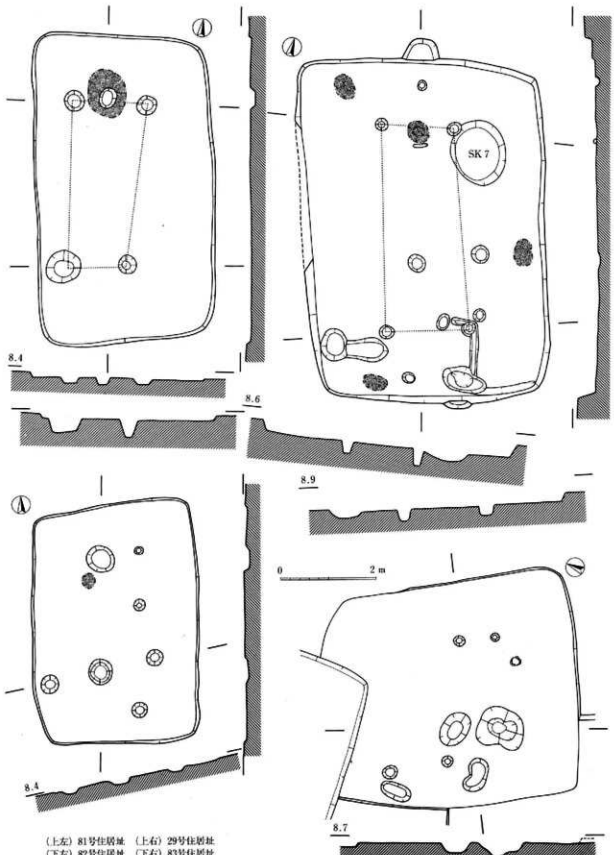


図24　Y区弥生時代後期住居址実測図(3)



（上左）81号住居址　（上右）29号住居址
（下左）82号住居址　（下右）83号住居址

図25　Y区弥生時代後期住居址実測図(4)

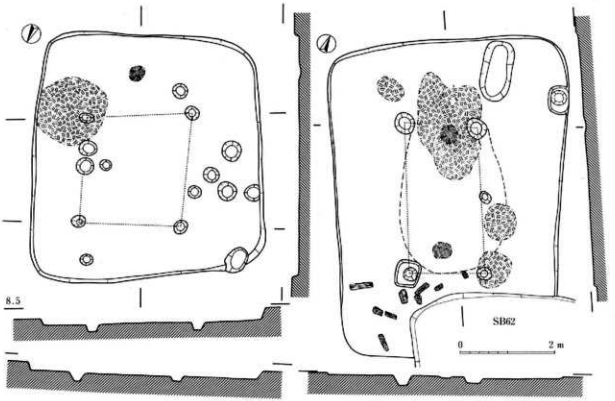


図26　Y区弥生時代後期住居址実測図(5)

弥生時代後期遺構観察表(4)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
Y区							
52号住居址	23	隅丸長方形?	×5.0	N44°E			38
71号住居址	24	隅丸長方形	5.3×4.7	N27°W	4本柱・柱間枕石炉		39
74号住居址	24	隅丸方形	6.4×4.9	N20°E	北壁側炉・柱間上炉		38
76号住居址	24	隅丸長方形?	×4.8	N69°E	4本柱		38
77号住居址	26	隅丸方形	5.3×4.9	S25°E	4本柱・柱間上炉		38
78号住居址	26	隅丸長方形	(6.6)×5.1	N27°W	4本柱・柱間下炉・炭化材		40
81号住居址	25	隅丸長方形	6.6×3.9	N10°W	4本柱・柱間炉		40
82号住居址	25	隅丸長方形	5.2×3.6	南北	北壁側炉		40
83号住居址	25	隅丸方形	×4.7	N25°W			40

(4)遺物（図27～46）

弥生時代の土器については、一部に古墳時代前期の資料を含むものの、全部で278個体の土器を図化している。紙数の関係からすべてにわたって解説することは不可能であり、以下、良好なセット関係を有するもの、また特殊な例を中心に若干の説明を加える。

ＡＳＢ31号住居址　壺（3）が出土している。口縁部が大きく外反し端部は面取りされる。口縁部下端側面に、外側より焼成後の穿孔がなされる。

ＡＳＢ35号住居址　広口壺（7・8）、台付甕（6）、甕（9）、高坏（4・5）が出土している。台付甕（6）は、口縁部はハケ整形後横ナデされ、口唇部はハケ原体による刻みがなされる。胴部は内外面ともにハケ整形される。遠江系の台付甕であろう。甕（9）は在地系甕の末期的なもので、文様は頸部に簾状文が施文されるのみである。外面口縁部はハケ整形、胴部はハケ後縦のヘラミガキ、内面はハケ整形のみでミガキは認められない。内面口縁部のハケ原体は外面のハケ原体と同一であるが、胴部の原体はこれらとは異なる。（4・5）はいわゆる欠山タイプの高坏である。（4）は坏部内外面ならびに脚部外面に非常にていねいな縦ヘラミガキがなされ、口唇部内側は面取りされる。（5）は在地化したもので、ていねいな縦ヘラミガキで仕上げられるが、口唇部の面取りはなされず、坏部外面底部にはヘラ削りがなされる。弥生時代終末期の様相を非常によく物語る資料であろう。

ＡＳＢ47号住居址　甕（10）が出土している。頸部の文様は簾状文ではなく、壺同様Ｔ字文が施文されている。善光寺平では例外的な存在で、上田盆地で多用される文様である。

ＡＳＢ45号住居址　本遺跡出土の後期弥生土器の中では最も古手の良好な資料である。壺（14）にはＴ字文が施文されるが、壺（15）は簾状文で構成される。甕（16・19）は口縁部がいまだ未発達な状況を呈するが、文様構成はその他のものも含めすでに確立されている。高坏（26・27）は、口縁部がつば状に外反する長脚有稜高坏であろう。箱清水式の確立段階の土器群であろう。

ＣＳＢ６号住居址　箱清水式後半段階の土器群で、甕（30～37）・片口（38）・坏（39～40）が出土している。甕は（30～31）に顕著なように口縁部の伸長が著しいが、文様は定型的な施文順序を守っており、また内面の整形にもいまだヘラ削りは認められない。ただし（35）の台付甕内面頸部付近はヘラミガキ以前にヘラ削りがなされている可能性がある。

ＸＳＢ18号住居址　調査時点においては住居址と想定したが、土壙出土の一括資料である。甕（57～59）・台付甕（60）・坏（61）・高坏（63）等出土している。甕（58･59）は箱清水式系甕の末期的様相を呈するもので、（58）は波状文施文後に頸部に簾状文を施文し、胴下半はヘラ削りのみでミガキはなされない。内面口縁部は横ヘラミガキされるものの、胴上半はハケ、底部付近は削りで仕上げられ、ミガキは認められない。（59）は球形化した胴部に直立気味の頸部と端部に至って外反度を強める口縁部を呈する。この時期に特徴的な形態の甕で、文様は胴下半まで波状文が充填され、底部付近はヘラ削りで仕上げられる。内面口縁部は強い横ナデがなされるのみで、胴部も全体にヘラ削りで仕上げられている。ともに前代に通有のミガキ技法の消失化が顕著な資料である。台付甕（60）は東海系の台付甕で、口唇部はつまみ上げ状の強い横ナデがなされ、口縁部も横ナデで仕上げられる。胴部から脚部は全体にハケ整形で仕上げられる。内面も全体にハケ整形されるが、胴下半にはユビナデもしくは板ナデ状の圧痕が顕著に認められる。Ｓ字甕ａ類と形態的には強い共通性が認められよう。高坏（63）は欠山タイプの高坏の在地化したものと想定される。ＡＳＢ35号住居址資料との時間的前後関係は即断できぬが、同住居址資料同様、箱清水式の終末段階の様相を物語る良好な一括資料である。

ＸＳＢ45号住居址　壺（83）・甕（84～87）・台付甕（88）が出土している。甕（83）は口縁部と底部を欠損するがかなり球胴化したものである。頸部にはＴ字文と簾状文を施文するが、Ｔ字文は直線文をヘラミガキによっ

て縦方向に磨り消し赤彩している。胴部くびれ部以上は赤彩されるが、くびれ部以下も部分的に鋸歯状にヘラミガキし赤彩している。甕（86）は口唇部がつまみ上げ状の強い横ナデによって面取りされる。また頸部の屈曲も著しく、文様の施文順序にも一部乱れがあるが、内面は全体にヘラミガキで仕上げられる。箱清水式後半段階の資料であろう。

ＹＳＢ11号住居址　在地の箱清水式と北陸系土器が混在する形で出土している。在地のものには赤彩深鉢（105・110）・台付甕（107）・台付鉢（108）・高坏（106）・坏（109）・底部穿孔鉢（111）がある。時期を特定できる資料を欠くが、赤彩深鉢（105）の胴部の球形化が著しい点や、台付鉢（108）の脚部に２列の円孔が認められるなど箱清水式期後半段階の資料といれる。北陸系の土器には、甕（112・113）・蓋（114・115）・有台鉢（116～118）がある。甕（112）は口唇部がつまみ上げ状の強い横ナデによって面取りされ、胴部は内外面ともにハケ整形される。（113）は胴下半で、底部周辺のみヘラ削りがなされ、ともに胎土は在地のものとは異なる。蓋（114・115）は笠形の体部につまみがつくもので、箱清水式の蓋形土器と形態的には大差ないが、口唇部が面取りされる点や、体部の整形が内外面ともにハケ整形のみで、ヘラミガキがなされないなどの特徴が認められ、北陸系と判断した。有台鉢（116～118）は善光寺平南部では初出の器形である。台部が中実で、ヘラミガキや赤彩が多用されるなどかなり在地化した様相を示すが北陸系の土器であろう。従来善光寺平南部で得られている北陸系土器は甕・壺・高坏・器台などが単体で出土した例が多いが、本住居址では甕・蓋・有台鉢と出土土器の半数が北陸系土器で占められている点、特徴的である。また住居址の形態も隅丸方形を呈しこの時期にしては異質である点も注目しておきたい。

ＹＳＢ30号住居址　箱清水式の最盛期の土器群である。壺（134）は群馬の樽式系の土器で、算盤玉状の胴部に直立気味の頸部がつく。頸部には３連止め簾状文施文後、上下に波状文を施文し、頸部文様帯以下は底部までヘラミガキ・赤彩されている。甕（135～141）は、後の描き足しによって不規則な文様となる（141）を除き、頸部に簾状文施文後、口縁部は下から上へ、胴部は上から下に、区画単位ごとに波状文を充填する箱清水式の典型的な施文方法を採用している。外面胴下半ならびに、内面は全体的に非常にていねいなヘラミガキによって仕上げられ、ヘラ削りは認められない。（139）は口唇部がつまみ上げ状に面取りされ、簾状文が施文されている。（142・143）は長脚有稜高坏の脚部で、ともにていねいにヘラミガキ・赤彩され、三角形の透かし孔が施される。

ＹＳＢ34号住居址　壺（152）はほぼ完形品である。頸部は直線文のみで、整形も全体に丁寧なヘラミガキで仕上げられ、赤彩はされない。胴部の球形化から箱清水式後半期の資料であろう。（155）は小型器台である。磨耗のため詳細不明だが、脚部には円形透孔が認められる。住居址の切り合いが激しいための混入品と想定される。（154）は有孔鉢である。在地のものと比較して底部付近がかなり厚くつくられており、あるいは北陸地方にその系譜を求めるべきものかも知れない。ただし胎土は在地のものである。外面は横ヘラミガキ、内面はヘラナデ後軽いヘラミガキによって仕上げられている。甕（153）は口縁が直立気味に立ち上がりやや古相を呈するが、口唇部はヘラ削りによって面取りされている。文様は磨耗のため詳細不明だが、箱清水式の基本的な施文方法を行っているものと思われる。

ＹＳＢ36号住居址　箱清水式終末に近い段階の壺（133）が出土している。口縁端部は受け口気味に立ち上がり、外面には波状文が施文されている。頸部文様には丁字文が描かれ、その下端に等間隔止め簾状文が加えられる。全体に丁寧にヘラミガキされるが、赤彩はされない。底部は焼成後打ち欠かれている。

ＹＳＢ51号住居址　壺（156）は頸部に二本一対の櫛描丁字文を３か所に描き、その下端にヘラ描鋸歯文を配している。鋸歯文内部はハケ調整痕をそのまま残し、鋸歯文施文後に周囲を磨り消して斜走沈線充填風にしている。文様自体は古い様相を残すが、丁字文が確立している点や、胴部の球形化から箱清水式のなかでも新しい時期の

ものといえよう。甕（157）は頸部に籠状文施文後、口縁部は下から上に、胴部は上から下に区画単位毎に波状文を充填し、各区画単位は右回りの順に施文されている。

ＹＳＢ71号住居址　箱清水式後半段階の資料である。甕（174・176・177）は器形的に非常に共通性が高い。倒卵形の胴部に長く、くの字状に外反する口縁がつき、口径と胴部最大径がほぼ等しい。口唇部はいずれもつまみ上げ状に強く横ナデされ面取りされる。（176・117）は頸部に直線文施文後、口縁部は下から上へ、胴部は上から下へ区画単位ごとに波状文を充填し、区画単位は右回りの順に施文されている。（174）は頸部籠状文を欠くが、頸部付近を境に、口縁部は下から上へ、胴部は上から下にやはり区画単位毎に波状文が充填され、区画単位は右周りの順に施文されている。いずれの土器も胴下半ならびに内面はていねいなヘラミガキで仕上げられ、ヘラ削りは確認できない。（175）は口縁から胴部まで区画単位毎に上下の施文順序を逆にして波状文を充填している。（179）は内外面ともにハケ整形で仕上げられる。ことに外面のハケ整形は東海のＳ字状口縁台付甕と同様の調整であるが脚台はつかない。また内面にも縦方向のハケ整形がなされる点、Ｓ字甕とは異なる。胎土は在地の胎土とはまったく異質であり、その系譜は不明瞭ではあるが、東海系の土器としてとらえておきたい。

その他　（224）は甕口縁部破片である。口縁端部は受け口状に立ち上がり、口唇部は平らに面取りされる。口縁部外面にはヘラによって鋸歯文を描き、その下端にハケ原体による連続刺突を施している。また頸部以下はハケ整形されるようである。口縁部内面は全体にナデ整形で仕上げられる。胎土も在地のものと比べ異質である。近江～東海に系譜が求められる土器であろう。（236）も東海のＳ字状口縁台付甕口縁部破片である。内外面ともナデによって仕上げられる。（225）は樽式系の壺口縁部破片であろう。口縁端部は粘土帯貼りつけによる複合口縁を呈し、ヘラ状工具先端による連続刻みを施す。口縁部は内外面ともに丁寧なヘラミガキで仕上げられる。ＹＳＢ76号住居址の（168）は、外面ならびに内面口縁部に丁寧なヘラミガキ・赤彩がなされる。胴部の形状はやや扁平化しているが、在地化した北陸系の有段口縁細頸壺であろう。（234）は有段口縁壺破片で、口唇部は強いつまみ上げ状の横ナデがなされ、口縁部下端には２帯の擬凹線文が施される。内面は全体に軽い横ヘラミガキがなされる。（235）は北陸系の脚付直口細頸壺の胴部破片であろうか。粘土帯貼りつけによる突帯部分で、４本の擬凹線文が施され、全体にヘラミガキ・赤彩される。胎土は在地のものである。（245）は北陸系の有段口縁擬凹線文甕の在地化したもので、外面には擬凹線文が施されるが、内面は横方向の軽いヘラミガキで仕上げられる。（252）は北陸系の小型有段口縁広口壺である。口縁部外面には３本の擬凹線文が施され、胴部にはハケ原体先端による刻みが施される。磨耗のため細かい調整は不明であるが、胎土から明らかに搬入品ととらえられる。（232）は壺の口縁部破片である。内外面ともヘラミガキ・赤彩で仕上げられることより在地のものであるが、有段口縁を呈すると思われ、屈曲部に粘土帯が貼りつけられている。現在のところ類例はない。壺（３）は口縁部下端に、鉢（48）は底部側面に、甕（266）も底部側面にそれぞれ焼成後に穿孔がなされている。壺（92・133）はともに一般的な焼成後の底部穿孔であるが、これらはこのような定型化した焼成後の底部穿孔と、同一の意識下においてなされたものであるか今後の検討課題であろう。時期的にはいずれの土器も、箱清水式のなかでも新しいもので後期後半から終末段階の資料と想定される。

以上、比較的良好なセット関係を有するもの、ならびに外来系土器など特殊なものを中心に簡単な説明を行った。出土した土器群から時間的な変遷を考慮するならば、大まかにＡＳＢ45号住居址→ＹＳＢ30号住居址→ＹＳＢ71号住居址→ＸＳＢ18号住居址→ＡＳＢ35号住居址といった変遷が想定されるであろう。それぞれの住居址に代表される各小期は、その存続期間ならびに内容は決して均質ではなく、また本遺跡では確認し得なかった段階の存在も想定されるが、箱清水式土器の確立から崩壊まで、各段階の資料が比較的充実した状態で得られた点は本遺跡の特徴と評価し得るものであろう。

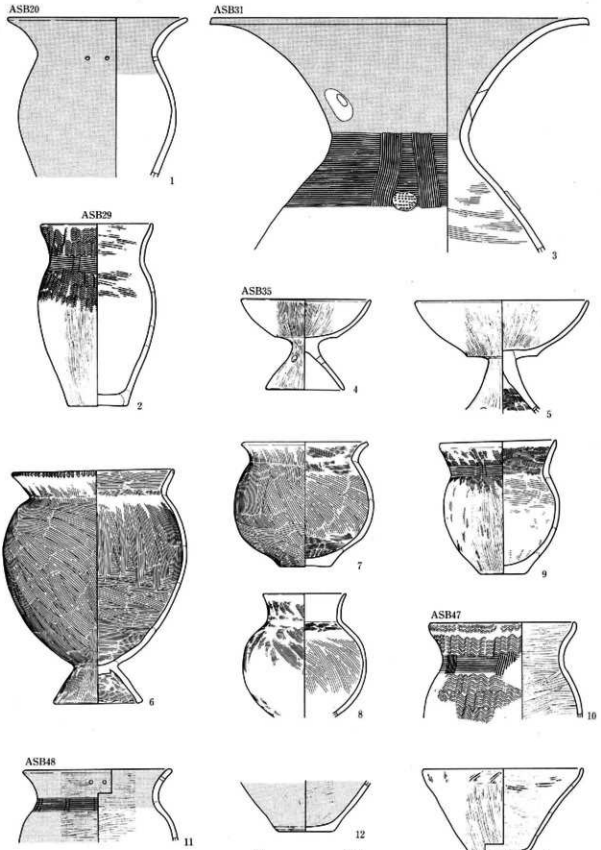


図27　A20号（1）、A29号（2）、A31号（3）、A35号（4～9）、A47号（10）、A48号（11～13）
住居址出土土器実測図

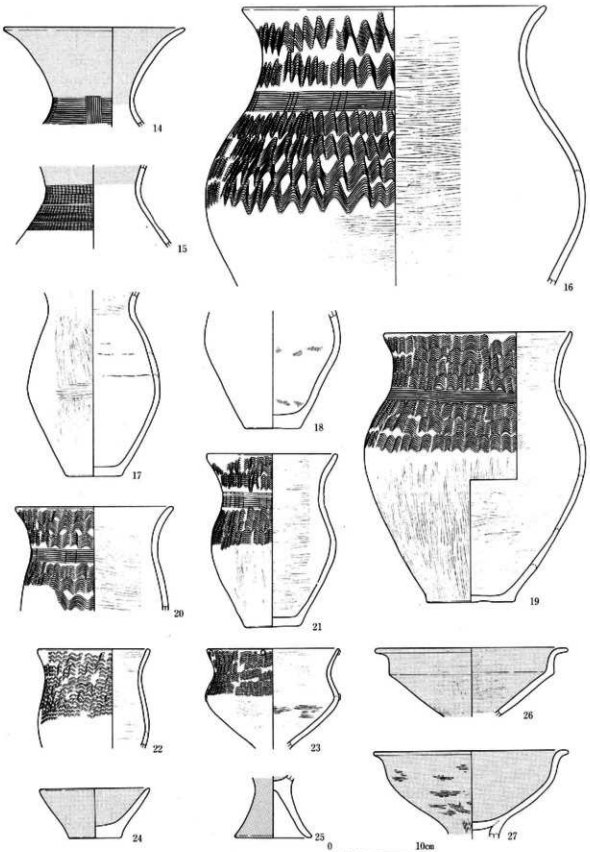


図28　A45号（14～27）住居址出土土器実測図

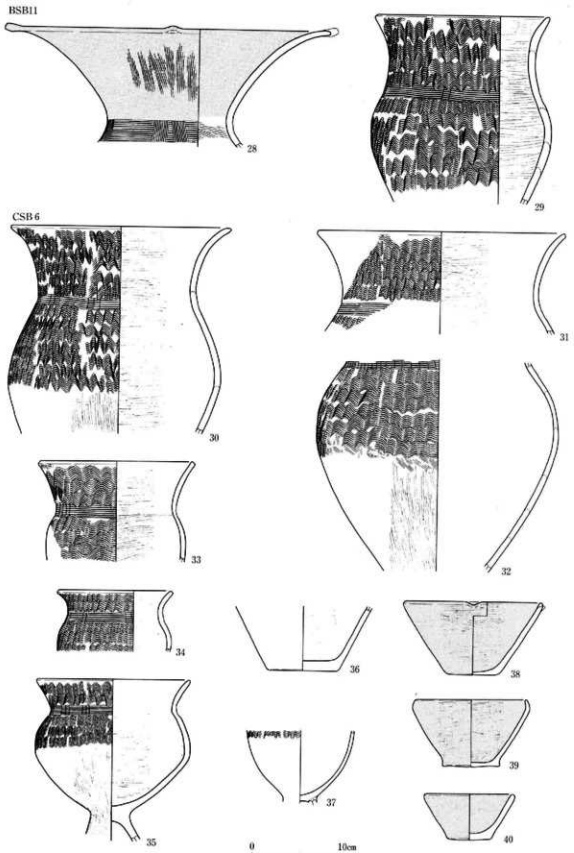


図29　B11号（28・29）、C６号（30～40）住居址出土土器実測図

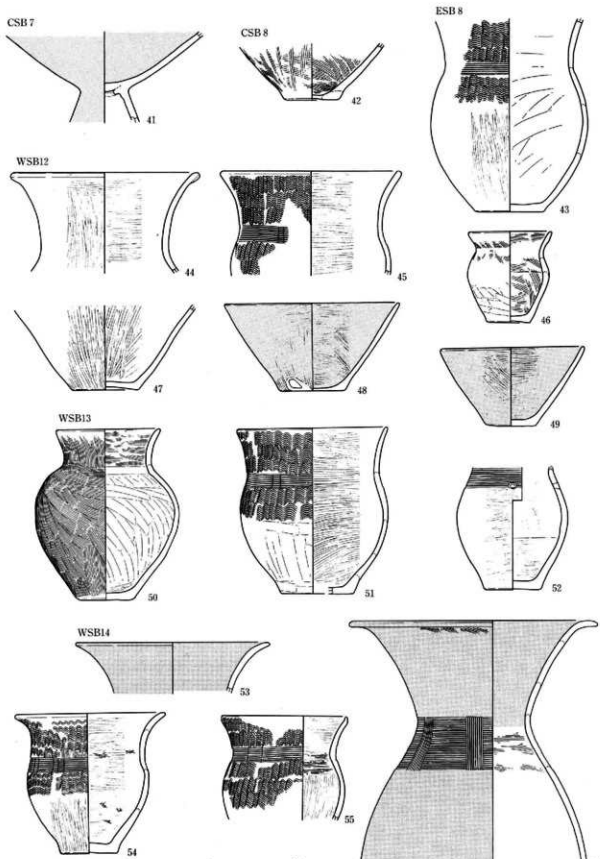


図30　C 7号（41）、C 8号（42）、E 8号（43）、W12号（44～49）、W13号（50～52）、W14号（53～56）
住居址出土土器実測図

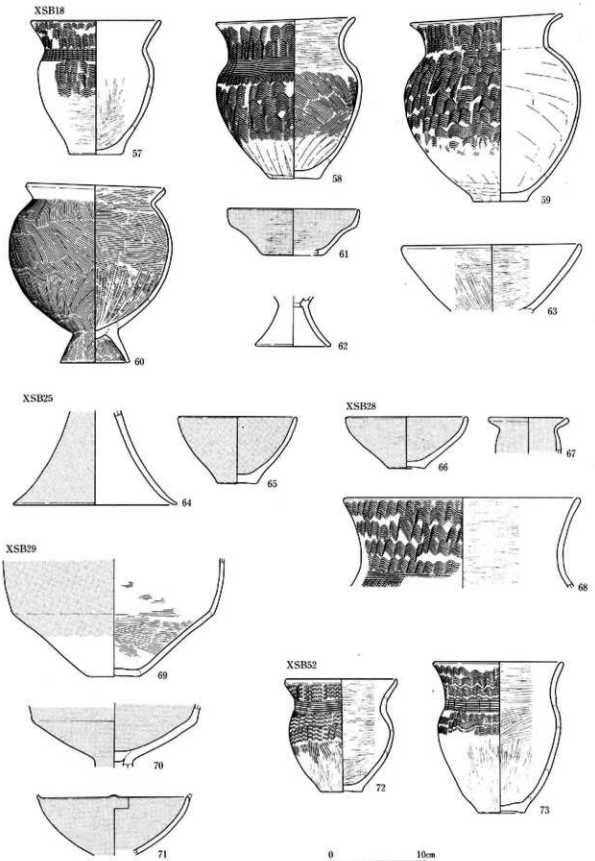


図31　X18号（57～63）、X25号（64・65）、X28号（66～68）、X29号（69～71）、X52号（72・73）
住居址出土土器実測図

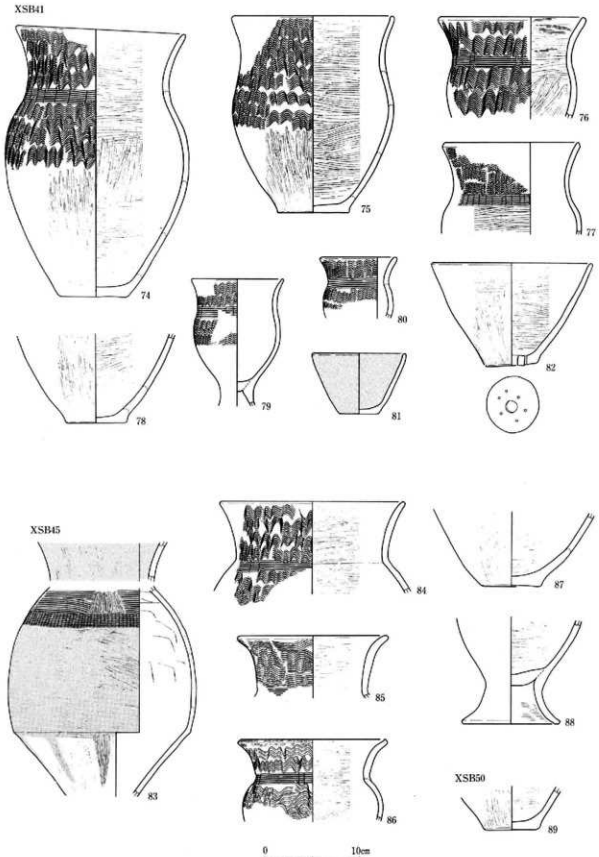


図32　X41号（74～82）、X45号（83～88）、X50号（89）住居址出土土器実測図

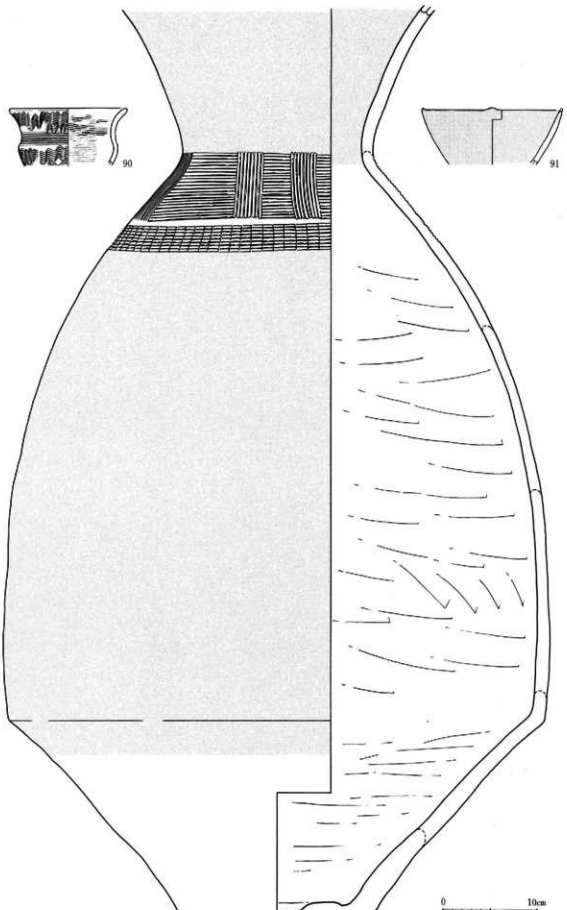


図33　X54号（90～92）住居址出土土器実測図

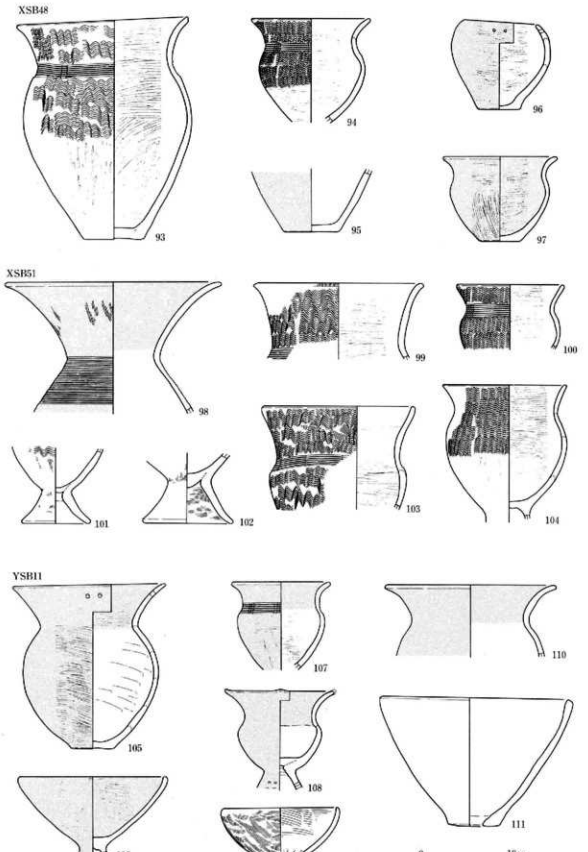


図34　X48号（93～97）、X51号（98～104）、Y11号（105～111）住居址出土土器実測図

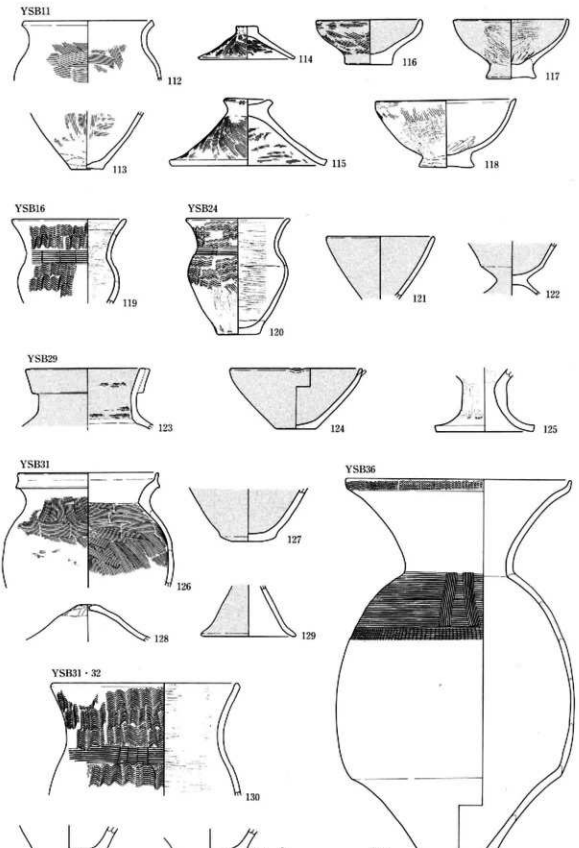


図35　Y11号（112～118）、Y16号（119）、Y24号（120～122）、Y29号（123～125）、Y31号（126～129）、Y31号・32号（130～132）、Y36号（133）住居址出土土器実測図

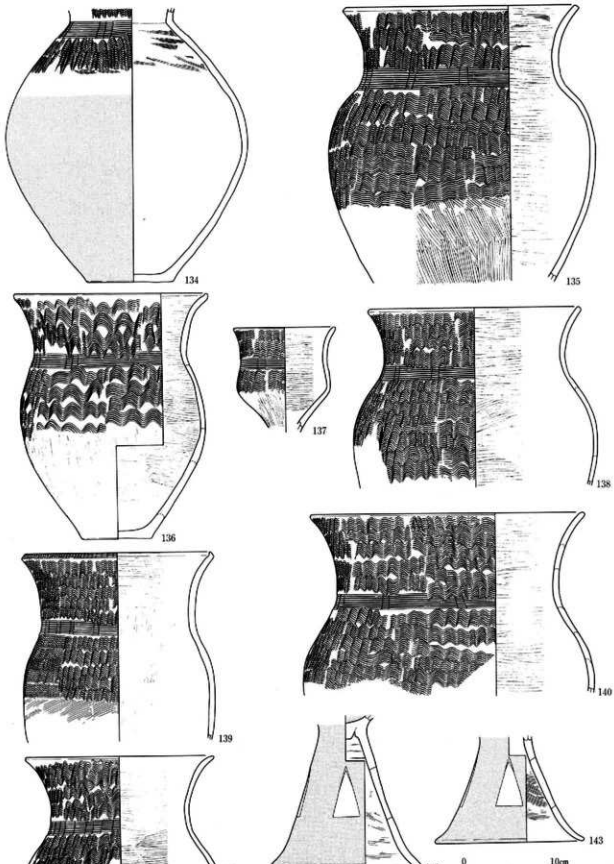


図36　Y30号（134～143）住居址出土土器実測図

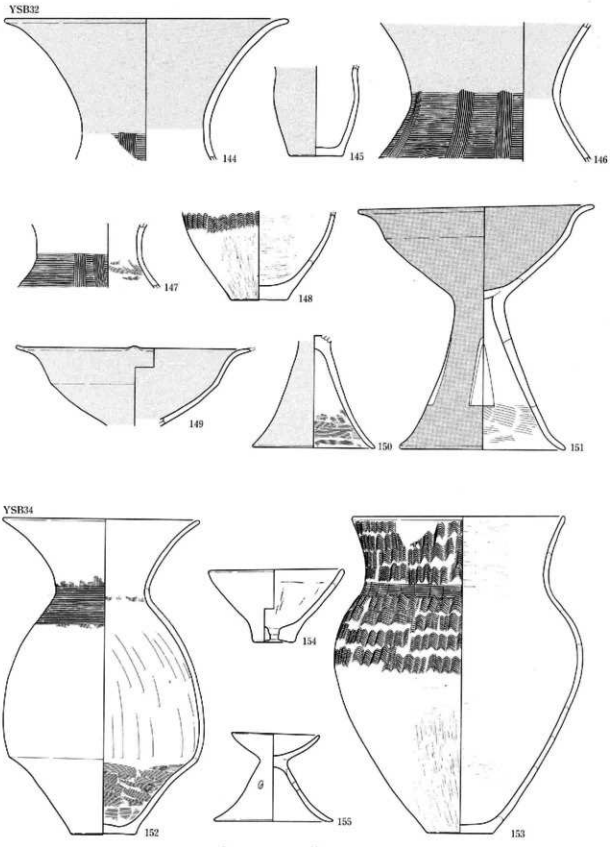


図37　Y32号（144～151）、Y34号（152～155）住居址出土土器実測図

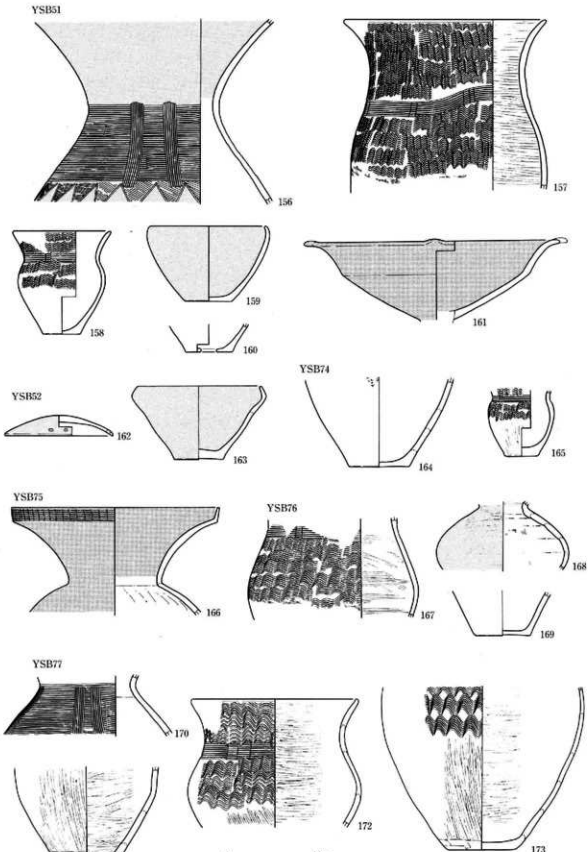


図38　Y51号（156～161）、Y52号（162・163）、Y74号（164・165）、Y75号（166）、Y76号（167～169）、Y77号（170～173）住居址出土土器実測図

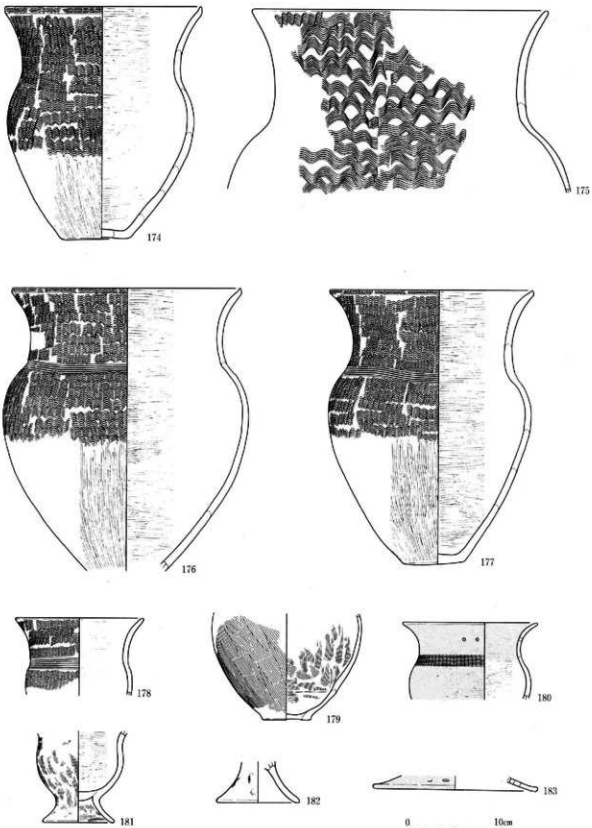


図39　Y71号（174～183）住居址出土土器実測図

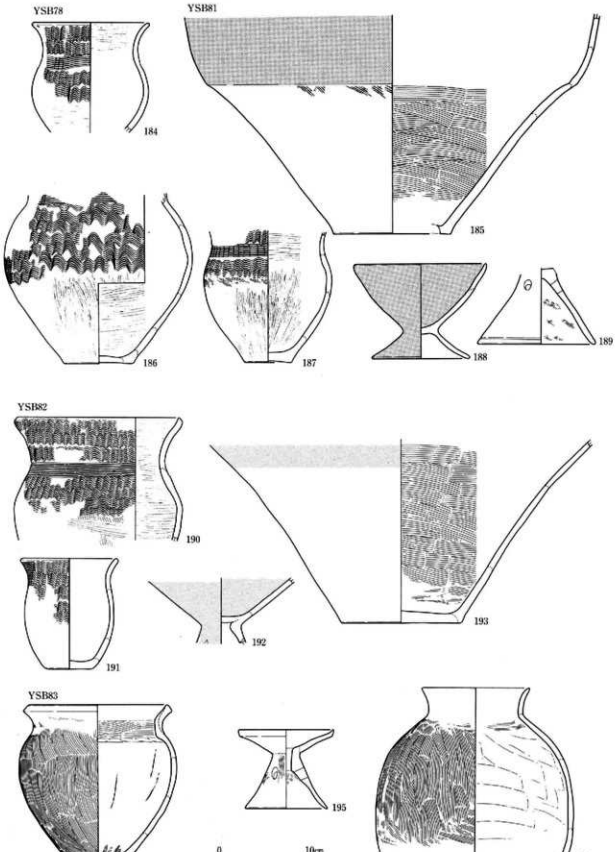


図40　Y78号（184）、Y81号（185～189）、Y82号（190～193）、Y83号（194～196）住居址出土土器実測図

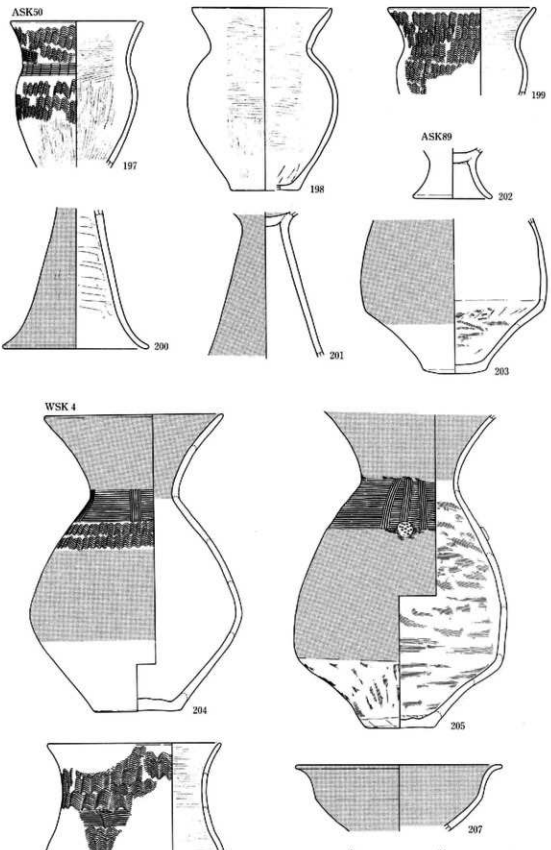


図41　A50号（197～201）、A89号（202・203）、W4号（204～207）土壙出土土器実測図

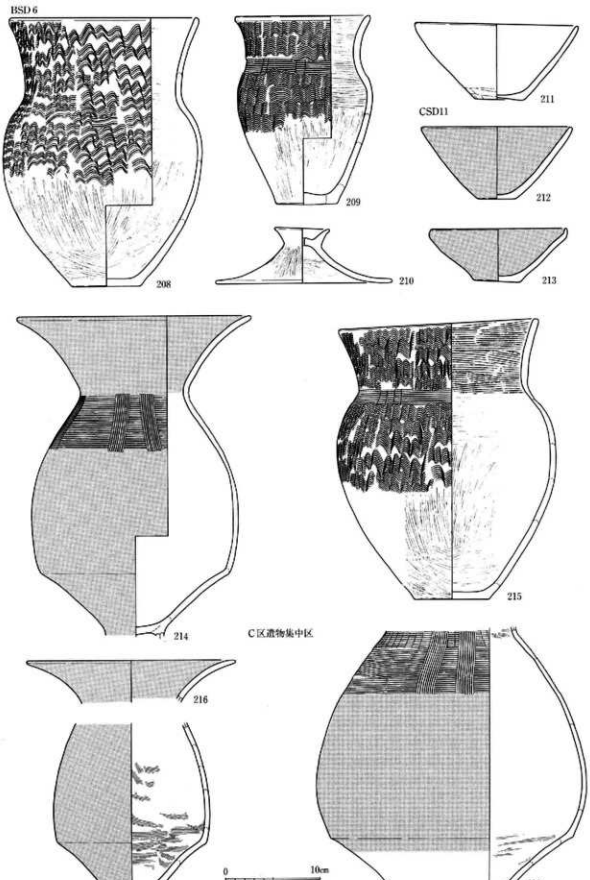


図42　B６号溝址（208～210）、C11号溝址（211～215）、C区遺物集中区（216～218）出土土器実測図

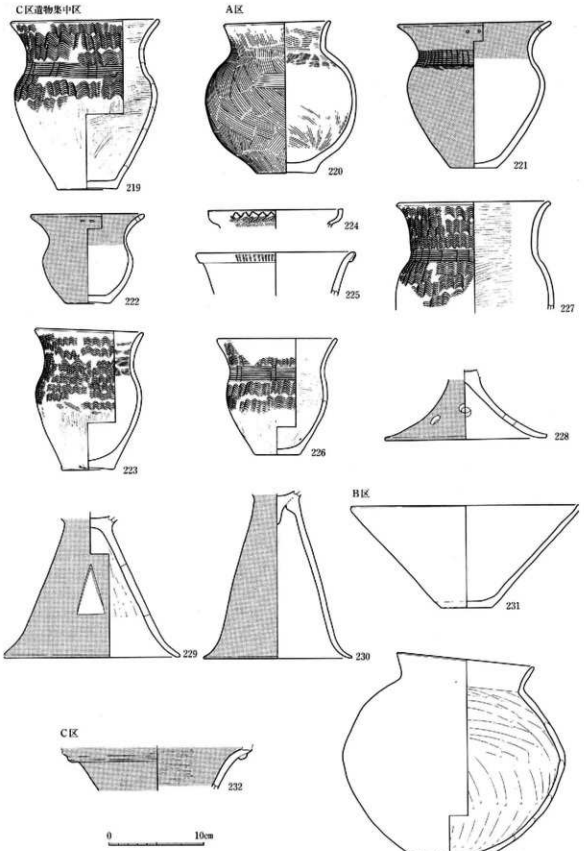


図43　C区遺物集中区（219）、A区（220～230）、B区（231）、C区（232・233）出土土器実測図

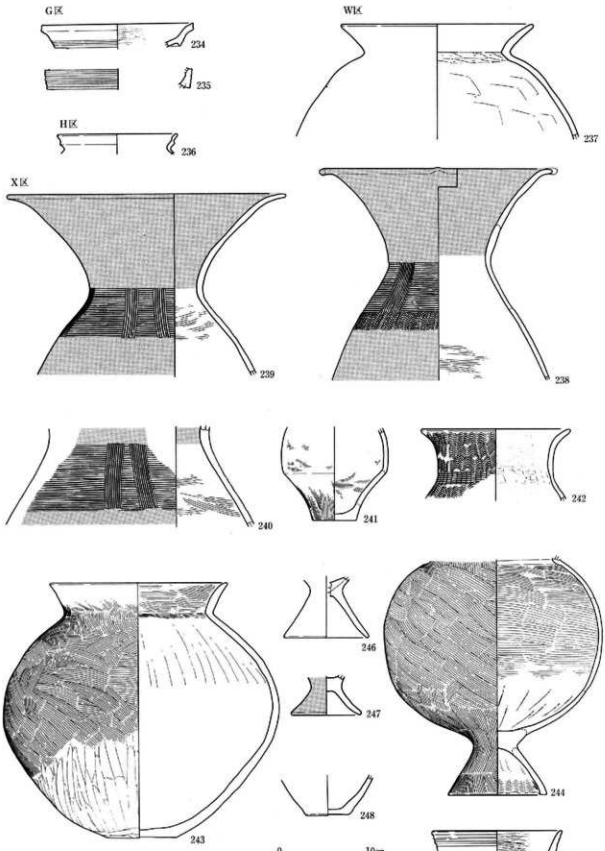


図44　G区（234・235）、H区（236）、W区（237・238）、X区（239～248）出土土器実測図

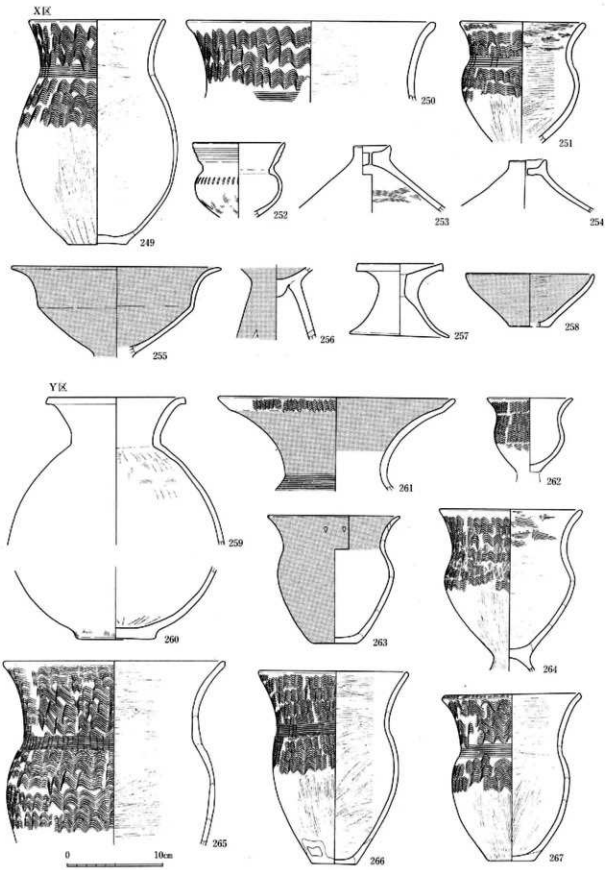


図45　X区（249～258）、Y区（259～267）出土土器実測図

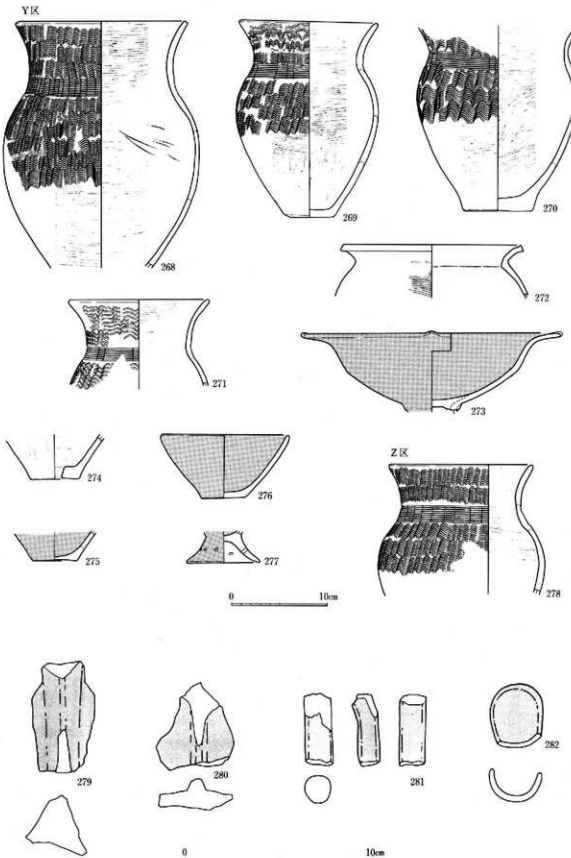


図46　Y区（268～277）、Z区（278）出土土器および土製品類（279～282）実測図

弥生時代後期遺構出土土器観察表(1)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
		A 20号住居址							
1	赤彩深鉢	19.1	—	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩　頸部と2ケ一対の穿孔	口縁～頸部：ヘラミガキ・赤彩　胴部：ヘラミガキ	
		A 29号住居址							
2	甕	11.8	6.3	19.4	2/3		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(上→下)　胴部：波状文(上→下)　胴下半：縦ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ(詳細不明)	
		A 31号住居址							
3	壺	40.2	—	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩　頸部：2本一対の丁字文、直線文4(上→下)→円形浮文+刺突　口縁部外面上端成後穿孔1	口縁：横ヘラミガキ・赤彩　胴部：ハケ→ナデ	
		A 35号住居址							
4	高坏	13.7	8.3	9.6	3/4		坏部：縦ヘラミガキ　脚部：縦ヘラミガキ　円形透孔	口唇部：面取り　坏部：放射状のヘラミガキ　脚部：ナデ	床・柱穴内、東海系
5	高坏	18.5	—	—	2/3		坏部：縦→斜ヘラミガキ　坏底部：ヘラケズリ→部分的上ヘラミガキ　脚部：ハケ→縦ヘラミガキ　円形透孔3	坏部：縦→斜ヘラミガキ　脚部：ハケ	床・覆土、東海系
6	台付甕	17.1	9.4	24.9	完	○	口唇部：ハケ原体による刻み　口縁：ハケ→強横ナデ　胴部：ハケ　脚部：ハケ	口縁：ハケ　胴部：ハケ　脚部：ハケ	床、E9号住と接合関係有、東海系
7	広口壺	13.4	5.4	13.2	完		口唇部：つまみ上げ状の横ナデ面取り　口縁～胴部：ハケ　底部：ナデ	口縁～胴部：ハケ　口縁と底部付近のハケ原体は、外面と異なる	床
8	短頸壺	8.8	—	—	1/2		口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ハケ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ハケ　2種のハケ原体使用。頸部のハケ原体は外面と同一	床
9	甕	12.5	4.8	14.0	5/6		口唇：面取りぎみの強横ナデ　口縁：ハケ　頸部：右回り2連止め簾状文　胴部：ハケ→縦ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ	口縁～胴部：ハケ　2種のハケ原体使用。口縁部のハケ原体は外面と同一	床・覆土
		A 47号住居址							
10	甕	15.2	—	—	1/2		頸部：勾丁字文→口縁：波状文(上→下)　胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
		A 48号住居址							
11	赤彩深鉢	15.7	—	—	1/2		口縁：横ヘラミガキ・赤彩　2ケ一対の円孔　頸部：右回り2連止め簾状文　胴部：横ヘラミガキ・赤彩	口縁：横ヘラミガキ・赤彩　胴部：ヘラミガキ	
12	坏	—	6.0	—	2/3		坏部：ヘラミガキ・赤彩　底部周辺のみ横ヘラケズリ　底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ・赤彩	
13	有孔鉢	17.1	5.6	9.6	3/4		坏部：ハケ→ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ→ナデ　焼成前穿孔1	斜ハケ→横ヘラミガキ	
		A 45号住居址							
14	壺	19.3	—	—	3/4		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩　頸部：勾丁字文、5ケ所	横ヘラミガキ・赤彩	
15	壺	—	—	—	3/4		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩　頸部：右回り等間隔止め簾状文5(上→下)　胴部：斜ヘラミガキ・赤彩	口縁：横ヘラミガキ・赤彩　胴部：ヘラナデ	
16	甕	32.2	—	—	5/6		頸部：右回り3連止め簾状文　口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(下→上)　胴下半：横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
17	壺	—	6.0	—	3/4		胴部：ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	口縁：横ヘラミガキ　胴部：ナデ	
18	壺	—	5.8	—	3/4		縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラナデ	
19	甕	20.0	9.4	28.6	3/4		口唇：若干内湾　頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　胴下半：縦ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	全体上横ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(2)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
20	甕	16.8	—	—	3/4		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
21	甕	13.8	6.0	18.4	完		口唇：若干内湾　頸部：右回り4連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　胴下半：縦ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ	横ヘラミガキ	
22	甕	12.0	—	—	4/5		口縁ー胴部：波状文(上→下)　胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
23	台付甕	14.0	—	—	2/3		口唇：面取りぎみ　口縁ー胴部：波状文(上→下)→円形浮文　胴下半：ヘラミガキ	ハケ→横ヘラミガキ	
24	坏	11.7	5.6	5.4	2/3		坏部：ヘラミガキ・赤彩　底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	
25	高坏	—	8.2	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩　脚部：ナデ	
26	高坏	20.4	—	—	3/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
27	高坏	20.6	—	—	完		ハケ→ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
		B11号住居址							
28	壺	33.8	—	—	1/6		口唇：山形突起　口縁：ハケ→ヘラミガキ・赤彩　頸部：2本一対の櫛工字文	口縁：横ヘラミガキ・赤彩 頸部：ハケ→ナデ	
29	甕	18.6	—	—	3/4		頸部：右回り2連止め簾状文　口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(基本的に上→下)　波状文は基本的に右回りの区画単位施文	粗い横ヘラミガキ	
		C6号住居址							
30	甕	23.4	—	—	3/4		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下)　波状文は右回りの区画単位施文 胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	床
31	甕	26.6	—	—	1/6		口唇：面取り　頸部：櫛直線文？→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文　波状文：右回り区画単位施文	横ヘラミガキ	
32	甕	—	—	—	完		頸部：右回り等間隔止め簾状文→胴部：波状文(上→下) 胴下半：ハケ→縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	床
33	甕	16.6	—	—	1/4		口唇：横ナデ・面取り　頸部：右回り4連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　波状文：右回り区画単位施文	横ヘラミガキ	床
34	甕	12.2	—	—	完		口唇：横ナデ・面取り　頸部：左回り2連止め簾状文→口縁：波状文(上→下)　胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	床
35	台付甕	16.2	—	—	完		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下)　胴下半→脚部：縦ヘラミガキ	胴部：部分的なヘラケズリ→ヘラミガキ　脚部：ナデ	床
36	甕	—	7.6	—	1/3		胴下半：縦ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	斜ヘラミガキ	床
37	台付甕	—	—	—	1/3		波状文　ヘラミガキ？	ヘラミガキ？	床
38	片口鉢	14.9	5.6	7.8	3/4		片口1　ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	床・覆土
39	坏	11.8	6.2	7.1	1/4		坏部：ヘラミガキ・赤彩　底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	床
40	坏	9.7	4.7	4.9	1/3		坏部：ヘラミガキ・赤彩　底部：ヘラミガキ	剥落・詳細不明	床
		C7号住居址							
41	高坏	—	—	—	1/6		ヘラミガキ・赤彩　脚の接合は円板充塡	坏部：ヘラミガキ・赤彩　脚部：ナデ	
		C8号住居址							
42	壺	—	5.8	—	3/4	○	横ー斜ハケ→縦ハケ　底部からの成形は輪台技法による	くもの巣状のハケ	床
		E8号住居址							
43	甕	—	7.4	—	2/3		頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上？)　胴部：波状文(上→下？)　胴下半：縦ヘラミガキ　磨耗詳細不明	ヘラケズリorハケ　磨耗詳細不明	
		W12号住居址							
44	壺	20.2	—	—	1/3		口唇：部分的に折り返し口縁ぎみに肥厚　横ヘラミガキ 口縁：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(3)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
45	甕	19.3	—	—	1/4		頸部：右回り4連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文：右回り区画単位施文	横ヘラミガキ	
46	甕	8.9	4.7	9.7	完		口縁：横ナデ 頸部～胴上半：ハケ 胴下半：ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	口縁：横ハケ 胴部：ハケ	
47	甕	—	7.0	—	2/3		胴下半：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	
48	坏	18.5	6.9	9.3	1/3		坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ 底部側面に焼成後穿孔1	ヘラミガキ・赤彩	
49	坏	15.3	5.2	8.4	3/4		坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	
		W13号住居址							
50	壺	11.2	5.6	18.2	完		口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ 底部：ナデ	口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ヘラナデ	炉内
51	壺	—	6.0	—	2/3		頸部：櫛直線文2 焼成後穿孔1 胴部：ヘラミガキ 底部：ナデ	雑なヘラミガキ	
52	甕	15.9	7.6	12.6	3/4		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁部：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴部下半：ヘラケズリ→縦ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ→ヘラミガキorナデ	横ヘラミガキ	
		W14号住居址							
53	壺	20.6	—	—	3/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
54	甕	13.4	—	—	1/3		口縁：受口状 頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文：右回り区画単位施文	ハケ→ヘラミガキ	
55	甕	16.2	6.2	14.8	完		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下) 胴部下半：ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
56	壺	26.4	—	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：櫛T字文6 直線文上→下4 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ナデ	
		X18号住居址							
57	甕	13.7	5.8	14.3	1/5		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁 胴部：波状文(施文順序不明) 胴下半：雑なヘラミガキ 底部：ナデ	口縁～胴上半：ヘラケズリ→ナデ 胴下半：雑なヘラミガキ	
58	甕	14.8	5.1	17.0	完		口縁～胴部：波状文(上～下)→頸部：櫛直線文 胴下半：ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	口縁：横ヘラミガキ 胴上半：ハケ 胴下半：ヘラケズリ	
59	甕	16.2	4.9	19.7	3/4		口縁～胴部：波状文(施文順序・不定) 胴部下半：ヘラケズリ→ナデ 底部：ヘラケズリ	口縁：強横ナデ 胴部：ヘラケズリ	
60	台付甕	14.4	7.4	18.9	3/4	○	口縁：つまみ上げ状の強横ナデ 口縁：横ナデ 胴～脚部：ハケ	口縁～胴上半：ハケ 胴下半：ハケ→ユビナデ 脚部：ハケ	東海系
61	坏	14.0	6.4	5.0	1/4		口縁：内湾 横ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	横ヘラミガキ・赤彩	
62	台付甕	—	8.0	—	1·3		縦ヘラミガキ	ナデ	
63	高坏	19.4	—	—	1/4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
		X25号住居址							
64	高坏	—	17.4	—	1/3		縦ヘラミガキ・赤彩	ナデ	
65	坏	12.6	4.2	7.1	1/2		坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
		X28号住居址							
66	坏	13.0	3.9	5.5	1/4		坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
67	鉢	8.6	—	—	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
68	甕	25.2	—	—	1/6		頸部：櫛直線文→口縁 胴部：波状文(施文順序等詳細不明)	横ヘラミガキ	
		X29号住居址							
69	壺	—	5.4	—	1/4		胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ	ハケ→ナデ	

弥生時代後期遺構出土器観察表(4)

番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
70	高坏	—	—	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩　円板充塡	ヘラミガキ・赤彩	
71	高坏	15.8	—	—	完		口縁：山形突起4　坏部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
		X52号住居址							
72	甕	11.7	4.5	12.1	3/4		口唇：横ナデ　受け口状に内汚　頸部：櫛直線文→口縁：波状文1　胴部：波状文(上→下)　胴下半：ハケ→ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
73	甕	14.0	4.8	16.2	2/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(施文順序不定)　胴部：波状文　胴下半：ヘラミガキ　底部：ヘヲケズリ	ヘラミガキ	
		X41号住居址							
74	甕	18.2	7.2	28.6	2/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(施文単位毎に施文順序変化)　胴下半：縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	床・覆土
75	甕	17.2	7.6	21.0	1/3		口唇：内沓　口縁～胴部：波状文(上→下)　右回りの区画単位施文　胴下半：ヘラミガキ　底部：ナデ	横ヘラミガキ	床
76	甕	15.7	—	—	1/3		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(上→下)　胴部：波状文(上→下)	ヘラミガキ	床
77	甕	14.5	—	—	1/6		口唇：横ナデ・面取り　頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：横ヘラミガキ	ヘラミガキ	床・覆土
78	甕	—	6.6	—	1/3		胴部：ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	床
79	台付甕	9.8	—	—	3/4		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　胴下半～脚部：ヘラミガキ　脚部接合は円板充塡による	ヘラミガキ	床
80	甕	8.1	—	—	1/2		頸部：櫛直線文→口縁：波状文(上→下)　胴部：波状文(上→下)	ヘラミガキ	床・覆土
81	坏	9.9	4.2	6.5	1/3		坏部：ヘラミガキ・赤彩　底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	床・覆土
82	有孔鉢	17.0	5.5	10.9	2/3		ヘラミガキ　底部：焼成前穿孔　炭白色の付着物有	ヘラミガキ	覆土
		X45号住居址							
83	壺	—	—	—	1/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩　頸部：櫛直線文2→右回り等間隔止め簾状文→ヘラミガキ・赤彩による丁字文　胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩　胴部：ヘラ平滑化→ナデ	
84	甕	19.6	—	—	1/6		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
85	甕	15.9	—	—	完		頸部：櫛直線文？→口縁：櫛波状文(下→上)	ヘラケズリ→横ヘラミガキ	
86	甕	15.9	—	—	1/3		口唇：つまみ上げ状の横ナデ・面取り→波状文　頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(上→下)　胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
87	甕	—	6.4	—	完		胴部：ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
88	台付甕	—	10.3	—	3/4		剥落　詳細不明　脚部の接合は円板充塡による	胴部：ヘラミガキ　脚部：ハケ→ナデ	
89	甕	—	6.0	—	完		縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
		X54号住居址							
90	甕	12.5	—	—	完		頸部：櫛直線文→口縁波状文　胴部：波状文	ハケ→横ヘラミガキ	
91	坏	14.7	—	—	1/2		口唇：山形突起　坏部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
92	壺	—	20.4	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩　頸部：2本一対の櫛T字文4→右回り等間隔止め簾状文　胴部：ヘラミガキ・赤彩　底部：焼成後穿孔	口縁：ヘラミガキ・赤彩　胴部：ヘラナデ	
		X48号住居址							
93	甕	18.3	6.5	23.4	2/3		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　胴下半：縦ヘラミガキ　底部：ヘラナデ	ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(5)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
94	甕	12.6	—	—	完		頸部：右回り4連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：横ヘラミガキ	ヘラミガキ	
95	赤彩深鉢	—	5.8	—	2/3		胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
96	無頸壺	7.8	4.4	9.2	2/3		口縁：2ケ一対の円孔 横ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ	
97	鉢	12.1	4.4	9.0	1/3		口縁～胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	
	X51号住居址								
98	壺	23.2	—	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：直線文4 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ナデ	床
99	甕	18.0	—	—	2/3		口唇：面取り→波状文 頸部：右回り3連止め簾状文→口縁部：波状文(下→上)	ヘラミガキ	床
100	甕	11.4	—	—	1/2		頸部：右回り4連止め簾状文→口縁：波状文 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	床
101	台付甕	—	7.4	—	2/3		胴部：波状文 ハケ→ヘラミガキ 脚部：ハケ→ヘラミガキ 脚部の接合は円板充塡による	胴部：ヘラミガキ 脚部：横ナデ	床
102	台付甕	—	9.6	—	3/4		ハケ→ヘラミガキ 脚部の接合は円板充塡による	胴部：ヘラミガキ 脚部：ハケ→ナデ	床
103	甕	16.2	—	—	1/4		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	床
104	台付甕	13.1	—	—	2/3		口縁～胴上半：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	床
	Y11号住居址								
105	赤彩深鉢	16.2	4.4	17.4	3/4		口縁：2ケ一対の焼成前穿孔 ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラケズリ→ナデ	床
106	高坏	15.9	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	床
107	赤彩深鉢	10.5	—	—	1/2		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：右回り3連止め簾状文 胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ	床
108	台付鉢	11.4	—	—	1/2		口唇：山形突起 口縁～脚部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：2列の円形透孔(焼成前穿孔)	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：不明	床・覆土
109	坏	12.0	4.2	5.8	1/3		坏部：ハケ 底部：ハケ	ハケ(原体は外面と異なる)	床・覆土
110	赤彩深鉢	18.1	—	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ→ヘラミガキ	床・覆土
111	有孔鉢	20.5	5.4	13.6	2/3		口唇：面取り 坏部：ヘラミガキ 底部：焼成前穿孔1	ヘラナデ	床
112	甕	13.5	—	—	1/3	○	口唇：つまみ上げ状の強横ナデ、面取り 口縁：横ナデ 胴部：ハケ	口縁：横ナデ 胴部：ハケ	床・覆土・北陸系
113	甕	—	3.4	—	2/3	○	胴部：縦ハケ 底部周辺：横ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	ハケ→ナデ	床・北陸系
114	蓋	10.2	—	3.5	完		口唇：強横ナデ 体部：ハケ つまみ部：ナデ	ハケ→ナデ	床・北陸系
115	蓋	16.6	—	7.1	完		口唇：横ナデ、面取り 体部：ハケ つまみ部：ナデ、部分的にヘラ刻みと沈線	ハケ	床・北陸系
116	坏	11.0	4.9	4.8	2/3		ハケ→軽いヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ・赤彩	床
117	坏	12.3	5.3	6.3	3/4	○	ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ 口唇：面取り	ヘラ平滑化→ヘラミガキ・赤彩	床・北陸系
118	坏	14.9	5.3	7.2	完		口縁：強横ナデ 体部：ハケ→ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラケズリ→ナデ	床・北陸系
	Y16号住居址								
119	甕	12.2	—	—	2/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁部：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
	Y24号住居址								
120	甕	11.0	4.6	12.4	2/3		口縁～胴上半：波状文(上→下)→頸部：右回り2連止め簾状文 胴下半：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(6)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
121	高坏	11.4	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
122	高坏	—	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ナデ	
		Y29号住居址							
123	壺	13.2	—	—	1/2		口縁：粘土帯貼り付けによる複合口縁 ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ヘラミガキ・赤彩	
124	坏	14.0	4.4	6.4	5/6		口縁：片口1 坏部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ナデ	ヘラミガキ・赤彩	
125	器台	—	10.6	—	3/4		ヘラミガキ	ヘラミガキ・ナデ	
		Y31号住居址							
126	甕	15.0	—	—	1/3	○	口縁：強横ナデ 頸部～胴部：ハケ→ナデ	口縁：強横ナデ 胴部：ハケ	北陸系
127	鉢	—	6.0	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
128	蓋	—	—	—	2/3		天井部：焼成前穿孔1 ヘラケズリ	ヘラミガキ	
129	高坏	—	10.0	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ナデ	
		Y31号・32号住居址							
130	甕	20.1	—	—	1/4		頸部：右回り4連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文	横ヘラミガキ	
131	有孔鉢	—	6.2	—	1/2		縦ヘラミガキ 焼成前穿孔1	ナデ	
132	甕	—	7.2	—	1/2		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
		Y36号住居址							
133	壺	24.1	(7.0)	41.0	完		口縁：受け口、波状文→縦ヘラミガキ 頸部：2本一対の丁字文3→右回り等間隔止め簾状文 胴上半：横ヘラミガキ 胴下半：縦ヘラミガキ	口縁：横ヘラミガキ 胴部：ヘラナデ→ナデ	
		Y30号住居址							
134	壺	—	9.2	—	2/3		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文 胴部：波状文(上→下) 胴部：縦ヘラミガキ・赤彩	口縁：磨耗不明 胴上部：ハケ 胴下部：ナデ	樽系
135	甕	25.1	—	—	2/3		口唇：面取り→ヘラミガキ 頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文	ハケ→ヘラミガキ	
136	甕	20.6	7.4	26.2	完		口唇：つまみ上げ状の横ナデ 頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文	ヘラミガキ	
137	台付甕	10.8	—	—	完		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
138	甕	22.6	—	—	1/4		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下)	ハケ→横ヘラミガキ	
139	甕	20.5	—	—	1/4		口唇：つまり上げ状の横ナデ・面取り→簾状文 頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は左回りの区画単位施文	口縁：横ヘラミガキ 胴部：指頭押捺→軽いヘラミガキ	
140	甕	29.0	—	—	3/4		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文	ヘラミガキ	
141	甕	20.1	—	—	1/5		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁、胴部：波状文 波状文の施文順序に規則性なし	横ヘラミガキ	
142	高坏	—	15.9	—	2/3		縦ヘラミガキ・赤彩、三角形透孔4、円板充填	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部・ハケ→ナデ	
143	高坏	—	15.8	—	完		縦ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔4	ハケ→ナデ	
		Y32号住居址							
144	壺	30.2	—	—	1/4		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩 頸部：櫛T字文	横ヘラミガキ・赤彩	
145	赤彩環鉢	—	5.8	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	磨耗・詳細不明	
146	壺	—	—	—	1/4		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：櫛T字文	ヘラミガキ・赤彩	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(7)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
147	壺	—	—	—	1/3		口縁：縦ヘラミガキ　頸部：2本一対のT字文3	ハケ→ナデ	
148	甕	—	6.2	—	2/3		波状文、縦ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
149	高坏	24.5	—	—	1/4		口特：山形突起　ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
150	高坏	—	13.0	—	2/3		縦ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	
151	高坏	25.1	17.6	25.9	2/3		坏部：ヘラミガキ・赤彩　脚部：ヘラミガキ・赤彩　三角形透孔4	坏部：ヘラミガキ・赤彩　脚部：ハケ・ナデ	
		Y34号住居址							
152	壺	21.0	7.0	33.4	3/4		口縁：縦ヘラミガキ　頸部：櫛直線文3（上→下）　胴上半：横ヘラミガキ　胴下半：縦ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ	口縁：横ヘラミガキ　胴部：ハケ・ヘラナデ	
153	甕	22.8	7.0	33.6	3/4		口特：面取り　頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(下→上？)　胴部：波状文(上→下？)　胴下半：ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ？	
154	有孔鉢	14.4	4.4	7.7	完		体部：横ヘラミガキ　底部：焼成前穿孔1	ヘラ平滑化→ヘラミガキ	
155	器台	9.4	12.6	9.3	3/4		磨耗　詳細不明　円形透孔	磨耗　詳細不明	
		Y51号住居址							
156	壺	—	—	—	1/2		口縁：縦ヘラミガキ・赤彩　頸部：2本一対のT字文→ヘラ描歯文	口縁：ヘラミガキ・赤彩　胴部：ナデ	
157	甕	21.4	—	—	3/4		頸部：右回り2～3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　波状文は右回りの区画単位施文　ハケ→ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
158	甕	10.4	4.0	11.0	2/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　ヘラミガキ	ヘラミガキ	
159	坏	12.4	4.9	8.0	1/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
160	有孔鉢	—	5.0	—	完		ヘラミガキ　底部：焼成前穿孔1	ヘラミガキ	
161	高坏	26.3	—	—	1/8		口特：山形突起　坏部：ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
		Y52号住居址							
162	蓋	11.6	—	2.1	2/3		口縁：2孔一対の穿孔　ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ	
163	坏	13.1	5.7	7.7	1/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
		Y74号住居址							
164	甕	—	6.4	—	2/3		流状文　縦ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
165	甕	—	3.6	—	1/3		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文　胴部：波状文(上→下)　胴下半：ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	横ナデ	
		Y75号住居址							
166	壺	22.1	—	—	1/3		受口口縁：右回り等間隔止め簾状文　口縁～胴上半：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩　胴部：指頭押捺→ナデ	
		Y76号住居址							
167	甕	—	—	—	1/2		頸部：右回り2連止め簾状文→胴部：流状文(上→下)	斜ハケ→ヘラミガキ	
168	壺	—	—	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	北陸系？
169	甕	—	5.9	—	完		ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ	磨耗　不明	
		Y77号住居址							
170	壺	—	—	—	完		頸部：2本一対のT字文5　直線文(上→下)	ナデ	
171	甕	—	6.2	—	1/3		胴部：縦ヘラミガキ　底部周辺：ヘラケズリ　底部：ヘラケズリ	横ヘラミガキ	
172	甕	17.8	—	—	1/3		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　胴下半：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
173	甕	—	7.2	—	1/3		胴部：波状文(上→下)　胴下半：縦ヘラミガキ　底部周辺：ヘラケズリ　底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	横ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(8)

番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
		Y71号住居址							
174	甕	21.0	7.2	24.7	4/5		口唇：面取り→波状文　口縁～頸部：波状文(下→上)　頸部～胴部：波状文(上→下)　胴下半：縦ヘラミガキ　波状文は右回りの区画単位施文	横ヘラミガキ	
175	甕	36.4	—	—	1/6		口縁～胴上半：波状文　波状文は右回りの区画単位に施文されるが、区画単位毎に施文順序を違える	ハケ→横ヘラミガキ	
176	甕	24.3	—	—	1/3		口唇：面取り→波状文　頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　波状文は右回りの区画単位施文　胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
177	甕	21.7	6.6	29.0	3/4		口唇：面取り→波状文　頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　波状文は右回りの区画単位施文　胴下半：縦ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
178	甕	13.6	—	—	2/3		頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)	横ヘラミガキ	
179	壺	—	5.2	—	1/4	○	斜ハケ　底部の成形は輪台技法による	ハケ	東海系
180	赤彩壺体	14.4	—	—	2/3		口縁：2孔一対の円孔　ヘラミガキ・赤彩　頸部：右回り等間隔止め簾状文　胴部：横ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩　胴部：ヘラミガキ	
181	台付甕	—	7.6	—	完		ハケ→ナデ	胴部:横ヘラミガキ　脚部:ハケ	
182	台付甕	—	8.9	—	2/3		ハケ→軽いヘラミガキ	ナデ	
183	高坏	—	17.6	—	1/10		ヘラミガキ・赤彩　2孔一対の円孔	ヘラミガキ	
		Y78号住居址							
184	甕	12.6	—	—	1/3		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　胴下半：横ヘラミガキ	口縁：横ヘラミガキ　胴部：ナデ	
		Y81号住居址							
185	壺	—	12.4	—	2/3		胴上半:横ヘラミガキ・赤彩　胴下半:ハケ→縦ヘラミガキ	胴上半:ヘラナデ　胴下半:ハケ	
186	甕	—	7.5	—	1/2		胴上半：波状文(上→下)→頸部：右回り2連止め簾状文　胴下半：ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	横ヘラミガキ	
187	甕	—	5.0	—	1/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文　胴部：波状文(上→下)　胴下半：ハケ→縦ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	
188	高坏	13.9	10.2	10.1	完		ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩　脚部：ナデ	
189	高坏	—	12.3	—	完		ヘラミガキ・円形透孔	ハケ→ナデ	
		Y82号住居址							
190	甕	17.2	—	—	1/3		口唇：つまみ上げ状の強横ナデ・面取り　頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　波状文は右回りの区画単位施文	ハケ→ヘラミガキ	
191	甕	10.4	5.2	11.8	1/2		口縁～胴上半：波状文(上→下)　胴下半：ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	磨耗　不明	
192	高坏	—	—	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩　三角形透孔	坏部：ヘラミガキ・赤彩　脚部：ナデ	
193	壺	—	12.8	—	1/3		胴上半：ヘラミガキ・赤彩　胴下半：縦ヘラミガキ	横ハケ	
		Y83号住居址							
194	甕	14.8	—	17.0	1/2		口唇：つまみ上げ状の強横ナデ・面取り　頸部～胴部：ハケ　底部：ハケ	口縁：ハケ→横ナデ　胴部：ヘラケズリ→ナデ	北陸系
195	器台	10.1	8.7	8.4	2/3		ハケ→ミガキ　円形透孔3	坏部：磨耗・不明　脚部：ハケ→ナデ	
196	壺	11.4	—	—	3/4		口縁：強横ナデ　胴部：ハケ	口縁:強横ナデ　胴部:ヘラナデ	
		A50号土壙							
197	甕	14.1	—	—	2/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁,胴部：波状文(施文順序不定)	ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(9)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
198	甕	14.8	7.3	19.4	1/2		口縁：ハケ→ヘラミガキ 胴部：ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	
199	甕	15.8	—	—	1/4		口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(下→上)	ヘラミガキ	
200	高坏	—	15.8	—	完		脚ヘラミガキ・赤彩	ヘラケズリ→ナデ	
201	高坏	—	—	—	3/4		脚ヘラミガキ・赤彩	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ナデ	
	A 89号土壙								
202	台付壺	—	8.5	—	3/4		脚ヘラミガキ	横ナデ	
203	壺	—	6.7	—	1/3		胴上半：ヘラミガキ・赤彩 胴下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラミガキ	胴上半：ナデ 胴下半：ハケ→ナデ	
	W 4号土壙								
204	壺	19.0	9.0	31.4	2/3		口縁：脚ヘラミガキ・赤彩 頸部：描T字文→波状文 胴上半：ヘラミガキ・赤彩 胴下半：ヘラミガキ	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：磨耗・不明	
205	壺	—	7.2	—	2/3		口縁：ハケ→ヘラミガキ・赤彩 頸部：3本一対のT字文＋円形浮文 胴上半：ヘラミガキ・赤彩 胴下半：ハケ→ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ハケ	
206	甕	18.5	—	—	1/6		頸部：描直線文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下)	ヘラミガキ	
207	高坏	22.0	—	—	1/4		横ヘラミガキ・赤彩	横ヘラミガキ・赤彩	
	B 6号溝址								
208	甕	20.3	7.2	28.6	3/4		口縁～胴上半：波状文(下→上) 波状文は右回りの区画単位施文 胴下半：斜ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	
209	甕	14.3	6.5	20.1	完		口唇：横ナデ・面取り 頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 波状文は右回りの区画単位施文 胴下半：縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	
210	蓋	18.8	—	5.9	2/3		つまみ部：ナデ・焼成前穿孔1 体部：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
	C 11号溝址								
211	坏	17.4	5.2	8.0	完		坏部：ハケ→ヘラミガキ 底部周辺：ヘラケズリ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	床
212	坏	16.0	4.0	7.7	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	床
213	坏	14.4	5.0	5.6	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	床
214	台付壺	25.0	—	—	2/3		口縁：ヘラミガキ・赤彩 頸部：2本一対のT字文4・直線文(上→下) 胴～脚部：ヘラミガキ・赤彩 脚との接合は円板充填	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：刷毛・不明	床
215	甕	21.3	7.9	29.3	完		口唇：面取り・ヘラミガキ 頸部：右回り4連止め簾状文→口縁・胴部：波状文(施文順序不定) 波状文は右回りの区画単位施文 胴下半：ヘラミガキ	口縁：ハケ→ヘラミガキ 胴部：ヘラミガキ	床
	C遺物集中区								
216	壺	22.3	—	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
217	壺	—	5.1	—	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	
218	壺	—	—	—	1/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→直線文→2本一対のT字文 胴部：ヘラミガキ・赤彩	ハケ→ナデ	
219	甕	15.8	6.4	18.0	1/2		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ	
	A遺構外出土遺物								
220	壺	11.3	6.2	16.1	完		口縁：ハケ→横ナデ 胴部：ハケ 底部：ナデ	口縁：ハケ→ナデ 胴部：ハケ→ナデ	
221	赤彩深鉢	16.4	5.0	15.5	3/4		口縁：2孔一対の穿孔 ヘラミガキ・赤彩 頸部：右回り等間隔止め簾状文 胴部：ヘラミガキ・赤彩 底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(8)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
222	鉢	12.0	4.4	9.6	3/4		口縁：2孔一対の穿孔　口縁～胴部：ヘラミガキ・赤彩　底部：ヘラケズリ	口縁：ヘラミガキ・赤彩　胴部：ヘラミガキorナデ	
223	甕	11.5	5.4	14.9	3/4		口縁～胴上半：波状文(上→下)　波状文は右回りの区画単位施文　胴下半：ハケ→縦ヘラミガキ　底部：ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
224	甕	14.2	—	—	1/10		口縁：面取り　口縁：ヘラ描沈線文→ハケ刷突	ナデ	東海系
225	壺	16.6	—	—	1/10		口縁：粘土帯貼付けによる擬合口縁→ヘラ刻み　ヘラミガキ	ヘラミガキ	樽系
226	甕	12.7	4.8	12.4	1/3		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)　胴下半：ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ→ナデ	ヘラミガキ	
227	甕	16.4	—	—	2/3		口縁：面取り　頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(下→上)　胴部：波状文(上→下)	ハケ→ヘラミガキ	
228	高坏	—	17.3	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩　円形透孔、上下二段3ケずつ	ナデ	
229	高坏	—	18.6	—	完		縦ヘラミガキ・赤彩　三角形透孔3	ヘラケズリ→ナデ	
230	高坏	—	15.7	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩	ナデ	
		B遺構外出土遺物							
231	鉢	24.2	5.4	11.9	2/3		体部：横ヘラミガキ　底部周辺：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
		C遺構外出土遺物							
232	壺	—	—	—	1/6		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
233	甕	14.6	6.6	21.6	5/6		口縁：横ナデ　胴部：ヘラケズリ→ナデ　底部：ヘラケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ヘラケズリ	
		G遺構外出土遺物							
234	壺	16.1	—	—	1/8		口唇：つまみ上げ状の強横ナデ　凝凹線文2	軽いヘラミガキ	北陸系
235	壺	—	—	—	1/10		凝凹線　ヘラミガキ・赤彩	ナデ	北陸系
		H遺構外出土遺物							
236	甕	12.8	—	—	1/10	○	ナデ	ナデ	東海系
		W遺構外出土遺物							
237	甕	20.3	—	—	2/3		口縁：横ナデ　胴部：ヘラケズリ→ナデ	口縁：横ナデ　胴部：ヘラケズリ	
238	壺	24.1	—	—	2/3		口唇：山形突起4　口縁：縦ヘラミガキ・赤彩　頸部：櫛T字文+波状文　胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：横ヘラミガキ・赤彩　胴部：ハケ→ナデ	
		X遺構外出土遺物							
239	壺	29.4	—	—	3/4		口縁：ヘラミガキ・赤彩　頸部：2本一対のT字文3　胴部：ヘラミガキ・赤彩	口縁：ヘラミガキ・赤彩　胴部：ハケ→ナデ	
240	壺	—	—	—	1/6		口縁・胴部：ヘラミガキ・赤彩　頸部：2本一対の櫛T字文	ハケ→ナデ	
241	壺	—	4.6	—	1/3		胴上半：ハケ→ナデ　胴下半：ハケ	ハケ→ナデ	
242	甕	15.9	—	—	1/4		頸部：右回り等間隔止めの簾状文→口縁：波状文(上→下)　胴部：波状文	横ヘラミガキ	
243	甕	18.8	7.2	27.1	完		口縁：ハケ→強横ナデ　胴上半：ハケ　胴下半～底部：ヘラケズリ	口縁：ハケ→横ナデ　胴上半：ヘラケズリ　胴下半：ナデ	
244	台付甕	—	10.4	—	完	○	胴部：ハケ　脚部：ハケ　ハケ原体は内部とは異なる	胴部：ハケ　脚部：ハケ→ナデ	東海系
245	甕	13.9	—	—	1/10		凝凹線文	横ヘラミガキ	北陸系
246	台付甕	—	9.0	—	1/2		ヘラミガキ	胴部：ヘラミガキ　脚部：ナデ	
247	高坏	—	7.4	—	1/2		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ	

弥生時代後期遺構出土土器観察表(1)

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	胎土	成形・調整・文様 外面	内面	備考
248	甕	—	4.8	—	完		ヘラミガキ	ヘラミガキ	
249	甕	14.6	6.1	23.8	2/3		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(施文単位毎に施文順序異なる) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
250	甕	26.4	—	—	1/2		頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上) 波状文は右回りの区画単位施文	横ヘラミガキ	
251	甕	13.4	—	—	完		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
252	鉢	9.8	—	—	3/4	○	口縁：凹線文 肩部：ハケ刺突 胴下半：ハケ→ナデ	磨耗 詳細不明	北陸系
253	蓋	—	—	—	1/3		ヘラミガキ 天井部と焼成前穿孔1	ハケ→ナデ	
254	蓋	—	—	—	1/2		ヘラミガキ 天井部と焼成前穿孔1	ヘラミガキ	
255	高坏	22.2	—	—	完		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
256	高坏	—	—	—	2/3		ヘラミガキ・赤彩 三角形透孔	坏部：ヘラミガキ・赤彩 脚部：ナデ	
257	器台	9.0	10.7	7.7	3/4		磨耗 詳細不明	磨耗 詳細不明	
	Y遺構外出土遺物								
259	壺	14.8	—	—	2/3		口唇：面取り 口縁～胴部：ヘラミガキ？	口縁：ヘラミガキ？ 胴部：ハケ→ナデ	
260	壺	—	9.5	—	2/3		ハケ→ヘラミガキ？	ハケ→ナデ	
261	壺	25.1	—	—	1/4		口縁：波状文1 ヘラミガキ・赤彩 頸部：櫛直線文	ヘラミガキ・赤彩	
262	台付甕	9.0	—	—	完		口縁～胴部：波状文(上→下) 胴下半：ハケ→ヘラミガキ	ヘラミガキ	
263	赤彩器台	14.0	4.8	13.5	完		ヘラミガキ・赤彩 口縁と2孔一対の円孔	口縁：ヘラミガキ・赤彩 胴部：ヘラミガキ	
264	台付甕	15.3	—	—	3/4		口縁～胴部：波状文(上→下) 胴下半～脚部：縦ヘラミガキ	ハケ→ヘラミガキ	
265	甕	23.6	—	—	完		口縁～胴部：波状文 波状文は右回りの区画単位施文だが区画単位毎に上下の施文順序は異なる→頸部：右回り等間隔止め簾状文	横ヘラミガキ	
266	甕	15.9	4.7	20.5	完		口縁～胴部：波状文(上→下)頸部：右回り等間隔止め簾状文 底部側面に焼成後穿孔1	ヘラミガキ	
267	甕	14.9	4.8	17.6	完		口唇：面取り→波状文 頸部：櫛直線文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
268	甕	18.4	—	—	1/2		口唇：面取り 頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(上→下) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：横ヘラミガキ	ハケ→横ヘラミガキ	
269	甕	14.7	4.8	20.8	3/4		頸部：右回り3連止め簾状文→口縁：波状文(下→上？) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
270	甕	7.2	—	—	2/3		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文 胴部：波状文(上→下) 胴下半：ヘラミガキ	ヘラミガキ	
271	甕	15.0	—	—	1/3		頸部：右回り2連止め簾状文→口縁：波状文 胴部：波状文	ヘラミガキ	
272	甕	19.2	—	—	1/4		口唇：横ナデ・面取り 口縁：横ナデ 胴部：ハケ	口縁：横ナデ 胴部：ナデ	北陸系
273	高坏	27.0	—	—	3/4		口唇：山形突起4 ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
274	有孔鉢	—	5.2	—	1/3		焼成前穿孔1 縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	
275	坏	—	4.8	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
276	坏	13.6	5.7	6.8	3/4		ヘラミガキ・赤彩	ヘラミガキ・赤彩	
277	高坏	—	7.6	—	1/3		ヘラミガキ・赤彩 円形透孔	ヘラミガキ・赤彩	
	Z遺構外出土遺物								
278	甕	15.2	—	—	2/3		頸部：右回り等間隔止め簾状文→口縁：波状文(下→上) 胴部：波状文(上→下) 胴下半：縦ヘラミガキ	ヘラミガキ	

2　古墳時代の遺構と遺物

(1)遺構の分布（図47・48）

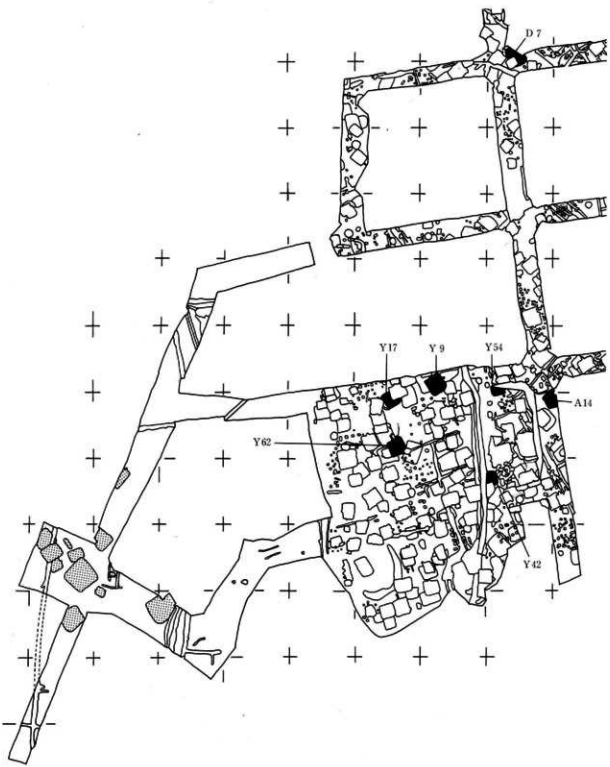
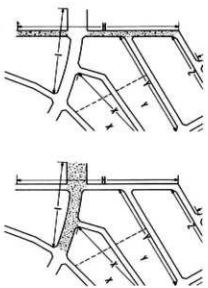


図47　古墳時代遺構分布図（アミ部前期、黒塗後期）



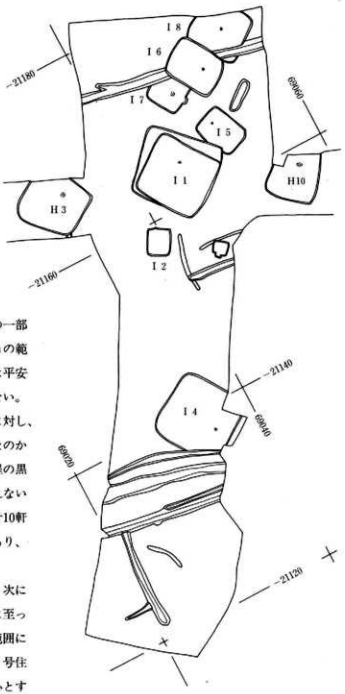


図48　H区・I区遺構分布図

古墳時代前期の遺構は綿内駅の東H区とI区の一部のみに展開する。その範囲は東西・南北共に60mの範囲におさまるものと思料される。他時代の遺構は平安時代に相当する溝址を除き生活遺構を見いだせない。他時代の遺構が現在の微高地を選定しているのに対し、何の理由でこの地域を限定して居住域を形成したのか不明である。ちなみに遺構確認面上部には10cm程の黒褐色粘質土が堆積しており、微高地では認められないことで、低地か窪地であった可能性が高い。総計10軒の住居址を検出したが、重複関係にあるものもあり、少なくとも2期の時間差がある。

この後、高野遺跡から居住施設の痕跡が消え、次に集落が形成されるようになるのは古墳時代後期に至ってからである。その規模は前期同様、小規模な範囲に散在し、同期で重複関係にあるものはない。D7号住居址のみ離れて位置するものの、他はY区を中心とする微高地に位置する。

⑵住居址（前期）（図49～52）

住居址形態は隅丸方形と隅丸長方形に大別することができる。長方形態が弥生時代からの継承形態とすれば、方形態は新たな形態変遷といえよう。例えば長方形態のI6号住居址と方形態のI7・8号住居址、I5号住居址とI1号住居址との間に形態重複に矛盾は生じない。長方形態の住居址は前記した2軒の他H9号住居址のみであり、主軸方向が180°異なるものの形態方向は同じである。方形態の住居址は7軒確認しており、規模に大小の差がある。一辺8m前後を測るI1（イ・ロ）・4号住居址、6m前後を中心とするH3・10号、I8号住居址があり、最小のI7号住居址は主軸3.9mにすぎない。また、I4号住居址を除き主軸が他壁より短かく、方向がN26°～36°W内におさまるのも共通している。I1号住居址は（イ）から（ロ）への拡張と考えられる。

主柱穴は４本柱（長）方形配列を基本とするが、小形のＩ５・７号住居址には認められない。

炉は全て地床炉で、柱穴間に設けられるのが通常とするが、Ｉ７・８号住居址では中央付近にある。Ｈ３号住居址は枕石炉である。

床面は平坦で堅緻である。Ｈ３号、Ｉ４・８号住居址では細長い河原石の散在が認められ、蔟編み用のいわゆるコモテ石であろう。

Ｉ２号住居址としたものは一辺３ｍ以内の小形のもので、炉・柱穴等は確認されず住居というよりも作業小屋または納屋の用途を推定した方が良さそうである。

⑶住居址（後期）（図53・54）

８軒の住居遺構を確認したが、全形を推定できるものは５軒にすぎない。Ｄ７号住居址が長方形態になる他は方形態である。主軸規模は５ｍ前後を測るが、方向は一定でない。

カマドは主軸壁の中央に構築されるが、Ｙ37号住居址は右寄りにある。形態の痕跡は明確ではないが、Ｙ37・62号住居址に見られるように粘土製両袖形のものを想定する。煙道は外方に大きく作り出すことを特色とする。主柱穴は４本柱方形配列を基本とする。

床面は平坦で堅緻なものが多い。Ｙ９号住居址の東壁下に周溝状の掘込みがある。

古墳時代前期住居址観察表

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
Ｈ区							
３号住居址	49	隅丸方形(不整)	6.2×6.7	N26°W	４本柱・柱間枕石炉・床堅緻	コモテ石	57
９号住居址	49			N37°E	４本柱？・床堅緻		57
10号住居址	49	隅丸長方形	×5.4	N52°W	４本柱？・柱間炉・床堅緻		57
Ｉ区							
１号住居址(イ)	50	隅丸方形	6.9×7.9	S56°W	４本柱・柱間下炉・床堅緻	紡錘車？	55
１号住居址(ロ)	50	隅丸方形	8.1×8.5	S46°W	４本柱・(イ)の拡張？		
２号住居址(土壙)	50	長方形	3.0×2.4	N23°E			
４号住居址	52	隅丸方形	8.2×7.8	N32°W	４本柱？・柱間炉	コモテ石・管玉	55
５号住居址	50	隅丸方形(不整)	4.7×3.6	S67°W	南壁側焼土		56
６号住居址	51	隅丸長方形	5.8×5.0	N53°E	４本柱・柱間下炉・床堅緻		56
７号住居址	51	隅丸方形	3.9×	N27°W	中央東壁側焼土		56
８号住居址	51	隅丸方形	5.5×5.7	N28°W	４本柱？・中央炉・床堅緻	コモテ石	56

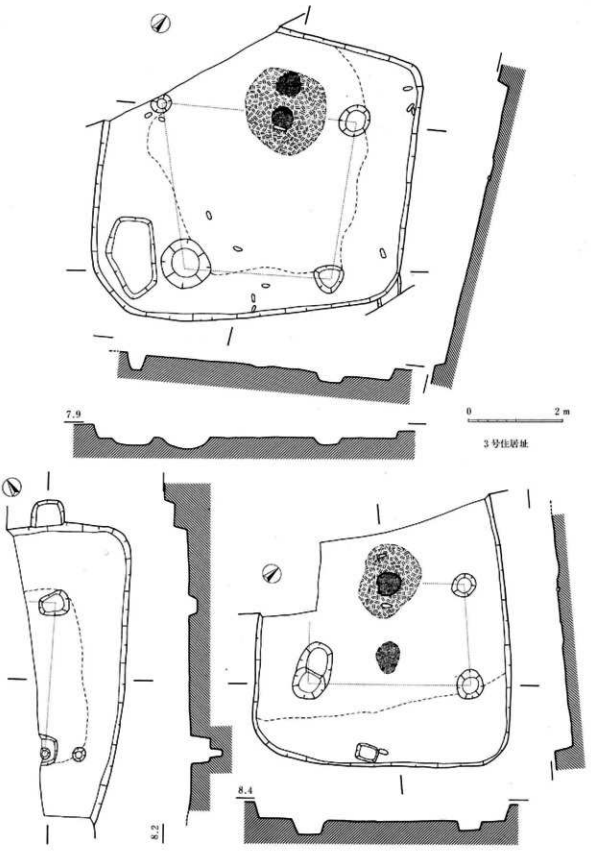
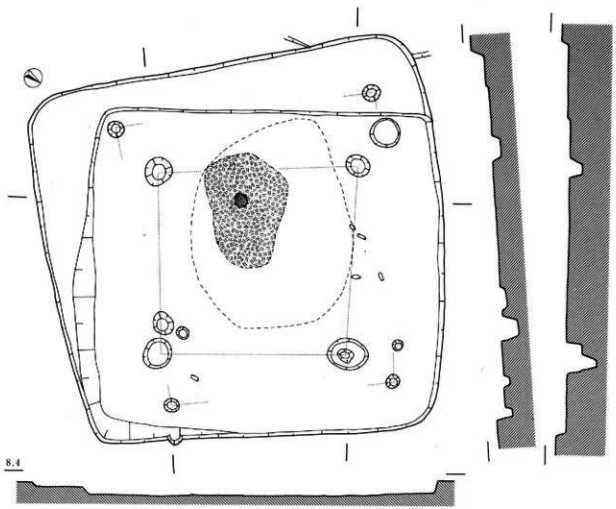
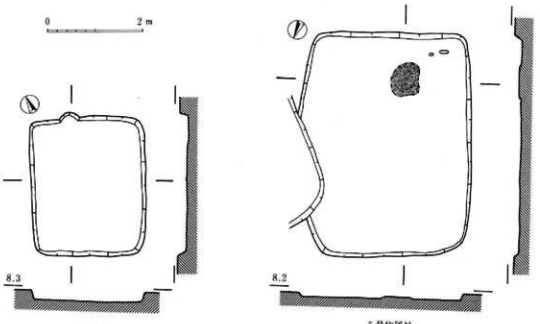


図49　H区古墳時代前期住居址実測図

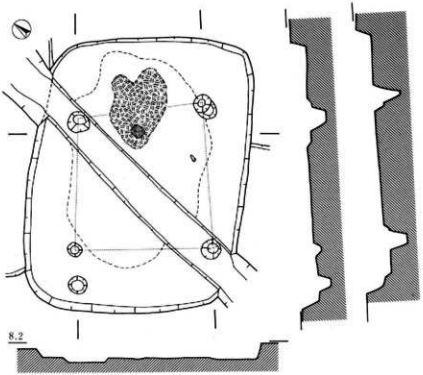


1号住居址

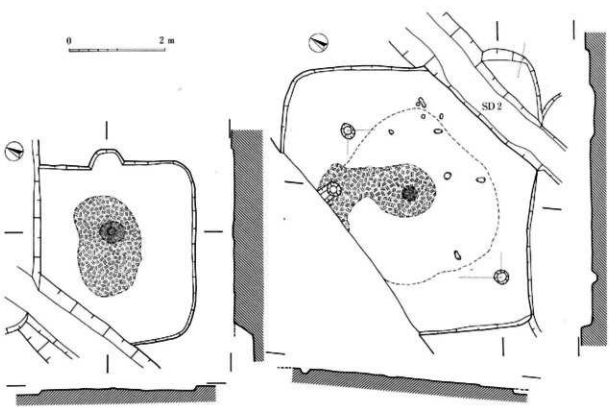


2号住居址　　5号住居址

図50　Ⅰ区古墳時代前期住居址実測図(1)



6号住居址



7号住居址　　8号住居址

図51　Ⅰ区古墳時代前期住居址実測図(2)

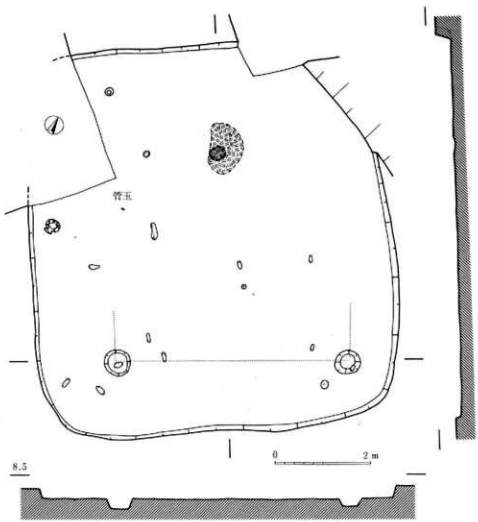


図52　Ⅰ区古墳時代前期4号住居址実測図(3)

古墳時代後期住居址観察表

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
A区							
14号住居址	53	隅丸方形?(不整)	×(5.1)	N59°E	4本柱・土坑		57
D区							
7号住居址	53	隅丸長方形	(6.8)×(4.8)	N24°W	床堅緻		57
Y区							
9号住居址	53	隅丸方形	5.1×5.5	N56°E	4本柱・カマド東壁中央・床堅緻		57
17号住居址	54	隅丸方形	4.8×4.3	N35°W	4本柱?・カマド北壁中央・床堅緻		57
37号住居址	54	隅丸方形	5.0×4.9	N15°W	4本柱?・カマド北壁中央・床堅緻		57
42号住居址	54	隅丸方形?	4.2×	N17°W			
54号住居址	53	隅丸方形?	×4.3	南北			
62号住居址	54	隅丸方形	5.0×5.4	N30°W	4本柱・カマド北壁中央・床堅緻		

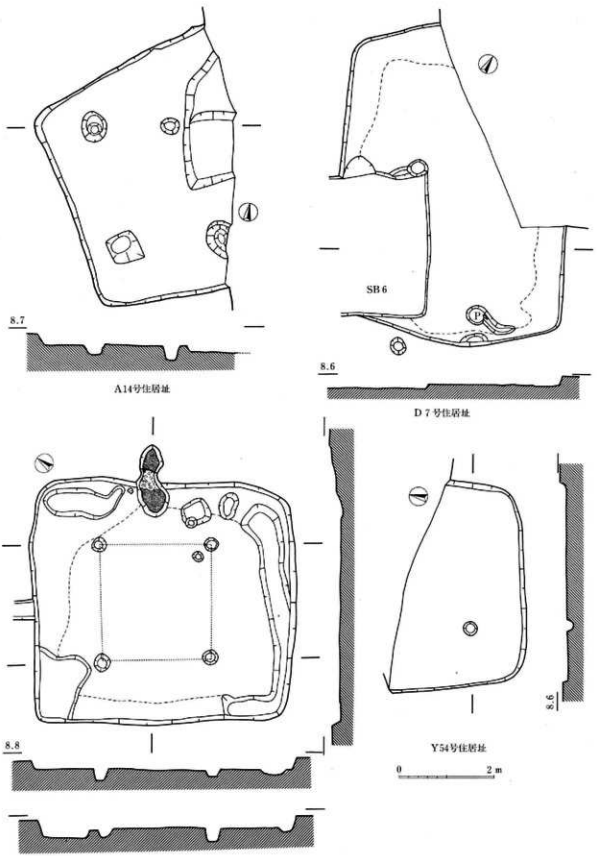


図53　古墳時代後期住居址実測図(1)

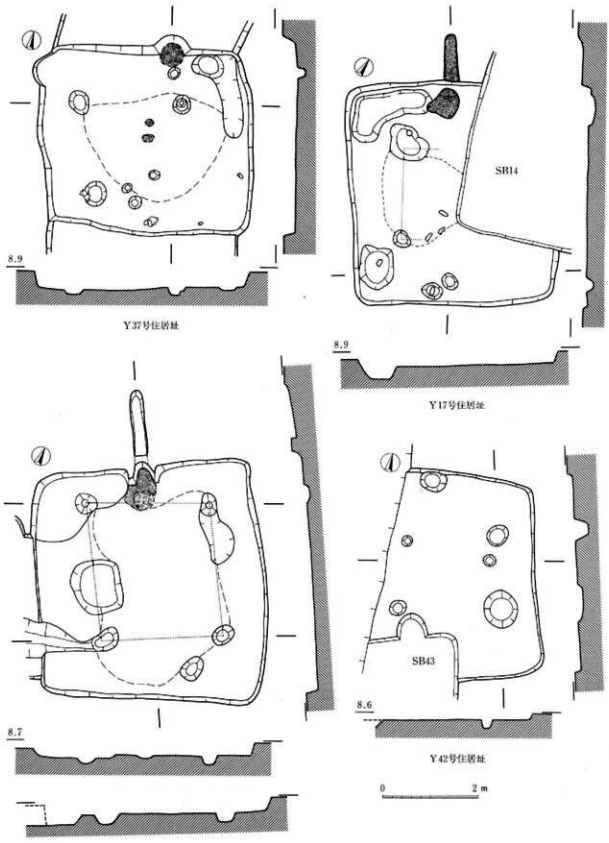


図54　古墳時代後期住居址実測図(2)

(4)遺物（前期）（図55～57）

出土土器の器種には坏・浅鉢・坩・小形丸底形土器・器台・高坏・壺・甕・高台甕がある。坏はH３・10号、Ｉ１・３・４号住居址から出土しており、Ｈ３号の平底で体部が直線的に外開する坏形のものを除き、他は丸底で底部と口縁部の接点で屈折するいわゆる兜形を呈するものである。Ｉ３号の坏は口縁部が短く外傾度も小さく、Ｈ３号のものは有段で平底になる。浅鉢はＨ３号、Ｉ１・４号に見られ、短頸・平底で小形甕形をなす。坩は小形丸底形土器の大形のものをいい、Ｈ３号、Ｉ４・７号から出土している。Ｈ３号のものは頸部が締まり、口縁部が内傾しながら立上がる点が他のものと異なる。小形丸底形土器は名称のとおりの形態でＩ４号に見られる。器台はＨ３・10号に各２個体、Ｉ４・６～８号から出土している。共に坏部から脚部に穿孔する。Ｈ３号のものは坏部を欠損し、脚部が有段になる。坏部が坏形のもの（Ｉ３号）と皿形のもの（Ｈ３・10号、Ｉ９号）があり、脚部は外開し、２段の円孔を有する（Ｈ３・10号）。Ｉ４号の脚部は内弯しながら外開する。Ｉ８号は小形の器台である。高坏はＩ４号から４個体出土するものの、器形が判明するものは坏部のみである。底部と体部の屈曲接点に鈍い稜を形成する。壺はＩ４・６号に見られ、共に有段口縁である。甕は大小２形態あり、Ｈ９・10号、Ｉ５・７・８号に小形のもの、Ｉ４・６・８号に大形のものがある。頸部がくの字形に屈曲し、口縁部は外反し、丸味を帯びた体部中位に最大径を有し、小径の厚い底部になる。高台甕はＩ４号に見られ、ハの字形の高台を付し、肩部に最大径がある。

調整はハケとヘラによるものを基調とし、ハケ整形後ヘラ調整するものが多い。特に供献用の小形丸底形土器・坩・器台・高坏にはヘラミガキが施される。

土製品に紡錘車（Ｉ１号住居址）があり、石製品には碧玉製管玉（Ｉ４号住居址、Ｚ２号溝址）がある。Ｚ２号溝址は平安時代に比定される。

(5)遺物（後期）（図57）

遺構の残存状況が良好のわりには出土遺物量が少ない。器種には坏・高坏・甑・甕があり、全て土師器で須恵器は認められない。坏は体部が内弯し椀形になるもの（A14号、Ｙ９号）と皿形のもの（Ｙ17・27号）がある。高坏はＤ７号、Ｙ９・27号から出土している。坏部は皿形で、脚部は筒状をなし、裾部の開きは少ない。坏・高坏の調整は共にヘラナデ・ヘラミガキによっており、内面が黒色処理されるものもある。甑はＦ９号土壙からの出土で、内外ともヘラナデが施される。甕の頸部はくの字に屈曲し、体部は丸味を帯びているものの長胴化の傾向にある。Ｙ17号のものは頸部の屈曲がなくなり、体部も下脹れ状になる。調整はハケナデ後ヘラナデ整形を基本とするが、ハケ目を残すものもある。

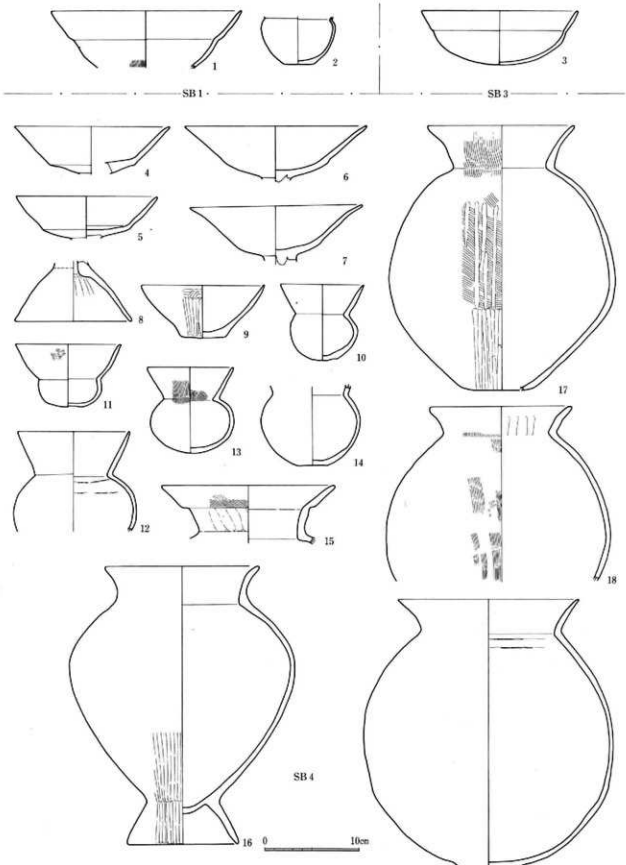


図55　Ⅰ区古墳時代前期住居址出土土器実測図(1)

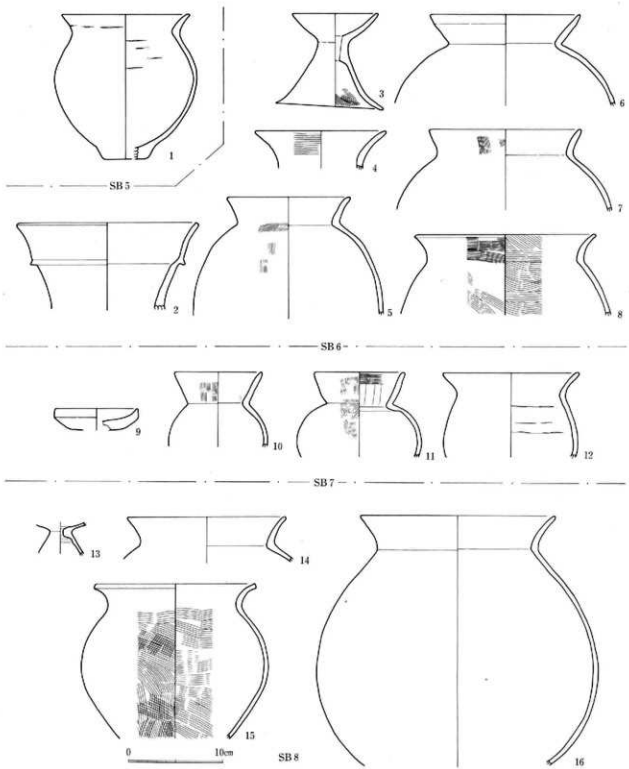


図56　Ⅰ区古墳時代前期住居址出土土器実測図(2)

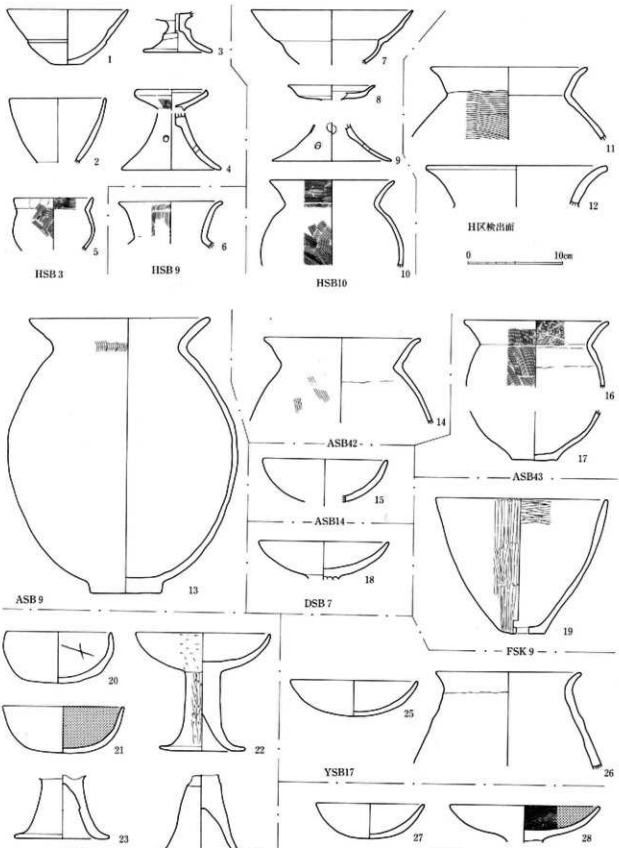


図57　（上段）H区古墳時代前期住居址出土土器実測図
（下段）古墳時代後期住居址、土壙出土土器実測図

古墳時代前期住居址出土土器観察表(1)

図番号	番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整等	備考
			I 1号住居址						
55	1	土師	坏	20.0	丸底		1/6	器面アレ・(ヘラミガキ)・外底タテハケ	床
	2	土師	坩		3.4		1/2	手捏からヘラナデ・内ナデ	床
			I 3号住居址						
55	3	土師	坏	16.4	丸底	5.7		器面アレ・(ヘラナデ)	床
			I 4号住居址						
55	4	土器	高坏	16.6	脚欠		2/3	全面ヘラミガキ	床
	5	土師	高坏	15.1	脚欠		1/4	全面ヘラミガキ	床
	6	土師	高坏	19.2	脚欠		1/3	全面ヘラミガキ	床
	7	土師	高坏	18.2	脚欠		ママ	全面ヘラミガキ	床
	8	土師	器台	坏欠	12.4		2/3	外ヘラミガキ・内ヘラナデ・ヨコナデ	床
	9	土師	坏	13.0	4.7	5.7	完形	内外ヘラミガキ	床
	10	土師	坩	8.8	丸底	8.1	完形	内外ヘラナデ	床
	11	土師	坏	11.4	丸底	6.7	完形	ハケのちヘラナデ・内ヘラナデ・底凹む	床
	12	土師	坩	12.0			1/2	ヨコナデ・ヘラナデ	床
	13	土師	坩	9.1	丸底	9.2	完形	ハケのちヨコナデ・内外ヘラナデ・ナデ	床
	14	土師	坩		3.2		1/3	ヨコナデ・ヘラナデ	床
	15	土師	壺(甕)	18.3			ママ	外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ヘラナデ	床
	16	土師	甕	16.3	11.6	29.4	完形	ヨコナデ・外ヘラナデ・内ヘラナデ	床
	17	土師	壺(甕)	15.5	5.5	28.0	完形	外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ヨコナデ・ヘラナデ	床
	18	土師	壺(甕)	14.8			ママ	外ハケのヘラナデ・内ヘラナデのちヨコナデ・ヘラナデ	床
	19	土師	壺(甕)	19.1	5.4	29.1	1/4	ヨコナデ・外ヘラナデ(ミガキ)・ヘラナデ	床
			I 5号住居址						
56	1	土師	甕	13.5	4.6	15.3	1/2	ヨコナデ・(ヘラナデ)	床
			I 6号住居址						
56	2	土師	坩	18.6				ヘラナデ(ミガキ)	床
	3	土師	器台	9.0	11.4	10.3	2/3	ヘラナデ(ミガキ)・脚内ナデ・ハケのちナデ	床
	4	土師	壺(甕)	12.8			1/2	外ヨコハケのちヨコナデ・内ヨコナデ	床
	5	土師	壺(甕)	12.9			1/3	ヨコナデ・外ハケナデのちタテヘラナデ	床
	6	土師	壺(甕)	16.0			1/3	外ハケナデのちヘラナデ・内ヘラナデ	床
	7	土師	壺(甕)	16.1			1/3	外ハケナデのちヘラナデ・内ヘラナデ	床
	8	土師	壺(甕)	19.0				ハケナデ・外ハケナデのちヘラナデ	床
			I 7号住居址						
56	9	土師	器台	8.8	脚欠		1/2	(ヘラミガキ)	床
	10	土師	坩	9.0			1/4	外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ヘラナデ	床
	11	土師	坩	9.4			1/3	外ハケのちヨコナデ・ヘラナデ・内ハケナデ・ヘラナデ	床
	12	土師	甕	14.5			1/3	ヨコナデ・ヘラナデ	床
			I 8号住居址						
56	13	土師	器台				1/2	ヘラナデ(ミガキ)	床
	14	土師	壺(甕)	16.7			ママ	ヨコナデ・(ヘラミガキ)	床
	15	土師	壺(甕)	16.8			1/3	ヨコナデ・ハケナデ・ナデ	床
	16	土師	壺(甕)	20.1			1/2	ヨコナデ・外(ヘラミガキ)・内ヘラナデ	床

古墳時代前期住居址出土土器観察表(2)

図番号	番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整等	備考
H 3号住居址									
57	1	土師	坏	12.8	3.2	5.9	1/3	外ヘラミガキ・沈線文・内ヘラナデ	床
	2	土師	壇	10.3			1/3	タテヘラミガキ	床
	3	土師	器台	坏欠	7.0		2/3	ヘラナデ	床
	4	土師	器台	3.7	10.4		ママ	坏外ハケナデ・ヘラミガキ・内ヘラミガキ・脚(ヘラミガキ)	床
	5	土師	鉢?	8.4			1/4	口縁指圧痕・外ハケナデ・内ハケナデ・ナデ	床
H 9号住居址									
57	6	土師	壺(甕)	10.8			1/4	外ハケナデのちヘラナデ・内ヨコヘラナデ	床
H10号住居址									
57	7	土師	坏	17.0			1/3	外ハケナデのちヘラミガキ・内ヘラミガキ	床
	8	土師	器台	10.0	脚欠		2/3	ヘラミガキ	床
	9	土師	器台	坏欠	12.7		1/6	外ヘラミガキ・内ヘラナデ・2段穿孔(9孔)	床
	10	土師	甕	13.2			1/6	外ハケナデ・内ナデ・指圧痕	床
H区 検出面									
57	11	土師	壺(甕)	16.4			1/3	ヨコナデ・外ハケナデ・内ヘラナデ	
	12	土師	壺(甕)	19.0			1/3	(ヘラナデ)	

古墳時代後期遺構出土土器観察表

図番号	番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整等	備考
A 9号住居址									
57	13	土師	甕	19.3	7.5	29.3	2/3	ヨコナデ・外ヘラナデ(ミガキ)・内ナデ	床
A14号住居址									
57	15	土師	坏	13.0	丸底		1/3	ヘラナデ(ミガキ)・底ヘラケズリ・ヘラナデ	覆土
A42号住居址									
57	14	土師	甕	16.4			1/3	ヨコナデ・外ヘラナデのちナデ・内ナデ	覆土
A43号住居址									
57	16	土師	甕	15.2				外ハケナデ・内ハケナデのちヨコナデ・ヘラナデ	覆土
	17	土師	甕		4.7		1/4	ヘラナデ	覆土
D 7号住居址									
57	18	土師	坏	13.6			1/6	ヘラミガキ	覆土
F 9号住居址									
57	19	土師	甑	18.0	4.5	14.3	完形	外タテヘラミガキ・内ヨコヘラミガキ	覆土
Y 9号住居址									
57	20	土師	坏	11.3	丸底	5.4	1/2	外ヘラケズリのちヘラミガキ・ヘラミガキ・ヘラ刻文	カマド
	21	土師	坏	13.0	丸底	5.0	1/3	ヘラミガキ・内黒色	カマド
	22	土師	高坏	14.2	9.1	12.6		外ヘラケズリのちヘラナデ・内ヘラミガキ	カマド
	23	土師	高坏	坏欠	10.3		ママ	外タテヘラミガキ・内ヘラナデ	カマド
	24	土師	高坏	坏欠	9.4		ママ	外タテヘラミガキ・内ヘラナデ	カマド
Y17号住居址									
57	25	土師	坏	13.4	丸底	3.8	1/4	ヘラミガキ	床
	26	土師	甕	15.2			1/3	ヨコナデ・外ヘラナデ・凹凸・内ヘラナデ	床
Y37号住居址									
57	27	土師	坏	11.4	丸底	3.7	1/3	外ヘラミガキ・内ヘラナデ・底ヘラケズリのちナデ	覆土
	28	土師	高坏	15.9	脚欠		1/2	ヘラミガキ・内黒色	覆土

3　奈良時代の遺構と遺物

(1)遺構の分布（図58）

古墳時代後期よりも分布範囲を広げるものの密集度は低く、C区・Z区より以北は散発的なありかたを示す。集落の主形成は南徴高地に求められるが、B10・13号住居址が重複関係にある他は単独で散在する。重複する住居址も遺物の混在を考慮すれば単独遺構の可能性がある。A区からB区にかけて住居址の集中が見られる。

(2)住居址

A区5軒、B区3軒、C区2軒、E区・F区・Y区各1軒、X区3軒の総計16軒検出したが、全形態を露呈できたのはE区とX区の2軒にすぎない。

形態は方形を基本とする。規模は小形のものが多くE区17号住居址の主軸3.1m・短軸2.9mを最小に、B10号住居址の主軸5.7mを最大計測値とする。一辺3m代5軒、4m代6軒、5m代2軒である。

主軸方向は西に偏するもの7軒は22°～35°の間にあり、東に偏するものは31°～80°間に散在する。

主柱穴は4個方形配列が想定されるが、それらしきものはX12号住居址に認められるにすぎない。住居址の小形化に伴なう現象であろう。

カマドは主軸壁中央に設置されるが、A15号住居址のみ右に若干偏している。形態は未検出の遺構が多いので明確ではないが、X23号住居址では粘土製両袖形態である。多くはこの形態のカマドであろう。A37号、C2号住居址は突出カマドでこの形態の出現に注意する必要がある。

床面は平坦で部分的に堅緻である。

(3)掘立柱建物址（図102・103）

A区・D区・F区に各1棟、X区2棟の総計5棟を確認した。柱穴から時期を見極める遺物の出土が認められなかったが、他の遺構との重複関係から奈良時代のものと推定する。ただし、A区のものは同時期どうしが重複しており後出の可能性がある。A1号は3間×2間の建物址が予想されるが、長軸（東西）間の掘方は他と趣を異にし柱穴様になり、1間×2間の形態になるかもしれない。F1号は方形を呈し、東西軸は3間形態の掘方である。X区には2か所で検出されている。1号の北隅は補修のためか掘方が重複しており、2号は3間×1間を4間×1間に建て替え増築している。

(4)遺物

該期の遺物の特徴は須恵器の多量出土をあげることができるが、本遺跡の場合はその出土量が少ない。また、底面を回転ヘラケズリにより仕上げ高台を付す特徴的な坏は認められない。坏はロクロからの切離しをヘラオコシによるものと回転ヘラ切離があり、A9号住居址の須恵器坏に代表する。土師器甕も烏帽子形態の特徴的な器形で、口縁部が大きく外開するものの明確な頸部を形成しなく、体部の丸味が少なく長胴化し、平底になる。最大径は口縁部にあるものが多い。調整は外面タテハケ、内面ヨコハケが多用される一方、外面の頸部以下がタテヘラケズリを施されるものも多くなる。須恵器の器種には坏・高台坏・蓋・浅鉢・横瓶・甕がある。土師器には坏・盤・甕の器種がある。

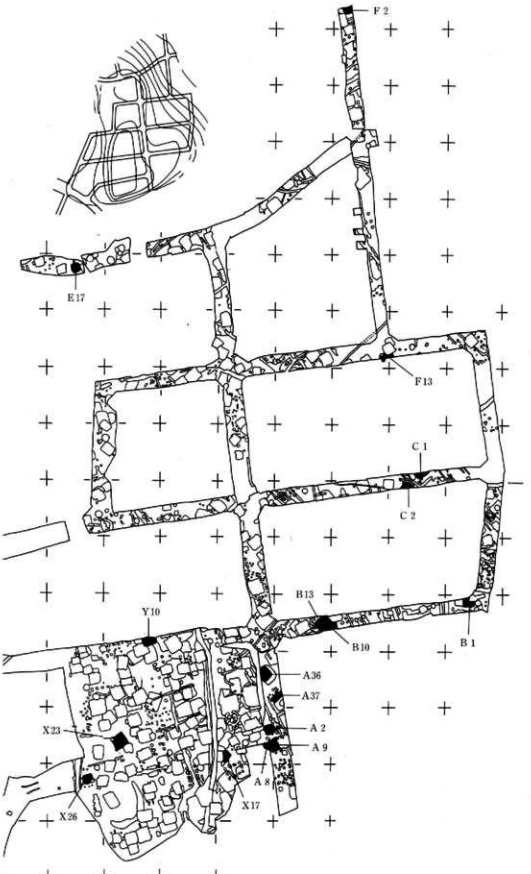


図58　奈良時代住居址分布図

4　平安時代の遺構と遺物

(1)遺構の分布（図59）

Ⅲ章4節で記載した事項はおおむね該期にあてはまる。ただし、遺構の分布範囲は調査地の全域に認められるものの、居住域は高野神社参道を境にその西側には全く展開が見られない。住居址の密集度を詳細に観察すると、調査地の南側微高地上に広範囲な集落が認められ、他は小規模な密集を見せる。すなわちZ区から南、B区西のA・X・Y区に大きな密集域がある。A区北とW区東・D区西の交差部、F区北側を中心に、G区南側からA区にかけ部分的な密集域を見出す。

(2)住居址（図60～101）

形態は多岐にわったており、基本形態は方形から長方形を基本とするものの、カマドの存在や形態規模が判明するもののみ抽出すると、主軸より対軸の数値が大きいものが多い。

規模は形態が判明しているもののうちY48号住居址の主軸6.2m・対軸6.3mを最大にして、X24号住居址の1.8m・1.7mの数値を最小とする。大多数は小形化し一辺3～5m内に集中する。計測した72軒のうち5m以上の大形に属するものは17軒にすぎない。F区（10号）・W区（2・8号）Z区（1号）に点在するのに対し、他は南側微高地上に散在する。A16・38・39・43号、X9・43号、Y4・6・14・39・48・61・68号各住居址がこれにあたる。この在り方を見ても本遺跡の中心がここにあったことを伺わせる。3m未満の住居址が9軒存在する。これらはカマドを有し、居住形態であるが、家族生活をするには余りにも小さすぎるのではないかと思われる。作業小屋であろうか。ちなみに分布はA区北（25号）・B区東（3号）に各1軒、X（19・20・24号）・Y（19・21・27・56・65号）区に8軒認められ、集落の中心付近に存在するものは3軒にすぎず、他の5軒は西縁部に位置することからして住居と異なった用途を考える必要があるかもしれない。

主軸方向が判明している98軒のうちN－W間にあるものが51軒あり、9°～45°間に46軒が集中し北壁カマドを構築する。一方、N－E間に38軒存在するものの前者よりもばらつきがあり、60°～81°に密集し23軒を数える。西壁・南壁カマドを有するS－W間に2軒、S－E間に3軒あるにすぎなく、特異な存在である。ちなみに北壁カマドで南北軸線に4軒ある。

主柱穴が確認された住居址はE12号、X33号、Y26・68号の4軒にすぎなく、4m後半代以上数値の大形に属する住居址である。他の住居址は小形のためか明確な小屋組痕は確認されない。

カマドは北壁または東壁に構築される例が多いことは前述した。その多くの形態は石芯製両袖形のものと推定されるが、石組を残存しているものはY53号住居址のみで、構築石材の散在が認められた住居址はF1号・W11号・X44号・Y3・26・41号の各住居址にすぎない。粘土製両袖形態で確認されたものはX23号・Y67号住居址を抽出する。突出カマドの検出例も多く、A37号、B3号、C2号、D2号、F7・9号、G2号、W8号、Z1・2号、X12・14・19・22・35・43号、Y1・15・18・21・23・28号の22軒の住居址に造られる。これらは壁の中心付近に設けられるのが通常とするが、A区・D区のものは南西隅に構築される。突出部壁面および火床は焼土塊化しており、A37号住居址には袖石が配される。隅（コーナー）カマドはA40号・Y26・45・58・60号住居址が南東隅に、A12・15号住居址は北東隅に、A42号・Y2号住居址が北西隅に、A40号・D2号・W11号・Y3号住居址が南西隅にそれぞれ設けられる。床面が堅緻でカマドを有しない住居址形態のA2・16・26号、X8・13号、Y13号等があり、作業施設と考えたほうが良いかもしれない。ただし、A16号住居址は中央部の床面の締まりが非常に良く、焼土が認められ、大形の遺構であることから集会所的な用途が考えられる。

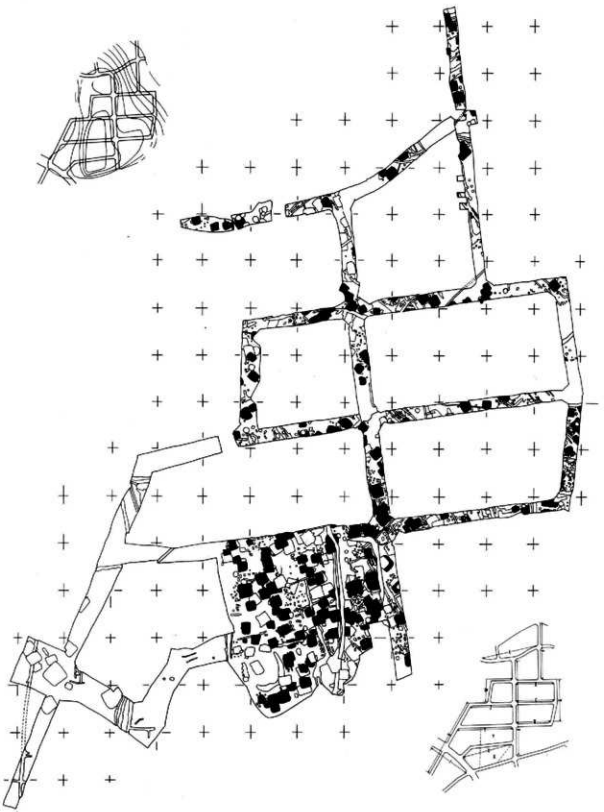


図59　平安時代住居址分布図

床面はカマド前面を中心にして堅緻なものが多い。住居址中央が堅緻で、壁下に周溝状大溝が掘られるA16号、F1・10号、W6号、X13・37号、Y13・37・38・68・70号住居址がある。湿気抜きの遺構であろうか。

(3)柱穴（土壙）群（図104）

A区に3か所、Y区に3か所確認される。共に該期の住居址が密集しない地点からの検出で、簡単な小屋組の建物址が存在した可能性が高い。調査結果から配列や規模等を見出すことはできなかった。

(4)小鍛冶址

X8号、Y48号住居址で鍛冶炉が確認されている。前者はカマドを持たないものの堅緻な床面があり、明らかな工房址である。炉は長さ60cm・深さ10cm程の十字形を呈する。後者はY48号住居址の南西に位置し、長さ43cm・深さ10cmを測り、形態は前者と同様である。底面・側面の一部は青灰色の焼土塊化している。近接して土壙状のピットが認められるものの金床石・鉄滓等は見られなかった。羽口は前述のX8号住居址から確認されている他にX15号・Y5号土壙、X12号溝址、X2号井戸址から出土している。これらは先端が高熱のため溶解しており、後端近くまで変色していることから使用済みの廃棄物である。X12号溝址からは亀の子形鉄滓や多量の小鉄滓が認められた。

(5)井戸址（図105・106）

E区とX区から石組の井戸址を各2基、計4基を検出した。X区の存在は遺構密集度からその存在が理解できるものの、E区のものは遺構が散在する中での存在で、その意義は今のところ不明である。近隣に密集する集落があった可能性もある。X区は2基の同時使用が考えられるが、E区は2号井戸址を廃棄後新たに1号を構築している可能性が高い。構築は直径2mを超える土壙を掘り、中央付近に下から石組し、角礫を小口を揃え徐々に積み上げ、隙間に拳大の河原石をつめる。底面の砂層には底を抜いた曲物を埋設する。E区・G区・Z区に盛られる大形の円形土壙も掘り抜きの井戸址と見られるが、石組井戸址に比べ浅い掘り込みで井戸としての機能および水位に疑問が残る。ちなみに調査時の水位は井戸址の底面より低く現在の地表から約2.5m下の砂利層である。

(6)土壙墓（図107）

A区5基、F区1基、X区4基の埋葬人骨を確認した。土壙の形態はA1号が不整楕円形で、A2号・X1号が隅丸長方形である他は長方形を呈する。A区のものは横臥屈葬で埋納され、X1号は伸展葬である。F1号とX48号住居址内土壙墓が小児埋葬である他は成人である。副葬品類は見られない。X4号は不整円形の土壙に頭部を北にした馬が埋葬される。

(7)火葬址（図107）

X区の西側で居住域範囲外から3基検出した。平面形態は凸形を呈し、機能的には本体部と空気取入坑部に分かれる。本体部は2号が隅丸長方形を呈するのに対し、他の2基は長方形になる。主軸は南北方向にあり、50cm内外の規模になる。検出時の深さは5～15cmと浅かったが本来はもっと深い土壙が想定される。空気取入坑は本体中央部に溝状に堀込まれ西壁から突出し、底面には炭化物が厚く堆積していた。突出部を除き各壁は強い火熱を受け焼土塊化する。火葬骨は小骨片が数点確認されているにすぎないが、小児用火葬施設と考えている。

(8)溝址（図119～123）

Y1号溝址（117図）はX・Y区を南北方向に縦貫する大規模な溝であるが、Z区には至っていない。用途不明の遺構が多い中で、南側微高地から旧千曲川の低地に流れ落す排水の用途が考えられる。X2号溝址は北側に橋状の高まりを残し他は円形を呈するが、内部は不規則な土壙やピットが掘られているのみで特別な施設を見出すことができなかった。

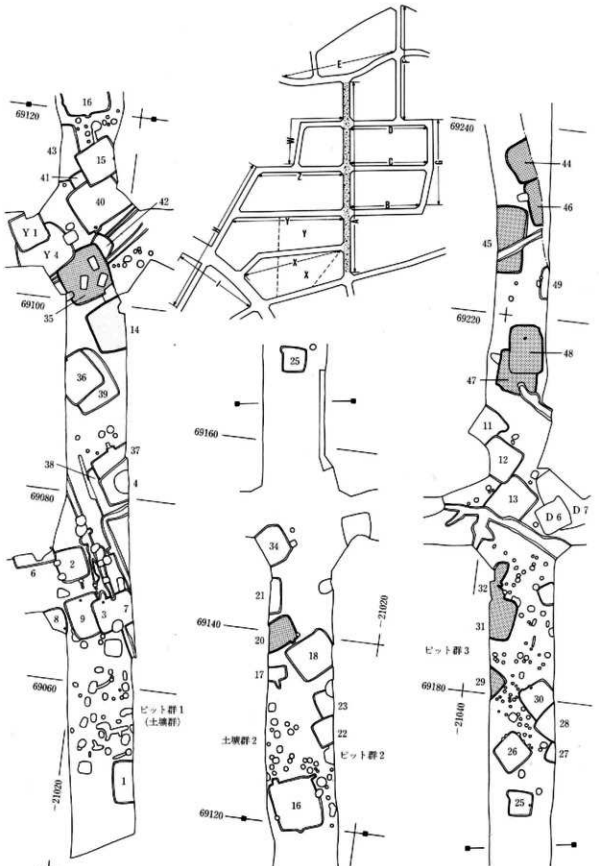


図60　A区住居址・土壙ピット群分布図（粗アミ部弥生時代）

奈良・平安時代住居址観察表(1)

遺構名	図番号	形態	規模(m)	主軸方向	内部施設等	遺物	図番号
A区							
1号住居址	61	方形?	4.5×	N14°W	南西隅焼土		
2号住居址(奈良)	61	方形	3.4×3.3	N33°W	床堅緻		124
3号住居址	61	隅丸長方形?	×3.5	N55°E	床堅緻		124
4号住居址(土壙)	61	台形?	×3.8	N48°E			124
6号住居址	61	方形?	4.4×	N69°E	東壁カマド・床堅緻	灰釉椀	124
7号住居址	61	隅丸長方形	3.5×4.4	N27°W	北壁西側カマド・床堅緻・各隅柱穴?	刀子・砥石	124
8号住居址(奈良)	62	隅丸方形?		N60°E	東壁中央?カマド	棒状鉄	125
9号住居址(奈良)	62	隅丸方形	4.4×4.4	N27°W	北壁中央カマド		124
10号住居址	62	隅丸方形	3.9×4.2	N27°E	北壁中央カマド		125
11号住居址	62	方形?		N54°W			125
12号住居址	62	隅丸方形	3.9×4.0	N26°E	床堅緻・北東隅焼土		125
13号住居址	62	方形	4.2×4.7	N61°W	床堅緻・西壁カマド		
15号住居址	63	方形	4.2×3.8	N49°E	東壁南側焼土		125
16号住居址	63	隅丸方形	5.5×5.1	N20°W	床堅緻部を除き大周溝状	釘?	126
17号住居址(土壙)	63	長方形	2.1×1.4	N70°E			
18号住居址	63	長方形	4.9×4.1	N47°E		釘?	
21号住居址	63	方形?	3.8×	N 8°W			
22号住居址	63	方形?	×2.7	N43°E			125
23号住居址	63	方形?					
25号住居址	64	方形	2.4×2.7	N81°E	東壁カマド・床堅緻・L字状配石		126
26号住居址	64	方形(不整)	3.3×2.8	N34°E	床堅緻		125
27号住居址(土壙)	64						
28号住居址	64	方形?			土壙状掘り込み		125
30号住居址	64	長方形?	×3.1	N35°W	北壁中央カマド		126
33号住居址(土壙)	64	隅丸方形?	×2.2	N46°E			
34号住居址	64	隅丸方形?					126
36号住居址(奈良)	65	方形	4.7×4.6	N31°W	北壁中央カマド・カマド周辺堅緻		126
37号住居址(奈良)	66	方形	5.5×	N24°W	北壁突出カマド・袖材・カマド周辺堅緻		126
38号住居址	66	隅丸方形	6.0×	N21°W	37号と重複		
39号住居址	65	隅丸方形	5.5×5.3	N31°W	36号と重複・床中央炭化物		
40号住居址	65	長方形	×4.7	S42°E	南東隅突出カマド・カマド周辺堅緻	灰釉椀	126
41号住居址	65	方形?			15号・40号と重複		126
42号住居址	65	隅丸方形?	2.8×	N49°W	北西隅焼土・構築石材		126
43号住居址	65	隅丸長方形?	5.9×	N30°W	床堅緻		
49号住居址	65	隅丸方形?	3.5×	N14°W		灰釉椀	

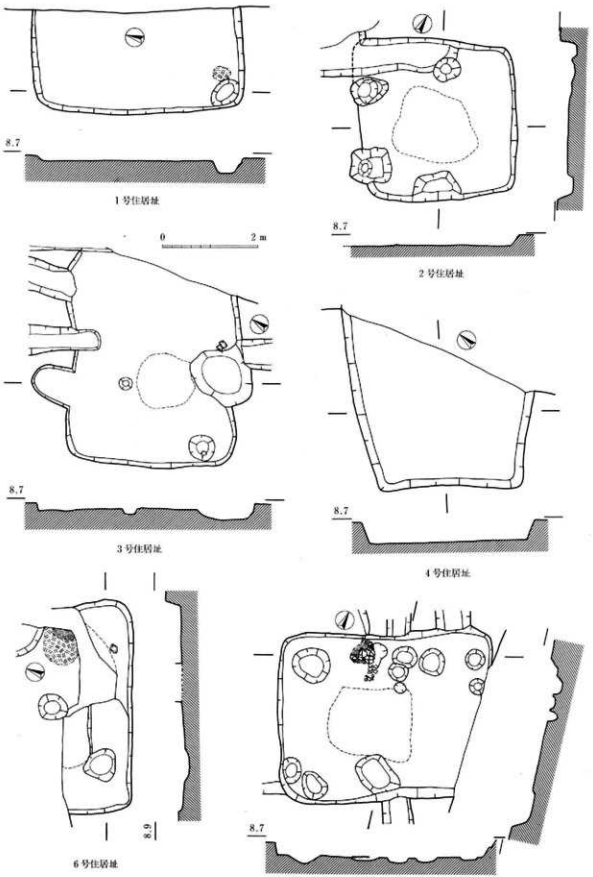


図61　A区住居址実測図(1)

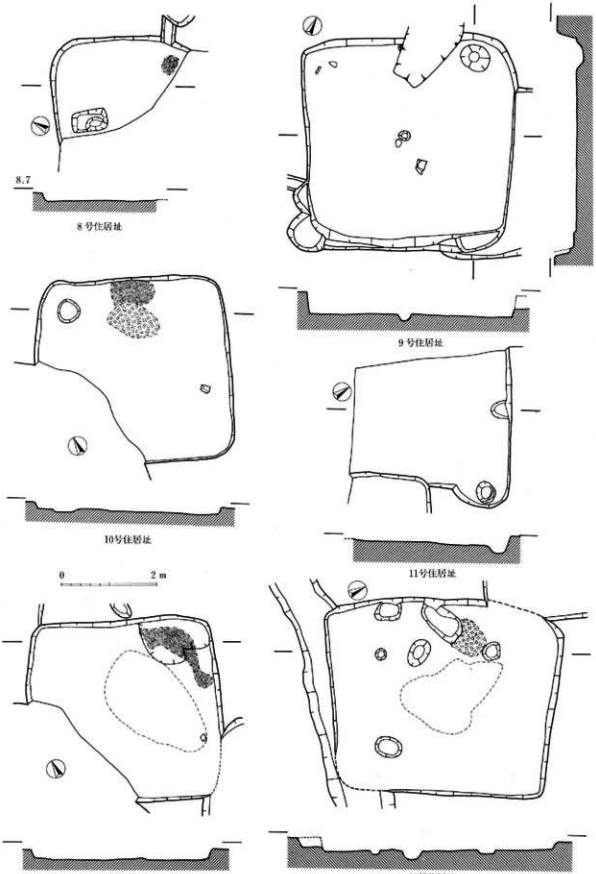


図62　A区住居址実測図(2)